

スチームパンクダークヒーロー悪役令嬢

ATライカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

霧の都のマジ

という乙女ゲームがあった。

19世紀ロンドンをモデルにした、ロンディニウムを舞台に主人公であるシャーロットが様々な怪事件を解決するという内容のADV。そんな世界の悪役令嬢、ソフィア・ロングフェローに転生してしまった主人公。

彼女は最初さつさとトンズラしようとしていたが、はたと気付く。気付いてしまった。

これ、本当に世界征服できるんじゃないかと。

蒸気機関、飛行船、電信、ダイナマイト、ボルトアクションライフ……西部開拓、東方問題、諸国民の春……全てがソフィアの頭の中にはあった。

これは世界征服を目指して暗躍し、自身の利益を最大限に追求し続け、ゲームと歴史の歯車が狂っていく物語。

夕陽が差し込む部屋の中、ソフィアは彼女の背景からは考えられないほど酷く簡素な椅子に座りながら言った。

「正直、世界が私の物にならなくなったっていいんだ」

シャーロットは彼女に問いかけた「なら、なぜ」と。彼女は楽しそうに笑う。

「それはね——」

カクヨム・なろうにも投稿しています

目次

序章

プロローグに代えて、幕引きの始まり | 1

悪魔召喚 | 6

悪役令嬢のやり口 | 13

悪魔との契約 | 21

クリアランス・前編 | 29

クリアランス・後編 | 38

研究は悪だくみ | 49

鉄道の夜明け | 59

経過 | 69

第一章

エルフの騎士が丘の向こうからやって来る | 77

出会い | 85

人探し | 94

潜入 | 105

戦闘 | 116

看破 | 130

突入 | 139

暴露 | 150

出航 | 161

第二章

勇気を出して、貴女に話しかけた | 168

王女殿下 | 174

再会 | 184

卒業	242
エクソシスト	232
納得	223
闇夜	212
急転直下	205
日常	196

序章

プロローグに代えて、幕引きの始まり

豪華なオペラハウスの舞台に一人の女性が立っていた。

モダンなドレスを着て、人好きのする澁刺とした笑顔を湛えた彼女にはスポットライトが当てられており、まさしく主役の舞台女優と言った様子だった。

「貴女が……貴女こそが29番目の悪魔、アスタロトだ！」

そんな彼女へと鋭い声が飛んでくる。

男性にしては高く、女性にしては低い声。暗い観客席からだった。そして、カツカツという足音が聞こえ、やがて一人の美丈夫が壇上に向かっていく。インバネスコートを着たいかにも探偵然とした彼が壇上で女性と相対すると、女性は笑みを深めながら頷く。

「ええ……ええ。認めましょう」

その言葉に美丈夫は失望と悲しみに顔をしかめ、逆に女性は先ほどの人好きするような笑みから不敵でエスプリの利いた血気溢れる微笑みを湛え始める。

「確かに、私が最後の一柱だよ」

「どうして……悪魔なんかと契約したんだ」

美丈夫が声を絞り出すようにそう問いかけると、女性は腕を組み、自身の野望を言語化するために頭を働かせ始める。

「私はね。世界が欲しいんだ」

「それは……どういう意味だ？ルシファーは力によって世界を滅ぼす者だろう」

やがて吐き出された言葉の固さと、およそ今まで知っている彼女のものとは正反対の仕草をする女性に、美丈夫は狼狽えながら言葉を返す。

「知りたい？」

美丈夫が恐る恐る頷くと、女性は両手を大きく広げて高らかに歌い上げる。

「私は先ず、シエフィールドとリバプールを鉄道で繋げた。何をすることも鉄が必要だからね。まあ、シエフィールドの近代化が難しかったのは誤算だったが。」

それからすぐに、マンチエスター、バーミンガム、ロンディニウム。これら主要都市を鉄道で繋げて、それから電信を張り巡らせて私は全イングランドのロジステイクスを手に入れた。

人々は日の出から日の入りの間に、イングランドを縦断することが可能になった。イングランドの端と端にいる人々が数分で連絡を取り合うことが可能になった！

ターンパイク・トラスト？あんなものメじゃない!!蒸気機関は素晴らしいパワーを秘めていた!!予想以上だった!!複雑な線を引けるようにしていたのは僥倖だった!!

その上、南ウエールズには資本を投入すれば投入するほど跳ね返ってきた!!グラスゴーでは無限に船を作れた!!コンテナも!!

世界を変えたのは蒸気機関じゃない!!コンテナとすらいえる!!一番大切なのは「繋がり」だ!!ある地点と地点を効率よくつなげるのが重要なんだ!!」

「それは貴女の父親の事業だろう!!」

段々ヒートアップしていく女性に美丈夫が鋭く反論すると、彼女は溜息をついて、それから落ち着いた口調になる。

「あの男にこんなことが出来るわけないだろう。全部私だよ」
「嘘だ」

「嘘じゃないよ。私は5歳のころにダイナマイトを作ったんだ」
女性の言葉に美丈夫が絶句する。

「それが——」

「ああ、世界を手に入れるって話。まだ終わってなかったね」

美丈夫の言葉を遮り、女性が静かに語り始める。

「私はイギリスを手に入れた。だが、それだけじゃつまらない。

手に入れるなら世界だ。それもヨーロッパ世界ではない、新大陸も、アジアもだ。

「それには何が必要だと思う?」

「……」

「航路だよ。だから私はスエズ運河を作った。予想外に簡単で拍子抜けしたよ。オスマンがギリシア独立戦争で派手に負けたからなあ……。いや、負けさせたんだけど。これで帝国を含めてヨーロッパからインド、中国へ驚くほど簡単に行くことが出来るようになった。かつての大西洋の三角貿易のように、この三点で密な貿易が自由競争的に行われ、その貿易の度に利潤がスエズに落とされている。」

次は……パナマだ！」

女性が美丈夫に向かって指をさす。

「ロンディニウムから始まり、ジブラルタル、スエズを抜けてインドに行く。」

インドから、シンガポールを抜けて中国へ。もちろん、オーストラリアでもいい。いや、オーストラリアは資源が豊富だからな！ここがいいだろう。

そして、ハワイやアメリカ西海岸を経由して太平洋を横断し、パナマから大西洋へ。

そうすればもう世界一周だ!!!

スエズとパナマ、この二つの運河があるだけで3割近く世界が小さくなる!!!

故に世界各国ほとんどすべての船はこのいずれかを通る羽目になる!!!

それを私が!!いや、帝国が掌握すれば!!世界を獲れる!!海洋帝国の誕生だ!!」

女性の怒声に迫るほどの熱弁に、美丈夫は一步後ずさり、そして意を決する様に目を閉じる。

「それが……」

美丈夫が目を開けると、そこには力強い意志の力が宿っていた。

「それが、ソフィア・ロングフェローと言う悪魔の全てですか」

ソフィア・ロングフェローと呼ばれた女性は楽しそうに手を合わせ、語ってみせる。

「ふふふ……まだ……まだもう一つ先がある。」

確かに、王室や議会の連中は海洋帝国構想を理解していたし、その重要性はますます高まっていくのを実感している。その証拠に、世界中の最短航路を押さええるように着々と軍事拠点が作られている。

だが、きつと、帝国はこれから100年もしない内に没落する。施設の老朽化、新たな資源、新たな産業、新たな価値観との競争に負ける。

だから、私がいる。

私が、その競争の全てに打ち勝つ。

帝国を勝たせる。

そうすれば、帝国は私に跪かざるをえなくなる」

ソフィアの静かだが確信に満ちた声に美丈夫がため息をつき、コートの内側から柄の長いナイフを取り出し始める。

「……貴女は凄まじい悪魔だ。力で世界を征服しようとしたルシファーとは違い、知恵と金で世界を征服しようとしている」

そして、彼はナイフを抜き放った。

「お前ほど危険な悪魔はいない！ここで滅させてもらおう！」

ナイフの刃は光り輝き、ロングソードほどの刃渡りとなる。その切っ先がソフィアに向けられると、彼女は相貌を崩し始め、体を逸らしながら大声で笑い声をあげ始めた。

「ふふふ……あはは……あーはっはっ!!」

「何が可笑しい!?!」

ソフィアはホールに笑い声を響かせ、やがて満足すると目の端の涙をぬぐう。

「何か勘違いしているようだ」

一歩美丈夫に近づく。

「私は——」

笑みが、最初のころのような人好きのする柔らかいものへと変わる。

「私はね——」

そして、光り輝く剣を掴むと、自身の喉を貫かせた。

「悪魔なんかじゃないんですよ」

「なっ!!」

悪魔なら苦しむはずの刃にソフィアは一切顔を歪めず、その事実
に美丈夫は目玉が飛び出さんほどに目を?く。

「ねえ、ハーロック。いいえ、シャーロット・ホームズ。素敵な探偵さ
ん」

美丈夫のハーロックと言う名前を、そして、彼の本当の名前を続け
て呼ぶ。

「私が悪魔じゃないなら、どうするつもりなんですか?教えてくれま
せんか?」

ソフィアは天使のような笑顔を親友のシャーロットへと向けて、そ
う問いかけた。

悪魔召喚

帝国を構成するいくつかの行政地区のうちの一つロンディニウムから西にあるソールズベリー。そして、そこにあるマームズベリー侯爵の邸宅はとても静かだった。

そんな屋敷の中を、マームズベリー侯爵ジョージ・ロングフェローは、一人腕の中に子供を抱いて一人で奥へ奥へと進んでいく。歩く廊下の両脇や壁にはいささか古いものの、素晴らしい調度品が並べられていて、マームズベリー侯爵という家の力を示していた。

ジョージはやがて屋敷の一番奥、あまり使われていない部屋へと入る。そして、扉の鍵を閉めた後、石畳の床に手を付き、手で何かを探し始めた。やがて、彼はなにか文字が彫られている所を見つけると、赤ん坊を置いてから、腰からナイフを取り出し指を薄く裂く。

「っー」

思わず声を上げそうになるのをジョージはこらえ、血がにじむ親指をその文字へと摺りつけ始める。すると、ただの文字は薄く赤色へと光り始め、石畳が僅かな音をたてながらゆっくりと立ち上がっていた。その下には地下へと続く長い階段があり、ジョージは赤ん坊と共に暗い底へと降りていく。

階段を降りていくたびに、ゆっくりと鉄さびのような血の匂いが強くなっていく。ジョージはその一般的には不快な匂いに眉一つ動かさずに、階段を降りきってしまう。そして、そこにあつた粗末な木のドアを開いた。

果たしてそこには、彫像があつた。

羽の生えた、筋肉美のある肉体の身を見れば、ダビデ像のようだったであろう。

しかし、致命的にその顔は凶悪であつた。耳まで裂けた口、とがった歯、禍々しく歪曲した角を見るに、その彫像は悪魔を模しているようだった。

ジョージはその彫像の前にあつた台座に赤ん坊を乗せる。台座は何かで濡れているようで、その何かは部屋に充満する匂いの元である

うことは簡単に察することが出来た。

彼は跪いて、祈り始める。ブツブツと、悪しき聖句を唱えていき、やがて吠えるような声で叫んだ。

「来たれ……悪魔よー」

その言葉は狭い地下室で何度も反響し、やがて、音はすべて悪魔像へと吸い込まれた。

一瞬の静寂、次の瞬間、彫像はガタガタと震え始め、口から光を一切通さぬ黒い霧が吐き出され始めた。ジョージは彫像を見上げ、恍惚とした表情を見せる。

しばらくすると、霧は吐き出されきり、真つ黒な雲が部屋の上部に溜まり、嵐の日の雨雲のように形を延々と変え続けていた。

——強き魂だ。

地獄の底から響いてくるような、低く歪曲した声だった。ジョージは立ち上がり台座の上の赤ん坊を取り上げると、その霧に向けて勢いよく差し出す。

「さあ……この子に祝福をーさあー」

ジョージはこう乱暴に扱っても一切泣かない赤ん坊には一切疑問を持たず、黒い霧だけを見つめていた。そして、黒い霧もまた、その泣かない赤ん坊だけに意識を向けていた。

——契約の時間だ。

悪魔はそう言うと、ジョージは赤ん坊を掲げた格好のまますぐさま手を放して、懐から羊皮紙を取り出そうとする。奇妙なことに、赤ん坊は空中に留め置かれたままであった。ジョージは羊皮紙を取り出し、その中に書かれた契約を悪魔に見せようとする。

——ふむ。確かに受け取った。では貴様は出て行け。

しかし、彼が用意した契約はその一言によつてのみ言及された。ジョージは一瞬表情を無くしたが、すぐさま何かを察したように笑顔になると、いそいそと羊皮紙をしまいなおして地下室から出て行った。

「かしこまりました」

粗末な木のドアの外からは、石畳の階段を上る音、そして石畳が再

び閉じられる音が聞こえてきた。

黒い靄の悪魔はそれを確認した後、赤ん坊を台座の上に安置する。そして、黒い靄はやがて形を取り始め、角のある男の顔が現れる。そして、仕立ての良い燕尾服に身を包んだ体が現れた。加えて、どこから現れたのか、蛇を両腕に抱いて、彼の細く青白い指がその頭を撫で始めた。

——契約だ。

少々のひげを蓄えた口を開けば、やはりおどろおどろしい声が響く。一方の赤ん坊は、小さな手を掲げ、口を不器用に動かし始める。

「あう……」

——ふむ……これは少し不都合だな……。

悪魔がそう言いながら手の平を赤ん坊に向けて呪文を唱える。すると、黒い靄が赤ん坊のことを包み、次の瞬間その靄から小さな子供が飛び出してきた。

「おおっとー」

金髪の女の子のことを悪魔は抱き留め、彼女のことをそつと床に下ろす。女の子の年のころは10歳に満たなくらいに見え、彼女は床につくくらい金色の髪を手で巻き上げながらその先に付いた赤黒い液体に顔をしかめる。

——素晴らしい。

「ああつと……ありがとおございます?」

女の子のたどたどしい言葉に悪魔は目を細める。ただ成長させただけの赤ん坊の知能ではない。天才と呼べるものだった。時に英知を授けることがある悪魔としてはとても好ましい契約者であった。彼は蛇を撫でながら、赤ん坊のアメジスト色の目を覗き込む。

——では、契約だ。呼び出すための対価はすでに払われ、契約者は代理人たるあ奴ではなく、お前自身だ。で、あるならば、お前は何を望む?

「ええ……と……確認したいことがある」

赤ん坊はまず前提を確認したがった。悪魔はますます、この赤ん坊に期待を寄せ始める。

「私が要求を提示する、君がそれを遂行できるのであれば、その分の労働対価をもとめる。この一連が契約、という認識でいいのか？」

——然り。そして、契約は常に公正だ。
赤ん坊はしばらく考え、問いかける。

「一方で君を呼び出したのは私の父だ。しかし、君は私と契約を結ぼうとしている。これはどういうことだ？」

悪魔はその問いかけに微笑むと、先ほどジョージから受け取った羊皮紙を取り出し、その内容を抜粋する。

——君の父は、私と君とが契約することを望んでいた。しかし、君がその席に座ることを期待してはいなかった。父である彼が、考える事の出来ない君と私の契約を代行する気だったのだ。そして、君の魂と肉体を捧げ、多大な恩恵を得ようとしていた。

悪魔は羊皮紙を青い炎で燃やしていく。

——だが、そうはならなかった。君は神童だった。言葉を理解し、思考することが出来た。故に私は代理人ではなく、君と契約をする。

「なるほどねえ」

女の子は腕を組みながらうんうんと頷く。

——さあ、望みを言え。

しかし、その次の言葉に女の子は顔をしかめる。

「望み、と言ってもなあ……。とりあえず私の父がどう言うことを望んでいたのかを知りたいし、今置かれている状況がどうなっているかも全くわからない。それくらいを知るのは対価なしでもいい？」

——いいとも。

そうして悪魔は別の文字の書かれた物、羊皮紙ではなく紙でできたそれをどこからともなく取り出して読み上げる。

——どうやら、アヘンと奴隷の密売の片棒を担がせようとしたようだな。

「ええと？」

——アヘンは人に依存性、繰り返し使わせる性質がある薬物。奴隷は強制的に人が人を物品としてとて扱うことだな。現在、奴隷売買

は禁止され、アヘンも禁止の法案が通ろうとしている所だ。

女の子は腕を組み、目を彷徨わせながらやや考え、口を開く。

「私の父親は、アヘンで財を成していたけど、それが禁止になりそうだと慌てて君を呼び出した、と」

——然り。

「じゃあ、次はこの世の中の状況が知りたい」

——言葉で説明するのは時間がかかりすぎるな。

女の子のその言葉に悪魔は渋い顔をし、少しの間沈黙する。

——よし。

そして悪魔はどこからか出てきた白い布を女の子に被せ、彼女のことを抱き上げて地下室から出て行く。

階段を上がり、待ち構えていたジョージのことを視線だけで制すると、悪魔は屋敷の中のある部屋、書斎へと足を運んだ。

——期限は1ヶ月。学んでみせよ。

悪魔がそう言えば、女の子はきよきよと辺りを見渡して、やがて分厚い百科事典を引き抜いたのだった。

「ブリタニア百科事典……」

女の子がぼつりとつぶやいた。

（ブリタニカ百科事典ではないのか……）

——それを読めば大体のことはわかるだろう。しばらく時間をやる。

「わかった」

女の子は引き抜いたブリタニア百科事典を開くと、それをゆっくりと読み始める。

（ブリタニア……ロンドンではなくロンドンディニウム……）

女の子が百科事典を読むペースがどんどんと早くなっていく。飛ばし飛ばしの斜め読みではなく項目一つずつに目を通していき、その内容もしっかり理解していた。悪魔がそれを横で眺めているなか、女の子は一つの確信を深めていく。

（この世界は霧の都のマジ……それも主人公が生まれる前。父の名前はロングフェローということは、私は悪役令嬢か……）

女の子が百科事典を長い時間をかけて読み終われば、次は新聞や論文を読み始め、時々目を閉じてしばらく考え込む。これからどうするのか、そして、後ろに立つ悪魔との契約をどうするかを。

(はつきり言って、すぐに逃げたい。しかし、今すぐには無理か？父が許さないだろうし、悪魔を無条件で送還するのにも対価は必要だろうからそれを払うことも難しい)

——質問をしても良いのだが？

(だが、百科事典やら新聞を読むに違和感があるな……)

悪魔が声をかけても女の子は聞こえていないようで、彼女は一人思索の海へと潜っていく。

(現在は19世紀初めの水準。しかし霧の都のマジでは19世紀後半に近い文化水準だったはず。後30年に満たない期間でそうなることを考えると、もうすでにSLや飛行船なども普及し始めていてもよさそうだが、新聞を読む限りそうってはいない……なぜだ……?)
女の子は覚えている限りのゲームの設定を思い出していく。しかし、それを書き起こしたり口に出したりすることはできない。なぜなら、この情報を後ろに立つ悪魔に知られたくないからだ。そして、暫く後、女の子は「なるほど」と小さく呟く。

——どうした？

(アイザック博士か！確かあいつがそれらの基礎を作ったって設定があった！だから今はそう言った科学技術が無いんだ！確か、主人公よりも10歳年上だったから、私の6歳上……となると……)

女の子は猛烈な勢いで計画を立てていく。自分が知りうる知識と、霧の都のマジと言うゲームの知識、それらを総動員し、これからどう動くべきかを考える。

(もうすでに契約内容を詰める段階だから悪魔から逃げるのは難しい。ならば……)

「おい、悪魔」

——なんだ？

女の子は顔を上げて不敵に笑う。

「君の名前は？」

——アスタロト。ソロモンのグリモワールにおいて29番目の悪魔だ。

悪魔の名前を聞いた女の子は小さな両手を精一杯大きく広げ、「アスタロト。悪魔よ、私と世界を征服しないか？」

そう言っただけだった。

悪役令嬢のやり口

朝、目が醒めて、それから鏡を見る。

それはソフィア・ロングフェローの毎朝の習慣だった。

鏡の中には10歳くらいの金髪の美少女が立っていて、しかもその美少女は生後一週間、名付けられて4日ほどだというのだからその光景の不可思議さは折り紙付きだった。

「おはようございます」

「うん。おはよう」

ソフィアがぼおつと鏡を眺めていたらメイド達が入ってくる。彼女達からはほんのわずかに煤のような焦げた匂いが漂っており、その人ならざる匂いからソフィアは彼女達はアスタロトが連れて来た悪魔なのだろうと当たりを付けていた。

そんな彼女達に世話をされ、朝食を食べ終わって紅茶を飲んで一息をついている頃、執事服に身を包んだ壮年の男性がソフィアの前に立つ。彼は呼び出された悪魔、アスタロト本人が化けた姿だった。ちなみに蛇はもう持っていない。

「おはようございます」

「おはよう」

朝の挨拶を終えると、ソフィアは部屋を見渡す。部屋は簡素なヴィクトリア様式のような感じで、豪華だが一方で僅かに流行から外れた妙に古臭いものが置いてあるのが見て取れた。

そして、ソフィアはそんな部屋の端に積み上げられた紙束に視線を向ける。

「決まりましたか」

アスタロトがソフィアの視線を追ってそう言うと、彼女は紅茶を飲みながら「うん」と頷く。

「とりあえず蒸気機関と製鉄に手を出そうと思う」

「ほう」

「特許やらを見る限り、まあ、技術競争には勝てるだろう。試作品を相応に作らないとダメだろうが」

ソフィアがそう言えば、アスタロトが紙束を取ってめぐり始め、そこに書かれた設計図を読み込んでいく。知識や学問に精通する悪魔から見てもその設計図は見事なものだった。

「ジョージに言って、資金調達をさせますか」

「アヘンと奴隷で？」

「恐らくはそうなるかと」

ソフィアはカップを置いて、口元に手を当てて椅子に肘をつけて考え始める。生後一週間とは思えないほどの貫禄があり、アスタロトは彼女と直接契約をしたことは正解だったと改めて確信していた。

「いかがいたしますか？」

「……うん。詐欺でもっと短期的に大量の金を集めよう」

顔を上げたソフィアは今日の昼ご飯を決めるような気楽さで詐欺を提案した。アスタロトが続きを促すように設計図の束からソフィアに目を向ける。

「まず、君達悪魔で泡沫会社を作ってくれ。さっさと潰すから適当にね。それっぽい看板と箱があればいい。名目上やるのは投資信託。

そうだな……、ロンディニウムにやって来る人間に対する土地や家の販売とか、新しいターンパイクとか、その辺りで利益を出すと謳おう。

とにかくやることを列挙して、説明も全部ごちゃ混ぜにして、実際に行っていることを不透明にして欲しい。

それで出資金を方々から募って、その出資金をそのまま配当金として返す。ここで重要なのが、返す配当金はかなり大きくすること」

後の世でいうポンジ・スキームを堂々と提案するソフィアに、執事は頬まで切れ上がる様に口角を上げていく。

「出資者に帰ってきた多額の配当金で話題が大きくなるだろうから、それがかき集める出資金をさらに増やしていく。その都度配当金も返していく。

出資者は途中から一気に増えるだろうから、その時点で配当金を返さずに、かき集めた金を持ってトンズラ」

ぱんつと手を叩いて離し、弾けるように泡が消えるジエスチャーを

するソフィアに、アスタロトは問題点を指摘する。

「その方法で集めた金はこの家に入れることはできないのでは？」

「ジョージに頼んで出資者側に回してもらおう。最後に配当金がもらえた人間になってもらって……いや待て」

そこまでソフィアが言ってから、彼女は何かに気が付いたかのように口をつぐむ。

（ジョージ。この家の資産は彼が持っている上に、私の社会的地位も彼に依存している。関係も構築していない。これは問題だな。

そう言えば、原作ではジョージの父の価値の無い骨董品集めで家が没落した結果、密輸に手を出したんだよな……）

「ジョージを呼べ」

ゲームでの設定を思い出しながら、彼女はジョージを呼び出すようにアスタロトに促す。

そして数分後、ジョージがこれから起こる何かに対して密かに興奮した面持ちでソフィアの前に現れる。彼は仕立てのいいシャツに身を包んでいて、生贄を用意してまで悪魔召喚を行った悪人にはまったく見えなかった。

そんなジョージがソフィアの前に立つと、ソフィアはもったいぶつたようにじつくりと間を置いてから口を開く。

「さて、ジョージ。君は何を望むのだったかな？」

「は。私は外交官として各地に——」

「そういう身の上話はいい。おおよそ分かっている」

ゲーム知識を持っているソフィアはジョージの背景をほとんど知っている。

侯爵の一人息子で現在の当主。

父は突出した才能は無かった。それなのに、骨董品集めに終始して家を傾けた。

ジョージは翻って勤勉で有能であり、外交官として各国を渡りながらその辣腕を振るい、最終的にはウィーン会議にも裏方として携わった。

一方で傾いた家を立て直すことは難しく、各国を巡りながら奴隷や

アヘンの貿易を行うこととなる。

そして、その商品が禁止になることで立ち直りかけていた家がまた傾き始め、最後は父の骨董品の中から悪魔召喚の儀式を見つけ、それを実行してしまう。

(全部わかつている。分かっているからこそ御しやすい)

ソフィアは目を細めながら言葉を続ける。

「願望を端的に言いたまえ」

「金が、金が必要なんです」

「どれくらい？」

「多くの」

「具体的に」

「……」

具体的にと言われたジョージは手を所在なさげに腹や胸に当てながら目を泳がせる。それを見たソフィアはくすくすと笑う。それはまるで悪魔のようだった。

「ジョージ。私は何だ？」

「悪魔、アスタロト様、数理学の知識を与え、隠されたものを暴き、財宝へと導く存在」

「ああ、そうだ。だから、隠された君の願望を暴こうじゃないか」

ソフィアはとつくに冷めた紅茶を飲み干しながら考える。

(薄々感じていたが、ジョージはアスタロトに渡した契約書が有効で、アスタロトが私に成り代わっていると思っ込んでいるんだな。これを確認できたのは大きい)

「君は金が欲しい。そして、その金で家を立て直したい。その割には家を立て直すだけに必要な金額を把握していない。不思議な話だ、君は有能な外交官だったはずだ」

隣に立つアスタロト本人も小さくうなづく。ソフィアはカップの持ち手に指を入れ、そのまま手を放してぶらぶらとカップを弄び始める。内心ではアスタロトが紅茶のお代わりを入れてくれないのの後で注意することを考えていた。

「結局のところ君は家を立て直すなどとお題目を掲げているだけで、

その気はないんだ」

「い、いえ……伝統的なマームズベリー侯爵としての——」

「いらん。そんな建前は」

つまらなきそうにカップを弄りながらソフィアは言葉をまたも遮る。

「そもそも、だ。密貿易に手を出さないといけないほどこの家は困窮してはおるまい。まあ、土地を切り売りして必死に維持しているのは知っているが、わざわざ密貿易をするほどでもない」

ソフィアはカップをソーサーにおいて事実を突きつける。

「君はただ大金が欲しいだけだ。なぜ大金が欲しいのか？それは周りの人間よりも優位に立ちたいからだ。ただ、それだけだ」

その言葉にジョージは反論しようとするが言葉に詰まってしまふ。そして、そんな彼の顔を下から覗き込むようにしたソフィアが楽しそうに手を合わせて問いかけ始める。

「さあ、ここからは質問させてもらう。なぜ、他の人間の優位に立ちたい？」

「……多くの、裕福で怠惰な人間を見てきました。それが羨ましかったです」

「海外で？」

「海外でも、国内でも」

「嫉妬した？」

「しました。私はこんなにも苦労しているのに……」

「ここは田舎だからね。ロンディニウムに土地を持っている人たちはさぞ裕福だろう」

「……」

「だから、彼らよりも金を持って優位に立ちたかった」

「……………はい」

(よし、認めた！)

ソフィアは内心でほくそ笑む。そして、圧倒的に自分が優位に立つたことを感じ取ると、ジョージに断れない誘惑を突き付ける。

「なら稼ごうじゃないか。金を、あふれんばかりの金を、君の手で。ほ

ら、対価はもう貰っているからね」

対価と言いなながらソフィアは自分の薄い胸に手を当てる。そして、ジョージは抗えない誘惑に誘われ、ソフィアのことを凝視し始める。「金を稼ぐのは君。名誉を得るのも君。それをコンサルティングするのは……」

ソフィアは自分の胸に当てていた手を隣に立つ本物のアスタロトに向け、言葉を続ける。

「私と彼、そして無数の配下たちだ」

そして、ソフィアはアスタロトに向けた手をそのまま前に持つて行き、ジョージに差し出す。

「手を取り給え。契約の時間だ」

ジョージはおもむろに椅子に座るソフィアの小さい手の前に跪き、彼女の手を取った。

「忠誠を捧げます」

その一言で、ソフィアはにっこりと笑う。

「契約に忠誠はいらないうらう？必要なのは信頼関係さ」

（これでこの家を手に入れられたな。まずは第一段階クリアと言ったところか）

ソフィアはあくまで表面上は柔らかく、一方の内面はあくまで冷徹に思考を巡らせる。

そして、先ほどアスタロトと話していたことをジョージを交えて話すことに決めた。表立って動くのはあくまでジョージで、自分達はその裏方。金と名誉を与え続けていればジョージは便利な駒になる。ソフィアはそれを確信していた。

「さあ、空前絶後の金融詐欺を行おうじゃないか」

話題を変えるためにソフィアは手を叩いてからジョージに席に着くように促し、ソフィアはジョージにポンジ・スキームの仕組みを懇切丁寧に説明する。そして、アスタロトにも指摘されていた泡沫会社から金を持つてくるマネーロンダリングの方法を提示する。

「まず、投資会社で集めた金を別名義に移す。そして、その何者かにこの家に大量にある骨董品を売る。単純だが、これで良いだろう」

「骨董品には価値はありませんが？」

ジョージがふと思った疑問を提示する。しかし、ソフィアはむしろ骨董品だから良いのだと首を振る。

「美術品などは購入者が価値を認めたならその値段を大きく吊り上げることが出来る。確かに適正な価格はある。」

が、販売者が渋って購入者がその価格を吊り上げた場合、購入者が複数いた場合、その他の要因でいともたやすく価格は吊り上がるし、資金洗浄をしたいならこれを意図的に行える」

「つまり……、私が亡き父の物だからと渋ったことにして、価格を吊り上げた所でそれを売ることと投資会社から間接的に大金を持つてくることが出来るのですね？」

「簡単に言えばそう。実際には追跡されにくいように複数回金を移すことになるから、目減りはするだろう」

ジョージが確認をすれば、ソフィアはその理解の早さに満足そうに頷き、隣のアスタロトを紹介する様に手を向ける。

「実際に事を動かすのは彼。もちろん彼も悪魔だ。適当に自己紹介しなさい」

「お初にお目にかかります。スチュアートです。」

本物のアスタロトは執事としての偽名を名乗る。それにジョージは貴族らしく鷹揚に頷き、二人は当たり障りのない挨拶を軽く行う。それを横で聞いていたソフィアは二人の会話が終わったタイミングで口を開く。

「ジョージは美術商が取引にやってきた時に対応するだけでいい」

「はい」

「スチュアート、実際に配下を動かすのは君だ。後で詳細を詰めていこう」

「かしこまりました」

ジョージとアスタロトが了解すれば、ソフィアは満足そうに頷く。

「私たちはいらぬものを処分できるし、足りない金を稼ぐことが出来る。最高じゃないか」

「そうですね。今から楽しみです」

ジョージがニヤニヤと口角を上げてもうすぐ手に入る大金に夢を膨らませていると、そんな彼の様子に気が付いたソフィアは立てた人差し指を振って彼の勘違いを正しにかかる。

「ジョージ、君はもうすぐ大金を手に入れる。だが、それで満足してはいけない。」

金なんて持っているだけではただの紙切れだ。社会を回してさらに増やして、ついでに名誉もいただいでいこう」

ジョージがきよとんととして、そんな彼のことを鼻で笑いながらソフィアは彼に顔を近付ける。

「あぶく銭を手に入れた賢いジョージは、至極、真つ当に、清廉で、潔白な、投資をするんだ」

そしてジョージの目の前にいる、少女を模した何かは、椅子の背に体を預けながら実に楽しそうに未来を語り始める。

「最初は鉄道、同時に製鉄、その次は電気事業だ」

未来を見通し、語ってみせる悪魔もいる。

ジョージは自身の少ない悪魔の知識でそれをふと思い出した。そして、そんな悪魔はきつと目の前にいるもののようなだろう、とも思った。

「さあ、ジョージ。君は投資によって王^{King}になるんだ」

悪魔との契約

イギリス帝国の首都——この世界ではロンディニウム——における19世紀という時代は未曾有の人口増加によって様々な問題が表面化した時代だった。その問題は後のヴィクトリア朝の中期後期にかけて大規模な都市浄化が行われるまで遅々として解決がなされない問題だった。

そして、そんなありとあらゆる問題の種がバラまかれ始めている時代のロンディニウムの大通りを、一台の馬車ががらりと音を鳴らしながらゆく。

「不潔だな」

そんな馬車の中でソフィアが眉をひそめて不快感をあらわにしながら呟く。彼女の前にはアスタロトが座っており、彼は馬車の中だけでも快適に過ごせるようにとソフィアの指示で焚かれた香の管理をしていた。

「下水が整備されているとはいえ追いついておらず、工場が乱立し、その廃液も垂れ流されていますからね。ここはまだマシでしょう」

アスタロトが横目で馬車の外を見ながら言う。

レンガ造りの家々が立ち並び、歩行者用道路には水平に均された石が敷き詰められ、馬車が通る道はしっかりと固められた砂利と土で作られていた。

歩行者もそれなりの服を着て、ショウウィンドウを見ながらショッティングを楽しんでいるのが見える。世界に冠たる帝国の素晴らしい黄金の夜明けの光景である。

しかし、それでもソフィアの間からは悪い環境に見えていた。

道路には馬の糞尿が垂れ流され、そもそもその道路が砂利と土で舗装されているのもいただけない、時々見える路地にはごみが散乱しているのすら見えた。

「テムズ川沿いを走ってくれ」

「御者よ、テムズ川沿いに走りなさい」

ロンディニウム塔——現実ではロンドン塔——のある中心街を一

通り見終わったソフィアはそこから移動する様に進路を変更させる。

「馬と道路、下水システム、ごみ処理もか……」

そして、ソフィアはそう呟きながら窓の外を見ながら思索にふけり始める。

車窓を流れていくのはまだまだ発展途上の街で、あちこちで建設を行っているのが見えた。木で足場を組み、レンガを積み立て、必死に背を高く伸ばしていくのは今の成長を続ける帝国の象徴ですらあった。

そして、そんな背の高い建物の間にみすばらしい人々がいて、彼らはきつと新たな職に就けると農村から飛び出してきたのに、仕事にあぶれたり、仕事につけても低賃金で使い潰されているのは、それこそ帝国の縮図であった。

（馬を駆逐するにはやはり車が必要になるだろう。だが、それには内燃機関が必要で……、それを0から開発するにはやはり長い時間が必要になるな。）

本編開始時期に間に合わせることを考えると、自転車を作るのが精一杯か。

道路のアスファルト舗装は不可能ではない、はず。

下水処理、工場廃液には手を入れたいがそこまで手は回らないだろうな……。本編で劣悪な下水網を利用した奴が出るから今の内から対処をしたかったんだが……」

「お嬢様。テムズです」

景色を目に入れていても、見てはいなかったソフィアにアスタロトが声をかけてくる。

その声で現実に戻ったソフィアは窓の外のテムズ川を見る。

ロンドンイニウムを貫くように何度か歪曲しながら流れるその川は、人が来る前は清流だったのだろうが、今はその見る影もなく汚らしく濁っていた。何かの泡が浮き、何かの破片のゴミが浮き、時にはまだ真新しいであろう帽子が流れていく。

それを見ながらソフィアはため息をつく。

「これからもっと汚くなるんだろうな」

「でしようね。人々は更にロンディニウムに集まってきて、もはやパンクしかけているこの都市は完全に破綻し、多くの物をこの川に投げ捨てていく。

先ほど、ここはまだマシと言いましたが、そもそもどんなスラムでも今はまだマシでしょう。その内に人々は昼間でも煙に包まれる日が来ますよ」

「だろっな」

アスタロトの言葉にソフィアは頷く。

確かに、前世の歴史でもそうであつたし、霧の都のマギの設定では史実以上に多くの工場が乱立し、その煙と蒸気で昼間ですらランプを持ち歩かないと道を見失ってしまうと揶揄されていたほどだ。

だからこそ、人々は見えない何かに恐怖し、その隙について悪魔が跋扈し始めるのだ。

そして、ソフィアはその流れをゲームの時よりさらに加速させようとしていた。彼女はそれを、テムズ川の岸边でどぶ攫いをして金目の物を探している貧民を見ながらより自覚していく。

ロンディニウム塔の東を通り過ぎていく時、ソフィアは小舟に乗った人々がテムズ川の支流へと入っていくのを見た。

「あれは？」

「ジェイコブス島ですね。労働者の住むところや工場が建っています。支流の名前はネッキンガー川、そして、そこから引き込まれた水路が張り巡らされた、ロンドンの中のベネツィアですよ」

「スラムに見えるな」

ソフィアの指摘通りネッキンガー川はテムズ本流よりもさらに汚らしく、黒い何かが浮かび上がり水の色も緑色に変色していた。そして、川と家を隔てるものはただの木の部分すらあり、それも遠目には余り整備されていないように見えた。

「ベネツィアも似たような物ですよ。街に根差した水路は汚くなっていくものです」

「それもそうか」

ソフィアは納得しながら一人思う。

(ゲームの舞台にもなっていた場所を今のうちに確認できたのは僥倖だな。イーストエンドまでは足を延ばさなくていいか)

霧の都のマギで主人公が行き来した場所は多い。しかし、その位置関係者場所はデフォルメされた地図か、地の文で少ししか触れられることはなく、その上現代になればもうすでに消失した場所もあった。ジェイコブス島もその一つで、ネツキングー川も一部を除いて人目にはつかなくなってしまうのだ。

その後も馬車はロンディニウム塔を中心にめぐっていく。

何だかんだと文句を付けていたソフィアだが、現実にはジョージアン様式の様々な建物を見れば気分がよくなるのだった。

(特に、道路に面して長いテラスハウスが見れたのは良かったな。やはりああいう物は後世に残していくべきだ)

「お嬢様、そろそろお時間です」

そして、途中から観光気分楽しんでいると、アスタロトが水を差してくる。それにソフィアが一瞬眉を顰め、すぐに頷く。

「御者よ、予定していた場所へ行きなさい」

アスタロトが御者に命じれば馬車の馬の鼻をロンディニウムの外へと向ける。そして、馬車が軽快に走って行けば、やがて壊されずに一部だけが残ったロンディニウムの防壁の陰に佇む、とある建物のはす向かいで停車する。

その建物の前には市民が何人も並んで行列を作っていて、それに加えてソフィアたちの物とは別の馬車もその建物の近くに停車し、そこから降りた身なりのいい人間がその建物の中へと行列を無視して入っていく。

「かなり並んでいるな」

「小口でも良い、元本保証あり、としたのが功を奏しました」

その建物の中で行われていたのは、ソフィアが提案したポンジ・スキームだった。

身分にかかわらずに小口から投資が出来て、その配当も月利と年利で分けられて短期的に少額を儲けるか比較的長期的に多額を儲けるかも選択できた。

最初は疑う者も多く、少ししか出資金を募ることはできなかったが、事業開始から一か月が経って本当に高配当が返還されてからは人が人を呼んでいる状態となっていた。

実際に詐欺会社を運営しているアスタロトは得意満面の笑みで馬車の中から行列を眺め、口を開く。

「実際には元本保証なんでものは嘘なのに、人々は気付かないものなのですわねえ」

「このご時世、知識のある人は少ないだろうからな」

ソフィアは少しの哀れみと多くの呆れの表情を湛えながらそう言う。

そして、そんな市民と資産家たちのことを見ながら、アスタロトがわずかに低い声をソフィアにかける。

「さて、お嬢様。契約の時間でございます」

その言葉は一か月の猶予期間の終わりを告げるものだった。ソフィアは馬車のソファの背もたれに体を預けながら香炉の中の火を消す。

「私が君に望むのはもう決まっているよ」

「おっしゃってください」

「今使っているような体を成長させる魔術と、配下の悪魔への命令権」アスタロトはソフィアの言葉の続きを待つ。しかし、ソフィアは話は終わりだと言わんばかりに、別の香を取り出してきてそれに火をつける。すると、その香は魔よけの効果があったのか、アスタロトは不愉快そうな顔をする。

「……それだけですか?」

「それだけだが?」

「私は隠されたものを暴き出せますし、あなたに必要だろう様々な知識を与えることが出来ます」

アスタロトはもらえる対価を増やそうとせんばかりにそう自分のことを売り込むが、ソフィアはどこ吹く風と香炉を弄り終わるとまた窓の外を見始める。

「いらん。私には必要の無いものだ」

そして、なおも不機嫌そうなアスタロトのことをちらと見ると、さらに言葉を重ねていく。

「私は自分の頭脳に自信があつてね。君が思っている以上に賢いと自負している。だが、私がどれだけ賢くともどうにもできない事が少なからずある。

それが、成長するまでの時間と、私の代わりに実地で動いてくれる忠実な人手だ」

ソフィアはそこまで言うと、香の香りを楽しむふりをするために目を閉じる。

「そうだなあ……隠された物か……」

(確かに、このロンディニウムの地下には隠されている封印がある。それを私に暴かせようとアスタロトはしているのだろうか。原作でもそうだった。

しかし、自分からその情報を話したくはない、か)

しばらく香を楽しむふりをして考え事をしたソフィアは目を開け、何でもないかのようにアスタロトに向かって言葉のナイフを突きつける。

「このロンディニウムに何かがあるな？」

「……………」

アスタロトは何も言わない。しかし、不機嫌な顔をすつと執事然としたすまし顔にした。それでは肯定も同じじゃないかと、ソフィアは吹き出しそうになったがそれをこらえて口を開く。

「まあ、何でもいいさ。契約なんだろう？ 私が望む物は提示した。じゃあ、次は対価だな」

「それでは——」

「対価は、伝統的に金^{Gold}で払おう。どれくらいになる？」

アスタロトは言葉を遮られて提案を叩き付けられたことを内心で歯噛みする。最初はソフィア自身から何かを取り立てようとしていたのだ。しかし、「伝統」とまで言われてはそれを退けてまで要求することはできない。

はつきり言って、ソフィアにとって金は大したものではなかった。

今回の金融詐欺で相当量用意できるものであるし、そもそももうすでにいくらかマネーロンダリングの予行演習で換金すらしている。

悪魔はあくまで人間によって存在する。だからこそ、人間たちの意向に沿わざるを得ないモノでもあるのだ。

「成長させる魔術と私の配下への命令権の二つなら、そうは多くはありません。しかし、配下の悪魔を召喚するたびにある一定の金は納めてもらいます」

アスタロトがそう言いながら手を叩くと、空中に炎が現れ、やがてそれが消えるとそこに羊皮紙が現れる。今回の取引が書かれた契約書だった。

彼がそれをソフィアに手渡せば、ソフィアはその契約書を何度か読んで、それから自分の血でサインをする。

「これからよろしく頼むよ、アスタロト」

「ええ、こちらこそよろしく願います。ソフィアお嬢様」

二人は契約書の上で固く握手をする。大人の執事と10歳くらいのおどけない少女とが馬車の中で握手をする光景は、一見すればおまじごこのようだった。しかし、契約書は果てしなく暗く重いもので、二人のこの握手は世界征服への最初の第一歩であった。

そして、契約書が最初に現れた様に炎に巻かれて消えれば、ソフィアは馬車のソファの下から木箱を取り出し、重そうに持ち上げる。

「っ、ほら、約束通りの対価だ」

「……少々多いようですが」

アスタロトがその箱を受け取ると、その中身の多さに首を傾げる。すると、ソフィアはしてやったりと口角を上げ、そしてとても楽しそうに、それこそまるで遊技を楽しむ少女のように笑う。

「誰が、今回の金融詐欺をこのロンディニウムだけで行うと言った？」
「はっ。」

「アメリカ合衆国、ニューヨーク。オーストリア帝国、ウィーン。オスマン帝国、コンスタンティノープル。特にアメリカとオスマンでは派手にやるぞ」

アスタロトが目を白黒させている間に、ソフィアはなおも畳みかけ

ていく。

「ジョージに言つて外交官としての伝手を使つて、アメリカとオスマンには悪魔を浸透させていく。それでこの二国を弱体化させていくぞ。」

アメリカではインディアンとの摩擦が、ギリシアでは革命が、エジプトでは事実上の独立が起きてるそうだ。ここにつけいらぬ手はない。

市場の混乱の責任を政府に押し付けて、世論も国際情勢も操つていこうじゃないか！」

アスタロトは自分の見立てが間違つていたのではないかと思ひ始めていた。自分が思つていた以上にこの少女は悪辣で、狡猾で、明敏であるのではないかと。

「むしろ、ロンディニウムでは目標金額さえ集まればそれでいいからな。市場の不必要な混乱は望んでいない。

あそこまで並んでゐるのなら逆にすぐに手じまいした方がいい可能性が高いな……。」

さあ、やるぞ。アスタロト。はやくその金塊を受け取り給え」

アスタロトは実際の金の重さ以上に重く感じる木箱を受け取り、そして、これから悪魔より悪魔らしい主人に仕えられる喜びに頬が裂けるような鋭い笑みを浮かべながら頷くのだった。

「御意に、ソフィアお嬢様」

クリアランス・前編

ソフィアとアスタロトがロンディニウムを巡り、契約も済ませたその夜。馬車はロンディニウムの東、グリニッジから少し離れた場所にあるテムズ川の岸辺に来ていた。深夜のテムズ川は暗く、特に開発もされていない芝生が生えた湿地は灯りが無ければ方角も見失ってしまいそうだった。

そんなロンディニウム近郊にあつて辺鄙な場所でソフィアは灯りも無く暗い馬車の中に居て、アスタロトと御者だけが外に待機していた。

「そろそろですね」

アスタロトがそう呟くと、テムズ川の方からいくつかの灯りが現れ、それがゆらゆらと揺れながら近づいてくる。灯りで浮かび上がる影は十数人の屈強な男達。彼らは密貿易の運び手であり、未整備の原野を歩き難そうにえっちらおつちらと大荷物を背負ってやって来る。

そして、随分と時間をかけてやって来ると、彼らは警戒心も露わにライフルを向けながらアスタロトに問いかけた。

「Jの旦那の使いですかい？」

「ええ」

「じゃあ、合言葉を言ってくれるんですね？」

「The devil can cite Scripture for his purpose.

【悪魔も自分の目的のために聖書を引用する】」

アスタロトが合言葉を告げれば、ため息と共に運び屋たちはライフルを下ろす。そして御者が彼らに近寄っていくと、地面に置かれた木箱の蓋を開けてその中身を確認し始めた。

一方そのころ馬車の中のソフィアは、ジョージが一丁前にJと名乗っていたことに一人で吹き出して笑っていた。

「確認しました。アヘンと赤子5人、きっちりいます」

「そうですか」

御者の言葉にアスタロトが頷くと、運び屋の中の一人、この部隊の

リーダーらしき男が口を開く。

「報酬の話だ。赤ん坊は用意が簡単だったから安くいい。だが、アヘンは高く買い取ってもらうぜ。なんとって、突然禁輸品やら使用禁止にされるっつーんでウチもおおわらわなんだからな」

「と、いいますと?」

リーダーの言葉にアスタロトが首を傾げる。すると、リーダーがちよいちよいとこつちによってくるようにジエスチャーをし、アスタロトはその通りに彼に近づく。すると、リーダーはアスタロトと肩を組み、声を潜めて話し始めた。

「どうやら他の人間にも聞かれたくない内容らしかった。

「Jに伝えておいてくれ。詳しくは言えねえがインドのケシ農園に軍がやってきて、接収するために発砲してきやがった。軍にバレてない畑はまだまだあるが、生産量と運び出せる量は減る。

だから今後とも付き合いをするなら、軍を牽制するなり金をたんまり積んでくれ」

「……信じると?」

「俺らが持つてるライフルはその軍から奪ったものだけ?おい!そのライフルを見せてやれ!」

リーダーが顎をしゃくつてみせると、護衛の男がライフルをニヤニヤとしながら見せびらかしてくる。確かにそれはイギリス軍が正式採用しているライフルだった。

「人身売買は全く大丈夫だからな今後ともヨロシク。ただ、今後も赤ん坊とかにしてくんねえ?仕入れが簡単なんだよ」

リーダーがそこまで言い終わると、彼は組んでいた肩を外して離れていく。そして、御者が木箱を馬車まで運び終えアスタロトが報酬の支払いをするタイミングで、馬車の中から静かな声が場に響いた。

「スチュアート。やれ」

その言葉にアスタロトがぱつと右手を挙げた瞬間、ダーンツ!という銃声は何発も原野に鳴り響く。そして、その銃声と重なる様にバリオンとガラスが割れる音、その瞬間あたりが真っ暗闇になった。

「やられた!!全員集まれ!!」

ランプの灯を無理やりかき消されたことに気が付いたリーダーが叫び声を上げ、護衛の下へと走り寄る。しかし、その間にも事態は進んでいき、護衛の誰かが銃声を鳴らしてしまう。

煌びやかなマズルフラッシュと共に、その銃口の近くにいた男の腕がはじけ飛んだ。

「あ、あ、あ、あ！痛えええ！」

「やめろ！撃つな！仲間^に当たる！」

「じゃあどうしろって言うんだよ！」

「俺は逃げるからな！」

「やっぱり赤ん坊はダメだったんだよ！」

「軍か？軍なのか？あの時に手を引いておけば！クソが！」

パニックになった男たちは統制も取れなく口々に怒声を上げ、何人かがその場から駆け出していつてしまう。しかし、彼らの声はすぐに闇の夜中で途絶えることとなった。

そして、そんな集団を原野の暗がりから冷徹に見つめるのはアスタロトと彼の部下たち、悪魔だった。悪魔達は暗闇でも先を見通し、パニックを起こしている集団へと音もなく近寄って彼らのことをいともたやすく地面に引き倒して制圧していく。

「ぐえ」

「やめろ！まだ船に仲間がいるぞ！お前らなんてツ！」

「金ならある！いくらでも払う！」

「命だけは助けてくれ！お願いだ！」

「嫌だあ……死にたくねえ……」

そんな男達の声も悪魔達が猿ぐつわを掛けていけばただのうめき声に早変わり。やがて銃声と怒声が響いていた原野には静寂が、木箱の中で泣く赤ん坊の声を除けば確かに静寂が訪れた。

猿ぐつわを噛まされた男達は後ろ手に縛られ、いつの間にか灯りがともされた馬車の前へと転がされていく。

アスタロトを含めた悪魔達はただの一般市民の格好をしていた。そんな中の何人かは転がっている男たちの顔をまじまじと見た後、その顔へと素顔を変化させていたが、明らかに異常なその光景に気が付

いた人間はいなかった。

「では、質問に答えてもらおう」

最初にこの事態の引き金を引いたものと同じ声が馬車の中から原野に響く。それは男の声だった。その実、声の主はソフィアなのだが、上手く声色を変えて女とは到底思えないような低い声を発声していた。

「今日の取引はこれだけか？」

その質問に、集団は一樣にリーダーへと視線をやる。アスタロトは彼の猿ぐつわを外してやって、質問に回答できるようにしてやった。彼は殺意を湛えた目で馬車を地面から見上げ、唾と共に言葉を吐き出す。

「チツ！誰が言うもんかよ」

「別に君がしゃべらなくてもいい。その他の人間に聞くだけだ。一旦黙らせろ」

ソフィアの指示にアスタロトは運び屋の口に再び猿ぐつわを噛ませ、次は一番屈強な男のそれを外す。

「今日の取引はこれだけか？」

「しっ、知らねえ……」

「本当にか？」

「……」

男は馬車の灯りから目を逸らすように暗闇へと目を向けながらそう言う。明るさの問題で外から中は見えずとも、中から外が見えているソフィアは一つ頷いて、アスタロトに命じて口をふさがせる。

そして、同じことを順繰りに繰り返していき、最終的には全員に同じ質問を投げかけた。

それが終わると、ソフィアは緊張感を与えるために時間を取ってから口を開く。

「さて、君達の殆どは殺される。だがチャンスやる。取引だ。この中で情報を吐いた人間は牢屋に入れるだけにしてやろう」

一拍置く。

組み伏せられた男たちは自分に來たる結末に一樣に顔を青ざめさ

せていたが、僅かに見えた希望に目を輝かせる。

「だが、それに加え、最も最初に情報を吐いたものは見逃してやる。そして……」

また一拍。

取り押さえられた男たちは各々目を合わせたり、逆にそっぽを向いて誰とも視線を合わせないようにする者もいた。

「最も多くの情報を提供してくれた者、喋った情報が他の人間と被らなかつた者、これらは報復から保護し、かつ新たな仕事も与えてやろう。」

スチュアート。全員を離れた場所に移してやれ。お仲間がいては喋れるものも喋れないだろう」

「御意に」

アスタロトが指示をすれば悪魔達は男達をそれぞれ離れた場所へと連れていこうとする。その時、偶然にも一番屈強な男の猿ぐつわが外れてしまった。

「イーストエンド！イーストエンドでアヘンを売る！ゴホッ！喋ったぞ！俺は喋ったぞ！助けてくれ！」

男は喉が枯れてせき込むほどに大声を出す。そんな彼のことを他の男達、特にリーダーが射殺さんばかりに睨みつける。しかし、情報を吐いた男は息を切らしながら期待のまなざしで自分のことを縛る人間のことを見上げる。

「約束だ。放してやれ。お元気で」

馬車の中から許しの声が響けば、縄はすぐさま解かれ、男は這う這うの体でその場から逃げだしていく。走り出した彼は馬車の灯りの範囲を超え、すぐに闇夜へと消えていった。

「さて、無罪放免権は消費された。だが、イーストエンドで誰に売るんだ？さあ、思う存分喋ってくれたまえ。期待しているよ」

残された男達も馬車の灯りから離されて闇の原野へと引きずられていく。残されたのはソフィアとアスタロトと御者、加えて何もわからずに泣き声を上げ続ける赤ん坊だけ。

するとガチャリと音を立てて馬車の扉が開き、中からソフィアが地

面に降り立った。

「吐くでしようか？」

「吐くだろうよ。吐いた方が自分に利益がありすぎる」

アスタロトの問いにソフィアは手短かに返しながら赤ん坊のことを抱き上げて、その赤ん坊のことをあやし始める。

「ほら泣かないで、べろべろばあく。ほら、君もあやすのを手伝え」

「あ、はい」

「たか〜い高い」

意外にも優しい気な声色であやすソフィアと、こういったことに慣れない様子の御者との二人がかりで赤ん坊のことをソフィアがあやしている、アスタロトが原野の方を見ながら声をあげる。

「先ほどの男が死にました」

「食っていいぞ。ああ、君には関係ないからね、泣かないで」

イーストエンドでアヘンを売るといふ情報を吐いた人間の死亡報告に、ソフィアは適当に返す。そして、なんとか泣いていた赤ん坊のことを泣き止ませ、一息つこうかと言う所で、一人の悪魔が返ってきた。

「ご主人様。私担当の男は何も知らなかったようなので殺しておきました」

「わかつ『おぎやあ！おぎやあ！』……君も手伝え、有無は言わせん」
せつかく泣き止んだ子が悪魔の割れた声でまたも泣き始めたので、ソフィアはその悪魔のことを鋭く睨んだ。

そうやって赤ん坊のことを3人がかりでなんとかあやして落ち着かせると、ソフィアはため息交じりに馬車のステップに腰かける。赤ん坊に指を握られたままだったので、彼女は赤ん坊の好きにさせてやっていた。

そして、遠くの方、テムズ川河口があるであろう方向を見ながら呟く。

「河口付近で停泊していた母船も今頃軍が拿捕して臨検しているだろうな」

「そうでしようねえ」

「先に潜入させた悪魔達の首尾は？」

「船夫は全員殺し、船長以下数名は誘拐して尋問中です。ジョージとの今回の取引を知っている人間はひとまずは排除できた可能性が高そうです」

「そうか」

状況が自分の思い通りに運んだことにソフィアは特に感慨も無さそうにし、一方で赤ん坊が握ってくる指を通してその生命の暖かさと柔らかさに微笑んでいた。

しかし、アスタロトはそのソフィアの微笑みを勘違いしたのか、密輸船で行われた虐殺に思いを馳せながらうっとりとしながら口を開く。

「軍は今頃どう言う反応をしているんでしょうね？」

密輸船が血だまりになっているのを見て青ざめるのか、それとも自分達が接収したアヘン畑に関係のありそうな船がもぬけの殻になっているのに青ざめるのか、ああ、これが他国に伝わった時に密輸出側が情報が漏れたことに青ざめるのかも……」

ソフィアは楽しそうにしているアスタロトのことを放っておいて、この夜に端を発する一連の計画はまだ初手を打ち終えたただけだと気を引き締める。

今回、ソフィアは元々予定されていたジョージと密貿易商との取引——ソフィアを生贄にした後に育てる代わりに赤ん坊を用立てしていた——に合わせて、関係者を一掃することでジョージの背後をクリーンにしようとしていた。

そしてその第一歩がこの夜の惨殺であり、これはまだただの第一歩だった。

そもそも、密輸入は密輸出側もいて成立するものであり、今回は密輸入側を一旦掃除しただけである。

その上、今は活動しておらずともジョージは世界中をまたにかけて密貿易網を構築しようとしていたし、原作では悪魔の力を借りたとはいえそれを成し遂げて社会の陰に大いに巢食ったのだ。

ただ一隻の船を沈黙させたところで、彼にまとりつく犯罪の匂い

を全て消すことはできない。

しかし、だからと言って何もしないわけにはいかない。何事も最初の一步を踏み出すことが肝心なのだ。それがたとえ褒められることではなくとも。

「ああ、そうだ。これが船にあった書類です」

アスタロトがどこからともなく取り出してきた書類の束と手記をソフィアに手渡す。彼女がそれらを見ると、通常の航海日誌と今回の取引とは別のいくつかの密貿易の情報、それから意味不明な文字の羅列が書かれてあった。書類すべてに目を通した結果、その文字の羅列には規則性があることが見て取れもした。

ちなみに、男たちが話していたイーストエンドへのアヘン納入も場所だけは平文で記載されていた。

「暗号化されているな。コードブックは？」

「船、そして今ここにいる集団は誰も持っていません」

「この文章はリーダーや船長の物ではないのか？」

「違うようです。……証言によれば鞆に入れて特定の場所に埋める予定だったようです」

「送り主はアヘン農園側か人身売買側として、受け取り主はロンディニウムの犯罪シンジケートか？それとも、軍と対立する人間？そもそもアヘン農園を接收しようとした軍か……？」

ソフィアは一人考える。物語開始よりも20年も先んじて動き始めたので、原作知識が十全に機能しておらず、そのため未来の出来事というヒントはあつたとしても、現在の真実をそのまま詳らかにすることはできなかつたのだ。

そんな悩むソフィアにアスタロトはニヤニヤとしながら話しかける。

「魔術を使いましょうか？今ならお嬢様の片目で使って差し上げますよ」

「いらん。こういうのは自力で解くのが楽しいんだろ」

ソフィアがため息交じりに魔術の行使を拒否する。今回の襲撃もある程度は魔術を使用しているものの、そのどれもが強力なものでは

なく少し何かを誤魔化したり、悪魔が本来持つ性質などを利用したものだ。

そうやってかたくなに魔術を使用しないソフィアにアスタロトはこうやって誘惑をして、ソフィアはそれを受け入れないのだった。

そうこうしている内に尋問が進んでいき、アスタロトは時々闇夜の方へと視線を向けて何度か頷く。

「情報が入りました。アヘンはイーストエンドのネクターと言うパブに卸すつもりだったようです」

「パブか。労働者にアヘンと酒を提供するんだな。近くに娼館もありそうだ」

アヘンの卸先に納得したソフィアは、指を掴んでいる赤ん坊を猫なで声であやししながら指を引き抜き立ち上がる。

「さ、そのパブに行くぞ。まだまだやりたいことはあるからな、雑事はさっさと済ませよう」

彼女がそう言っている間に、悪魔達が戻ってくる。そして、馬車のランプに照らされ始めた彼らは一様に赤く濡れていて、中には口から滴らせている物さえいた。

ソフィアは彼らが見えると、自分の外套を脱いでそっと赤ん坊に被せてやるのだった。

クリアランス・後編

ロンディニウムの端、イーストエンドは夜になっても賑やかだ。その日過酷に働いた労働者がその疲れを何とか誤魔化したり発散するために、安酒で酒盛りをし、女を抱く。

中には喧嘩や問題を起こす人間もいて、それらを取り締まるために自警団染みたものが形成されてすらいた。今日、その自警団も犯罪組織や政治組織であつたりするのが、市警や軍などの頭痛の種ではあるのだが。

そういった元気のある人間たちがいる一方で元気もなく横たわる者も、言葉すら通じない、そもそも肌の色も違う人間もいるのがイーストエンド。ここはロンディニウムから貴族と資産家、持っている者以外の全てが流れつく場所だった。

そして、そのイーストエンドを走るの是一台の馬車。

時刻は、賑やかなイーストエンドですら人々が明日のために眠りにつく時刻。

中にはソフィアとアスタロト、そして5人の赤ん坊が乗っていた。

「運河狂時代最盛期の時代に作られた水路が幾つかあるそうで、水路を隠すようにタウンハウスが作られ、小規模なスクエアを形成しているようです。」

そして、そこにパブ、ネクタルがあります」

「組織だっていそうだな」

「恐らくは。いかがいたしますか?」

「話を聞いただけでいいからな。暴れるつもりはない」

ソフィアは肘をつき車窓から外を見ながら、アスタロトに言葉を返す。アスタロトはそれに残念そうにし、ソフィアは溜息を吐きながらアスタロトが望む殺戮を予告する。

「ただ、ジョージが一枚かんでいた組織はしっかりと潰しておく。今待機させている悪魔達を突入させる。事前の命令の通りにするよように」

この時代、アヘンはどこでも買えた。それこそ、ソフィアの隣にい

るような、赤ん坊に泣き止ませるために与えることもあったほどに浸透していた。しかし、この世界では史実よりも早い段階でアヘンの規制が随分と進んでいて、今購入できるのは許可が下りている一部の薬局か、違法な取引をしているもぐりの薬局が最大手だった。

まだ、薬物の売人が跳梁跋扈するほどには人々に浸透しきつておらず、闇にも潜っていないアヘンの駆逐はそれなりに順調そうに見えた。

(規制のタイミングとしては正解だったのかもな……)

ソフィアは規制法を通そうとしている議会の評価を上昇させておく。

「後は航海法やら穀物法やらを何とかしないとなあ」

「両方とも自由主義者に猛烈に攻撃されていますね」

航海法、穀物法は共に保護貿易政策の一環として施行されている法律であり、前者はイギリス船でなければ輸出入が出来なくなり、後者は一定の値段の穀物の禁輸でイギリスの穀物を守るという物だ。

前者も密貿易の増加などを引き起こしたが、特に後者の法律は数多くの問題を孕んでおり、地主貴族や農業資本家に対する優遇が過ぎたことや、高騰していく小麦の価格で労働者がパンを買えなくなるなどの事件を起こした。

この世界でも、ピータールーの虐殺は発生し、それはソフィアが生まれる前の物であったが、未だにこの事件は人々の心の奥底に負の記憶として残っているのだ。

(確かにこの保守的な法律は邪魔だ。だが、これは逆に利用できる可能性もある。)

物事を一面的にとらえてはダメだ。もっと視野を広くしなければ)

ソフィアは常に考え続けていた。どうすれば競争に打ち勝てるのかを、どうすれば最終的な勝利条件を満たせるのかを。

(悪魔達もいずれ邪魔になる。排除の方法も考えておかないとな)

ソフィアはちらりとアスタロトのことを見る。彼の悪魔は御者に道を指示していたので、ソフィアが彼に視線を向けたことは気付かれてはいない。ソフィアは気付かれる前に視線を流れる景色へと向け

直す。

悪魔は悪魔らしくろくでもないことを考えているのだろう。馬鹿正直にソフィアに従っているわけではない。悪魔達にも悪魔たちなりの勝利条件がある。

（霧の都のマジでは、ルシファアの復活が悪魔達の共通の目的だった。ルシファアはこの世界を滅ぼすつもりだ。故に私とは相容れない。だから――）

「お嬢様。目的地、ネクタルにつきました」

「わかった。店主を呼び出せ」

「御意に」

アスタロトの言葉にソフィアは気持ちを切り替えて命令を下す。そして、馬車を降りていったアスタロトを見送った後、彼女は額に親指を当てながら俯き加減に目を閉じ、小さく呟く。

「アスタロト、君もいつかは排除しなければな」

たとえ聞こえていたとしてもよかったその呟きは、馬車の中の赤ん坊しか聞いてはおらず。やがてアスタロトはネクタルの店主、一見するとただの初老の男性に見える人間を馬車の前に連れて来た。

「一体何の用だ」

他人を信用していない目で店主がそう言えば、ソフィアは声を男の物に変えながら声を発する。

「そう警戒するな。少し尋ねたいことがあっただけだ」

「警戒するな？はっ！無理だね。顔も見せない輩をどう信用しろってんだ」

馬車の中から聞こえてきた声に店主は警戒心をさらに上げながら言葉を返す。加えて、隣に立つアスタロトからじりじりと距離を離してもいるようだった。

「それもそうだな。まあいい、質問だ。Jという人間を知っているか？」

店主は何も言わずに肩を落とすジェスチャーをする。そのジェスチャーの意味はどうとでも取れたが、ソフィアは『誰が信用できない奴に話すかよ』ととらえた。

「スチュアート。例の物を」

ソフィアの声でアスタロトは馬車の荷台からいくつかの木箱を下ろしていく。その中身は本来運び屋たちがこの店主に卸そうとしていたアヘン、それに加えてジョージが購入していたアヘンだった。

アスタロトは木箱の蓋を開け、店主に中身を確認させる。すると、店主はみるみる顔を青ざめさせ、手を震わせながら馬車の方を見る。

「運び屋たちは始末した」

「警察か？……違うな、やり口が残酷すぎる」

店主は目敏く木箱についていた血痕を見つけていた。真実、それはソフィアたちが後から目立つように塗りたくった物だとは気付けるはずもなく。

「私は君には興味がない。だからこのアヘンは差し上げよう」

「……」

「だから、Jと言う人物について知っていることを話せ」

不信心と嫌悪感、それから敵愾心と恐怖心をなймаぜに店主が口を開いたり閉じたりして、言うべきか言わざるべきかを迷う。

そんな様子を馬車の中から見たソフィアは小さくため息をつき、店主に語り掛ける。

「私の目的はJだ。Jはアヘンと人間を売買していた。」

Jを辿るために運び屋を探し出し、排除した。だが、彼らはあまりロンディニウムの内情については詳しくなかった。何も知らなかったと言ってもいい」

ソフィアは原野で尋問した運び屋たちが殆ど情報を持っていなかったことを思い出しながら語り続ける。結局得られた情報は取引をしていた人間の偽名くらいだったのだ。はつきり言って、何も情報が得られなかったと言ってよかった。

「ある意味当然だろう。彼らはただの媒介だ。媒介は何も知らなくても機能する。故に何も知らされていなかった。」

だが、君は違うだろうか？

少なからずロンディニウムに通じているはずだ。アヘンの密貿易に目を付けた様に目端も利くし、伝手もある程度あるのだろう。ある

意味素晴らしい才覚だ。

推理してみせようか？君の素性は……」

ソフィアがそこまで行ったところで、店主は一切の訛りの無い言葉で怒鳴り始めた。

「もういい!!黙れ!!Jの何が知りたいんだ!!」

「Jが何者か知っているか？」

「知らない！」

「Jの目的は？」

「知らない！」

ソフィアはまず、勢いのまま即答できるのであろう質問を投げる。そして、続いて一番知りたいことを簡潔に問いかけた。

「Jのシマは？」

「この北隣の通りだ！そこで最近色々やってた」

「それだけ？」

「ああそれだけだ。もういいだろう!?俺はほとんど何も知らないんだよ！」

店主が首を振りながら両手を上げてもううんざりだと声を荒げる。

その様子を見たソフィアは自分の目的は達成できたと頷く。

「ありがとう。行くぞ、スチュアート。店主よ、迷惑をかけたな。」

くれぐれも今日のことは内密に」

アスタロトに声をかけ、店主から見えない方の扉から彼を馬車に乗せると、馬が嘶いて馬車が発進する。残された店主は頭を掻き、足元に残されたアヘンの入った木箱を思い切り蹴飛ばすのだった。

そして木箱を運び込み、店の奥へと引っ込みもうとしたとき、彼の意識は暗転して、一生戻ることにはなかった。

一方、動き始めた馬車の中ではアスタロトとソフィアはすぐに切り替えて次の話し合いを始めていた。

「ジョージはまだあまり影響力は持っていないかったようですね」

「そうだな。助かったよ。これで店主がJについて噂話でもなんでも話し始めたら頭を抱えるところだった」

「となると」

「これから向かう先で売人を殺せばロンディニウムからJの影を消せる」

ソフィアはあらかじめジョージに聞いていた密貿易の拠点と、先ほどネクタルの店主から聞いたJのシマが一致したことに安堵を覚える。喫緊の問題が無くなることはとても僥倖であり、限りのあるリソースを無意味なものに向けなくて済むようになったのはとても喜ばしいことだった。

「あとは海外ですが……」

「それは昼に話した海外で金融詐欺をするときに接触、その後破綻させると同時に一掃する」

「上手くいきますか?」

「上手くいかせるんだ」

アスタロトの提言にソフィアはあらかじめ考えていた策をすぐさま返す。そして、上手くいくだろうと樂觀視もしていた。最悪何もしなくてもジョージは裏社会での活動をやめる、そうすれば時間が経てばJの存在は風化していくと考えていたのだ。

しかし、それでもソフィアは頭の片隅で最悪の状況の想定はしておく。下手に一掃に失敗して利益度外視の復讐心を持たれることだけは避けておかなければいけないことだろう、と。

「お嬢様。目的の場所につきました」

「ああ。向かおうか」

馬車は狭い路地で停車する。若干汚いテラスハウスの壁によった馬車の扉を開き、通りからは見えないようにしながらソフィアは両手にカバンを持って裏口から建物の中へと入っていく。

廊下には明かりがともっておらず、月明りも差し込まないのであまりにも暗かった。

しかし――

「あまりに血なまぐさい」

そこにはむせ返るほどの血の匂いが充満していた。ソフィアは不快そうに顔をしかめながらランプを灯し、それを掲げる。アスタロトは彼女の数歩先を歩き始め、今夜の旅の終着点へと案内を始める。

「悪魔ども、ここを綺麗にしておくのを忘れていないだろうな……」
「それは大丈夫でしょう。命令には絶対忠実なのが我々悪魔ですから」

ソフィアの最初に描いた物語は、一夜にしてこのテラスハウスの人間が忽然と失踪した、という物だ。ジョージに自分の子飼いの配下を全てこのテラスハウスに集めさせておき、悪魔には一切の殺しの証拠を残さずに始末させてその物語を完結させようとしていたのだ。

血も暴れた形跡も何かを持ち出した雰囲気も無い不気味な事件。

一つの都市伝説として語られるくらいが、皆殺しのカバーストリーとしてはちょうどいいだろうとソフィアは考えていたのだ。

しかし、今はどうだろう。廊下を歩き通り過ぎる部屋からはうめき声や悪魔のどろろ嬌声が聞こえ、それはあまりにも不気味に過ぎた。「後から修繕のために魔術を使ったから対価をよこせと言われても応じないからな」

「大丈夫ですよ」

ソフィアはまた一つため息をつきながら廊下をアスタロトの先導で進む。彼らは一旦2階に上り、それからまた廊下を進んで次は下る階段へと歩みを進める。

その下り階段は通常よりも長く、やがて一階以上の高さを下って、鉄扉へとたどり着く。

「ここです」

「わかった」

ソフィアはカバンを下ろしてから一つの鍵を取り出し、その鉄扉へと近づく。そして、その鍵を差し込む前に彼女はランプを掲げて鍵穴を覗き込む。

「機械的にも魔術的にも鍵がかけられているのは話の通りですね」

「そうだな。私にもわかる」

機械的な鍵そのものはかなり単純で古いものだった。ウオード錠と呼ばれるタイプで、機構としてはいくつかの障害物がただ設けられているだけの簡単にピッキングが出来るもの。

しかし、ウオード錠の特徴的な所は鍵の形を複雑にすることが出来

るという点で、今ソフィアの手元にある物はその鍵の形を魔術の起点にし、その効果によって鍵としての堅牢さを担保していたのだ。

「うん。大体わかった。開けるか」

ソフィアは魔術のことはまだ分からない。しかし、魔術とは何かを一目見られたのは収穫だと頷き、鍵を差し込み、回す。

油をきちんと差して手入れされていたのか、鍵は一つも引つかかることはなく回り、カチャンと小気味良い音を鳴らす。

そして鉄扉を開けば、そこは倉庫だった。

木箱が整頓して並べられ、ソフィアがそれに近づいて中身を見ると、そこには何らかの書類か本が敷き詰められていた。

彼女がその中の一つを手に取り中身を見てみれば、それは3年前の冬の日付であり、そこに書かれていた内容はよりよい素体を作るための母体の選定についてだった。

具体的に言えば、素体とはアスタロトに捧げるための赤ん坊のことで、母体とはその母親のことだった。

それを読んだソフィアは興味深そうに書類を読み進めるが、今はそれどころではないと顔を上げる。

「凄いなこれ。私の母親はこうやって選んでいたのか」

「こちらはウィーン会議の時の工作についてですね。ケープ植民地を取るのには相当苦勞していたみたいです」

「さっさとこれらを持ち出すぞ」

アスタロトも面白そうに箱の中を漁っていたが、ソフィアはそれを遮って最後の目的を果たそうとする。

今日このテラスハウスは一大事件の中心地になるのだ。こんな文章を残せるはずもなく、すべて回収しておかなければならない。ジョージは密貿易の証拠もあるので屋敷に置いておくよりもこの方が安全と考えたのだろうか、今となってはここが最も危険な場所なのだ。

アスタロトが木箱を幾つも担いで部屋を出入りし始めると、ソフィアはその間に鉄扉の魔法の錠前を取り外しにかかる。後からつけ足したもので手順さえ分かっていたらそれは簡単に取り外せ、その

代わりに通常のもの、このテラスハウスの各部屋にも使われているものと同じ錠前を取り付ける。

(捜査官の中には魔術に詳しい奴もいる可能性があるからな。

命令しているとはいえ悪魔も魔術を誤魔化し切ってくれるだろうか)

霧の都のマギにはエクソシストと呼ばれる組織が登場し、怪事件が起きれば彼らも警察に加わって捜査をする。ソフィアはそんな彼らを恐れて鍵を取り換えているのだ。

「こちらは終わりました」

「こっちも終わった。後は汚すだけだ」

ソフィアが新たに作り付けてピカピカな錠前を、煤や持ち込んだ薬品を使って汚していく。そうすれば数分で数年は使いこんだようにみえる錠前の出来上がり。

アスタロトも書類の代わりに替えのランプや油、ペンキなど日用雑貨を運び終えたことをソフィアに告げる。

これでソフィアが今日計画していたことすべてが完了した。

「さて、帰るか。流星にもう眠い」

ソフィアが地下室から階段を上っていくと、先ほどまでは嫌になるほど血生臭かった空間が、古い家の匂いだけになっていたことに気が付いた。

ソフィアがそれにびっくりしているとアスタロトはしたり顔で胸を張る。しかし、ソフィアはそんなアスタロトを無言で睨みつけることで全てを物語ったのだった。

二人が馬車に戻ってくると、馬車は静かに発進する。誰にも見つからないように迷路のような路地を縫って走り、今日はこのままロンディニウムを出て行くつもりだった。

そんな馬車の中で、ソフィアは後回しにしていたものと向き合っていた。

5人の赤ん坊である。

(原作ではこの5人のだれかが悪役令嬢のソフィアになるんだよなあ)

ソフィアは感慨深そうな視線を赤ん坊へと注ぐ。

本来のストーリーでは生まれたばかりのジョージの実の子供はアスタロトの贄とされ、その代わりに買ってこられた赤ん坊がソフィアとして育てられる。そして、育てられたソフィアはアスタロトとジョージの駒として動き、とあるタイミングで主人公と出会うのだ。しかし、そうはならなかった。ジョージの実の子供は生きているし、今はその子供がソフィアだ。

年齢操作をしている関係上、実のソフィアの代わりに育てられる赤ん坊は必要だったが、まさか5人もいるとはソフィアは考えていなかった。ジョージには赤ん坊を買ったと言われただけで、ソフィアは勝手に1人だけと勘違いしていたのだ。

「後はこの赤ん坊だが……そうだな……。どうしようか」

ソフィアは赤ん坊全員が金色の髪を持っていることに気が付きながらため息をつく。ソフィアを含めそれぞれ色合いは違うものの、上手く探してきたものだと彼女は変に感心をした。

そして、ロンディニウムを出たあたりで、ソフィアは一つ、閃いた。「ジョージに言って女学校を作らせるか」

「女学校ですか?」

「ああ、これは……名案だぞ!すべてがかみ合う!」

「はあ……。と、いいますと?」

アスタロトが首を傾げながら問い返すと、ソフィアは喜色満面、今までで一番良い笑顔で頷く。

「簡単に言えば、女性を集めて彼女達に多くの功績と栄誉を持たせる。数学、化学、機械工学、あらゆる分野で活躍する女性を生み出すんだ。新たな発見は投資先を生み出せるし、大学を作ればその新たな発見も生み出しやすくなる。」

そうすれば、どうだろう?

それはきつと、巨大な爆弾となって行くだろうよ」

(それに、私が持っている未来の知識を自然と潜り込ませることもできる。

なんでこれを思いつかなかったんだ!

これはアスタロトには言えない。言えないなあ！)

ソフィアは一人目をつぶりニヤニヤと次から次へとあふれ出てくるアイデアを精査しながら解説をする。その真意に気が付いたアスタロトも悪魔らしい笑顔を作っていくが、それはどこかソフィアの笑顔とは方向性が違う様に見えた。

ややあつてソフィアが目を開けると、赤ん坊の方を向き、口を開く。「どうだ？賭けるか？アスタロト。この子達が優秀な人間になるかどうかを」

アスタロトは赤ん坊のことを覗き込み、それからため息をついた。「賭けになりませんよ」

「そうか。きつと、この子達には色々なことを成し遂げさせるぞ」

ロンディニウムを離れ月夜の下走る馬車の中で、ソフィアはいかにして子供を育てて、彼女達に数多の栄光を勝ち取らせるのかを考え続けるのだった。

研究は悪だくみ

マームズベリー侯爵の屋敷は侯爵と言う地位や田舎に邸宅を構えているというのもあって相応に広い。

建てられた時期が少し古いのでパツラーディオ様式の影響がとても強いカントリー・ハウスは、ギリシアやローマ風の古臭くも威厳のある装飾が多いが、歴史主義的な様式は外交官であるジョージにはよく似合ったものだと言えよう。

その邸宅の端の部屋において、そんな歴史主義的なものとは真つ向から反発することをしていたのはソフィアだった。

彼女は真つ白な白衣を着て、ガラス製の実験器具を幾つも並べて研究を行っていた。今は無煙火薬を作るために様々な実験をしている所なのだが、本人はあまり楽しそうでは無かった。

(アスタロトを誤魔化すためとはいえ面倒な工程だな……)

すでに知られている爆発物や激しく燃える物質をかき集めその共通点を洗い出したり、時にはすでに発見されている物質を再検証したりしていたのだが、時には無駄と分かっているものでもやらないとならないのがソフィアにとって苦痛そのものだった。

ただ、まだ原子や分子についての理解が乏しいこの時代、それに関する研究を積み重ねておくことは必要だと、ソフィアは自分に言い聞かせながらそう言った作業を行っていた。

そんな彼女がコールタールを熱しながら蒸留を始めたその時、部屋にノックの音が響き、ソフィアは火を止めず器具から目を放さないようにして声だけで返事をする。

部屋に入ってきたのはアスタロトであり、彼は手に紙束を持っていた。

「お嬢様。工房からの報告書です」

工房とは、ジョージが屋敷に残っていた金を投入して作った蒸気機関車を研究開発する工場のことだった。ちなみに金を出さずときジョージはやく詐欺会社から金を持ってこないと破産すると嘆いていたが、その嘆きは無視された。

ソフィアは手を後ろに伸ばし、アスタロトはその手に報告書に乗せる。そして、それを受け取ったソフィアはテーブルに報告書を置き、ちらちらとその報告書に目を通しながらコールタールの分留を続ける。

「バルブとシリンダーの破損の報告がやはり多いな」

「特に複雑な部分ですからそうなるかと」

「結露した水が溜まってしまっている可能性がある、か」

ソフィアは試作品の蒸気機関車の破損箇所を見ながら予想通りだったか、とつぶやく。バルブとシリンダーは共に稼働部品であり、大雑把に言えばバルブは蒸気の流れをコントロールする部分、シリンダーはその蒸気の圧力を運動へと変えて車輪に伝える部分である。

「逆にボイラーの性能は向上し続けています。はつきり言って過剰性能と言えます」

「そうだな。ボイラーの重量が重くなりすぎているのも問題か。これではレールやシャーシが歪むんじゃないか？」

ボイラーとは火を焚き水を沸騰させる部分であり、ここが蒸気機関車の心臓部である。効率よく新鮮な空気を供給し石炭を燃焼させ発生する熱を水へと伝達する、その改善はかなり上手くいつているようにみえたが、実際には熱風を通す煙管と呼ばれる部分が肥大化しボイラー全体が大きくなっているのでパワーが相対的に上がっているだけ、という可能性もあった。

ソフィアは今あるボイラーから過剰なほどの蒸気を大量に供給されてはそりゃあバルブとシリンダーの不具合が多発するな、と納得しながらコールタールから出てくる泡を眺める。

（記憶が正しければこれはベンゼンだったはず。次がトルエン、フェノールだったか？しかし、最初の内は不純物が多いだろうな）

「コールタールですか？」

「ああ。コークスを作る時に大量に出てくるようになるからな。研究しておきたかった」

アスタロトが後ろからソフィアの実験を覗き込みながら問いかける。コークスとは石炭から不純物を取り除いたもので、石炭を蒸し焼

きすると作ることが出来る。その際に出る不純物の一つがコールタールである。

コールタールには様々な物質が混ざっており、その中には無煙火薬となるピクリン酸とトリニトロトルエン（TNT）の原料となるフェノールとトルエンも混ざっている。最終的にはピクリン酸は駆逐されてしまうものの、今纏まった量の原料を実験室で用意できる点と、すでに知られている物質であるという点、この2点でソフィアは合成に着手していた。

加えて、コークスは蒸気機関車の燃料や鉄の精錬にも使用するのでこれから大量に必要な物であり、その副産物としてコールタールも大量に余ると予想されていた。そのためソフィアはコールタールをどうにか有効活用できないかと研究をしていたのだ。

アスタロトはコールタールから分留できる物質の価値を知っているからか、含み笑いをしソフィアがどこまで行けるのかを想像する。そんなアスタロトに内心ため息をついたソフィアはいくつかの意味を持つ言葉を小さく呟いた。

「予想以上に上手くいっているな」

「何がです?」

「蒸気機関車だよ。効率よく失敗できている」

ソフィアは手を動かしながらとりあえず頭の中に入れた報告書を反芻しながら微笑む。工房にはいくつかの種類の設計図を手渡し、それを元に複数種類の部品を作っていた。そして、そのそれぞれを並行して実験し、そのどれがどのように失敗し成功したのかをノウハウとして蓄積していた。

しかし、そういった地道な研究にアスタロトはどこか不満げで、ソフィアはそんな様子の彼により詳しく語って聞かせる。

「最初からすべて上手くいくなどあり得ないからな。多くの失敗が次の成功の糧となる。その点で、とてもうまくいっている」

「しかし、全て我々に任せてくださればもっと短期間に製造が可能です」

今工房で働いている労働者の内、2割が人間のふりをした悪魔で、

8割が純粋な人間であった。もしこれが全て悪魔だった場合、ソフィアが示した最も高度で先進的な蒸気機関車を作ることさえできただろう。

しかし、ソフィアはそれを望まなかった。

彼女は分離した、おそらくベンゼンと思われるものをビーカーに移すと、また別のビーカーでコールドタールから分留される物質を採取しながら口を開く。

「第一に、何も失敗せずに完成品を作り上げては疑惑が生まれる。

第二に、全てが経歴の無い技術者の場合、これでも疑惑が生まれる。

第三に、人間を育てておかなければ拡大していく需要に生産が追いつかなくなる。

第四に、様々な背景の人間を技術者に仕立て上げることで生まれるメリット。

他にもあるが、聞くか？」

「いいえ、よしておきましょう」

ソフィアは不純物の多いであろうベンゼンの入ったビーカーを見ながら、『最終的に悪魔を排除するのだから』という部分を隠してアスタロトのことを説得する。そして、工房から送られてきた報告書の話題はそこで終わり、ソフィアは次の話題へと脳を切り替える。

「それで、投資会社に溜まっている資金はどれくらいになっている？」

「予測の上では早ければあと2か月で、遅くとも5か月以内には目標金額に到達します」

ソフィアは手を止めずに考える。あまりに上手くいきすぎていなか、性急すぎないかと。性急なのは確かにポンジ・スキームにおいては良い傾向だ。しかし、あまりに急拡大してしまえば裏を疑う人間も出てくるのはまた事実。

ソフィアはアスタロトに問いかける。

「新聞ではどれくらい話題になっている？」

「最初のころは懐疑的な見方でしたが、最近は投資を煽るような見出しを出しているのが見受けられます」

「そうか。私は最近では過熱しすぎていると感じている。大口の投資の

申し込みはいくつ入っている?」

ソフィアはこの時初めて実験する手を止めて、両手を机につき、決断をする準備を始める。決断とは冷静さとエネルギーが必要なものだ、ソフィアはそれをよく知っていた。

「事前の命令の通り、大きすぎる投資は審査などと言つて一旦止めています」

「詳細を」

ソフィアが詳細を求めると、アスタロトはどこからともなく書類を取り出してそれを見せる。その中には名だたる資産家や貴族が名を連ねていて、ソフィアはその内容を精査していく。

「リーズ公……これが一番の大物か」

「そうですね。調べによるとこれから始める馬主業の足しにしようとしているようです」

「はあ……馬主……馬主業もジョージにさせてやらないといけないのか? 面倒だな……」

いや、その悩みは今放っておこう」

ソフィアはため息をつきながら書類を机の上に投げ捨て、椅子にドカッと乱暴に座る。そして、目を閉じてここで投資会社を破綻させた場合、どれくらい計画に遅延が生じるかを考える。

もちろん、目標金額に到達する前に引き払うのにはデメリットがある。しかし、これ以上続けても刺激してはいけない所を刺激するとうデメリットもある。

(厄介なのは前者は計算できるが、後者はどこまで行つても空想となるところだな。

最悪がエクソシストが出張ってくること、まだマシンなのがスキームが看破されること、かなりの痛手がスキームがバレてその上資金回収が出来なくなる点。

だが、それらがどのタイミングで発生するかが分からない)

ソフィアはそれらのデメリットを天秤にかけようとして、やめる。

ソフィアは両手を上げて肩を落とし、やれやれと自嘲気味な笑みを浮かべながら目を開いた。

「根本的に、だ。今ここでリスクを負わなくてもいい。

何より、蒸気機関車さえ完成すれば真つ当に稼げる。

アスタロト。予定よりかなり早いが、これらの大口投資だけ回収したら破綻させる」

「かしこまりました」

ソフィアの決断にアスタロトは慇懃に一礼をした。そして、ソフィアはこめかみに指を当て、机に肘をつきながらこれからのことについてアスタロトと相談し始める。

「製鉄業に進出するのは遅れるだろうが、鋼鉄への精錬法の研究資金は確保できるか？」

「はつきり言って難しいかと。工房の技師を集めると設備投資に当初の計画よりも金がかかっています。

女学校を作るといふ話も持ち上がったので、その分の資金も必要になります。

無論。全ての技術者を悪魔にすれば現状集められる予算内で済むでしょうが……」

「それはしない」

アスタロトは肅々とソフィアの相談に乗るが、その一方で甘い誘惑をすることも忘れない。悪魔とはそう言う物なのだが、ソフィアはどうしてもその誘惑を煩わしく思ってしまう。

アスタロトはじつとソフィアのことを見つめ、ソフィアは頭の中でそろばんをはじき続ける。

（蒸気機関車はどうしても開発に時間がかかるから最初に着手したのは良かった。

鋼鉄生産は蒸気機関車よりは短期に行えるはず。電信もだ。

鉄道会社、女学校、無煙火薬と銃器開発……。やることが多すぎるな……。

ギリシアに始まる東方問題はもうすでにイギリスを騒がせていて、ジョージにはしっかりと働いてもらわないといけない。

できれば、ネイティブアメリカン、今はまだインディアンか。彼らとも接触したいし、細かい所ではケープ植民地にダイヤモンドを発掘

しに行きたい。

投資詐欺で資金集めはやはり短期的には有効だが、長期的に見ればあまりに足りなさ過ぎたな……)

「うん……うん。そうだな、工房に投入する金を増やそう。それと女学校設立は継続で。製鉄業参入と精錬法の研究は延期。それと……」
「それと？」

ソフィアはアスタロトの顔を見て、一つの体のいい厄介払いを思いついた。

「君達悪魔へ仕事を与えようじゃないか」

「ほうー！」

「まず一つ。イングランド、ウエールズの地質調査。これはそこまで注力しなくてもいい。もうすでに行われているからな。確認と演習の意味合いが強い」

「では、本命は？」

アスタロトは目つきを鋭くさせながらソフィアからの命令を待つ。そして、悪魔達の主人は立ち上がり、壁に貼られた世界地図へと歩み寄る。

「ケープ植民地」

アフリカ最南端、先のナポレオン戦争でイギリスが獲得した土地を指し示す。

「元フランス領ルイジアナ」

アメリカ13植民地以西、今アメリカが虎視眈々とインディアン達から奪おうとしている土地を指し示す。

「ワツハーブ王国」

オスマン帝国の南、エジプトの東、砂漠の大地アラビア半島を指し示す。

「価値があるかは分からないが。これだけの広域、何かの資源はあるはずだ。たとえ今使えなくとも研究で使えるようになる可能性のある物もあるかもしれない、徹底的に地質と動植物を調べるんだ」
「はっー！」

未来を知るソフィアはこの三つの土地、そのどれもから重要な資源

が出ることを知っている。ケープ植民地周辺にはダイヤモンド、プラチナ、金が。元フランス領ルイジアナからは鉄鉱石、石油が。アラビア半島はそれはもう大量の石油が眠っている。

山師としてはこれ以上の無い精度であろう。しかし、アスタロトに疑われないように適当なそれでいてそれらしい理由もつけ足している。

「目的を明確にしておこう。」

ケープ植民地は獲得したばかりで国がまだ全貌を把握していない。手を本格的に入れてくる前にこちらで何とかしたい。これが最優先。

ルイジアナはできるならインディアン達と協力すること。十中八九アメリカ上層部は西進政策を取ってくるだろう。アメリカに力を付けさせ過ぎないためにもインディアンに武力を持たせたいから、今の内から接触していこう。

ワツハーブ王国辺りは後回しでいい。あくまで欲しいのはスエズ地峡だからな。この周辺の調査をするついでに、ムハンマド・アリーに恩を売るための地形図入手が目的だ」

「かしこまりました」

隠された物を見つけることができるため、地面に眠っているものを実はすでに知っているアスタロトがそう領いた時、騒がしい音が外から聞こえてきた。

ソフィアが訝し気に窓の外を見ると、かなり速度を出した馬車が家の裏手を走っているのが見えた。

そんな馬車を見て使用人たちが声を上げていたのだ。

「ジョージか？」

「恐らくは、何かがあったんでしよう」

二人して窓の外を見ながら首を傾げ、しばらく待っていると研究室の扉がいささか乱暴にノックされる。

「入りましたえ」

ソフィアがジョージに勘違いされているため、アスタロト風に少し威厳を込めて入室を許可すれば、扉がゆっくり開き、外出用のスーツを未だ羽織ったままのジョージが一礼して入ってくる。

「慌ててどうした?」

ソフィアが問いかけると、ジョージは一度深呼吸をしてから真に迫った表情で歴史的な大事件を口にした。

「ギリシアとオスマンが戦争状態に入りました」

「……議会は?」

いささかの動揺も見せずに、いや、*「見せなかった」*という演技をした、その実一切動揺していないソフィアが言葉を返す。

「介入に傾くかと。戦時国債についてはもうすでに協議が始まっています」

いわゆる東方問題。ギリシア革命からの一連の流れで、ギリシアはオスマンに独立戦争を仕掛け、ウィーン体制を維持しようとしたイギリスなどの大国が介入していくこととなるのがこのギリシア独立戦争だ。対するオスマンはムハンマド・アリーに援軍を要請したり、最終的には戦争に敗北しギリシアの独立を許すことになり、彼の国の凋落が決定的になって行った歴史的なターニングポイントだ。

それにソフィアは手を入れる気満々だった。

「スチュアート。オスマンに侵入している悪魔の首尾は?」

「金融詐欺を開始するところです」

「よろしい。予定通りに金や宝石の運用という名目で資金調達すること。ある程度まとまれば実際に相応に現物を買っていくぞ。」

こっちは資金を回収する気はないからな。好きに、派手に、楽しくやるぞ」

「御意に」

ソフィアの言葉にアスタロトが実に楽しそうな笑みを浮かべながら美しく礼をする。

そして次にソフィアはジョージに視線を向けると、手の指を組みながら語り掛ける。

「ジョージはムハンマド・アリーに接触はできそうか?」

「それは可能ですが、横入りはあまり良い顔はされないかと」

ジョージは侯爵としてそれなり以上の貴族であり、有能な外交官だ。しかし、それでも外交官は彼一人ではないのだ。

「それはそれで構わない。必要なのはムハンマド・アリーをこちら側に引き込むことだからな。君はそういう提言をしていけばいい」

「引き込むとしても材料が少ないと思われれます」

「スエズ利権では押しが弱いか。そうだろうな」

ソフィアはそこまで言うたとアスタロトのことを指さし、にやりと笑う。

「オスマンから大量の金を流出させようじゃないか」

ソフィアのその言葉にジョージはぐくりと生唾を飲み込み、戦争と金融詐欺で滅茶苦茶になるであろうオスマン経済のことを思うと背筋に冷たい汗が伝ったのであった。

しかし、ソフィアの計画はそれだけではなかったようで、彼女は椅子から立ち上がると棚に置いてあったガラス瓶を一つ手に取ってジョージの目の前にコトンと置いた。

「それは……？」

ジョージは黄色い物質が入ったガラス瓶に対し、その得体のしれないものはと、毒？はたまた呪いか魔術？と顔色を悪くさせながら問いかける。

すると、ソフィアはそんなジョージの顔を見てふつと笑い、安心して言いたげにその瓶のふたを上からトントンと指で叩く。

「ただの黄色の染料だよ。ただの、ね」

その名はピクリン酸といった。

鉄道の夜明け

青空広がるロンデイニウム郊外の草原で、一つのお立ち台が組み上げられていた。それに加え、その舞台の前では仕立てのいいスーツやドレスを着た人々による立食パーティーが行われていた。

ロンデイニウムからやってきた貴族や資本家たちのみならず、他のシティからも数多くの人々が集まって会食を楽しんでおり、今日この日に集まった人々は皆一様にこれから見られるものを心待ちにしていた。

そんな彼らを集めた張本人である、マームズベリー侯爵ジョージ・ロングフェローはわずかに緊張した面持ちで舞台袖に控えていた。「そう緊張するな」

ジョージにその声をかけたのは、最初のころよりも少し大人になった雰囲気のあるソフィアだった。彼女はなぜかオーバーオールを着ていかにもな技師の格好をしており、ジョージにコップに入った水を手渡す。

「流石に緊張しますよ。演説をするというのは」

「大丈夫だ。公爵だの王族だのは呼んでいないし、今君を待っている彼らはそもそも鉄道に投資をしたいと考えている人間だ。

たとえ君が演説を大失敗したとしても、鉄道会社の設立に協力してくれるさ」

「……ですね」

ソフィアはジョージと目を合わせ、彼を安心させるように肩を叩く。そして、優しく微笑みながら彼のことを送り出す。

「大丈夫！君はこれから飛躍するんだ！自信を持って行け！」

「はいー」

そしてジョージがお立ち台へと歩みを進めていくのを眺めるソフィアに、後ろから声をかけてくる、これまた技師の格好をした男がいた。

「悪魔の生贄にされかけた人が良く言えますねえ」

「もう終わったことだ」

アスタロトであった。彼は軽口をたたきながらソフィアの隣に立つと、二人でジョージが人々から送られる拍手に片手を上げて応える後姿を見守る。

そして、ジョージが舞台の真ん中に立てば、アスタロトは遠くに向かって旗を振り始めた。

先ほどまで雑談でがやがやと騒がしかったパーティー会場はゆつくりと静寂に包まれ、参加者全員の視線がジョージへと注ぎ込まれる。本日の主役であるジョージは先ほどまで見せていた緊張をおくびにも見せず、恭しく礼をし、演説を始めた。

「今日この日、歴史が変わる日、晴天にめぐまれたことをとても嬉しく思います」

ジョージは両手を広げ、観衆に問いかける。

「皆様、ロンディニウムからリバプールまで、馬車で何時間かかりますか？」

誰も答えなかったが、皆分かっている事だった。

「そうです丸一日。それも、急いで、です。どれだけ急いでも24時間！

その上、急げば急ぐほど馬車の揺れは激しくなり、気分も体調も悪くなってしまう。

それもたどり着けるのは数人だけ！」

とても恐ろしいことだ、と言う風に手を戦慄かせながらジョージは顎の下で手を握りしめる。

「遅い！あまりにも遅い！遅すぎる！」

観衆の誰かが「そうだ！」と同調の声をあげた。ジョージはそんな声に対して目をつぶって聞き入り、手をゆっくりと広げながら何かを待つ。

ジョージの沈黙に聴衆が「なんだ？」「どうした？」と疑問の声をあげ始めたその時、

——ポオーウ!!!

美しい音色の汽笛が遠くから鳴り響いた。

皆が草原の向こうの方へと視線を向ければ、そこには立ち上る煙

と、徐々に大きくなってくる黒い何かが見えた。

「我々は、8時間！」

汽笛の音にも負けずにジョージはこぶしを振り上げながら叩きつけるように声をあげる。

「たった8時間！それも、馬車の1000倍の人間を運べます！」

ガタンガタンという音と共に、世界初の商用蒸気機関車がジョージの背後を猛スピードで走り抜けていく。馬よりもはるかに大きくそれでいて鳥のように速い、真っ黒な巨体が煙を立ち昇らせながら、風圧でジョージのスーツをバタバタと棚引かせて通り過ぎていく。

かの蒸気機関車が曳くのは見るからに重い石炭、鉄鋼、そして白いハンカチを振る開発に携わった技術者と労働者達。

聴衆は時代を切り開き、引つ張つていくであろうそれに目を輝かせながら大歓声を上げた。

「我々は朝食をロンディニウムで食べ、夕食をリバプールで迎えることが出来る！」

昼食、バーミンガムでとりますか？

それも素晴らしいでしょう！

しかし、私ならば、流れゆく美しき帝国の風景を眺めながら、客車の中でとるでしょう！

なぜなら、馬車とは違って全く揺れませんから！」

大歓声と万雷の拍手の中、ジョージは勝ち誇った笑みで演説の熱を上げていく。

そんな彼のまさしく独壇場の陰で、ソフィアとアスタロトは安心してように溜息をついた。今回の演出のためにスピーチの時間と列車の時間を合わせるのに結構苦労していたのだ。

そして、一仕事終えたソフィアは熱狂している観衆を眺めながら呟く。

「ロンディニウムからリバプールまでは約200マイル、あれが時速25マイル出るか出ないかくらいだから8時間と言う触れ込みは大体合っている。」

だが、定期的に補給で停車しないとイケない事、実際にはマージ

川を渡河できない事、そもそも線路がないからただの夢物語だな」

「どれくらいかけてその夢物語を現実にするおつもりですか？」

アスタロトの問いにソフィアは舞台袖を去りながら少し考える。思った以上に鉄道会社には出資金が集まりそうだった。それも、かなり良い条件でだ。

(本編開始時にはかなり蒸気機関が普及していたからな。それを考えたら、新しい技術にはとても好意的な世界なんだろうな)

「5年で上手くいったら面白いかな。7年以内には何とかしたいな。

ロンディニウムからリバプールまでを6時間で繋げよう」

そう言ったソフィアはアスタロトに手渡された帽子を自身の長い髪の毛を巻き込むように被り、そのまま物陰に隠してあった自転車にまたがり、一人漕ぎだす。

鈍色に光り輝くそれは、ゴムタイヤも、金属チェーンすらも使用されているとても現代的な一台だった。

ソフィアが何とはなしに工房に設計図を送ったらたった1週間で作り上げられ、慌ててゴムタイヤを作って巻いたことは、彼女にとつてとてもうれしい誤算でもあった。

あのアスタロトでさえ、たった1か月と少しでこの自転車が作り上げられたのには目を丸くさせ、作ったソフィア自身もなんでこんなに簡単にできたのだろうと首を傾げていた。

そんな自転車をこいで向かう先はすでにボイラーに熱を入れられ、まさに動くこうとしている蒸気機関車だった。

その蒸気機関車は野暮ったいボイラーやパイプをむき出しにしたようなものではなく、白亜の流線形のボディを持ち、煙突すらその流線形に合うように斜めに突き出していた芸術的ですからあるものだ。

総じて未来的なデザインをもったその蒸気機関車の運転席から、少し不釣り合いな小太りの男が顔を出してドラのような大声をあげる。

「坊主！ やつと来たな！」

「うん！ 侯爵がもう発進させろって！」

「おうおう！ 行くぜ！ お貴族様に俺たちの傑作を見せてやる！」

ソフィアが少し声を低くして少年のふりをしながらその運転手に

声をかければ、運転手は席に引つ込んでレバーを引き、管楽器のような汽笛を3度響かせる。

一方のソフィアはとても楽しそうな表情をしながら、これまた白銀の先頭客車に乗り込む。客車の中は瀟洒な調度品が並べられ、まるで貴族の屋敷の応接室のようだった。

「ふふふーこれはとてもいいなあ！気に入った！」

そう上ずった声を上げながらソフィアは足取り軽やかにその客車の中を進み、やがてその客車の後方の扉を開く。そして、その客車と別の客車間のむき出しの接合部分に立つと、ロンドイニウム郊外の草原を眺めながら、短い列車の旅を心の底から楽しむのだった。

やがて白亜の蒸気機関車が先ほどまでジョージが大演説をしていたところまでやって来て停車する。

「短い旅にはなりますが、どうぞご乗車ください」

蒸気機関車が完全に停車するのを待つてジョージがそう言うのと、ソフィアは地面に降り立ち、客車の扉を開いてタラップを下ろす。

そのタラップにジョージの先導でやってきたのは数人の貴族たち。彼らは頭を下げるソフィアには目もくれずに、興奮した面持ちでタラップを登り乗車していく。そして、ソフィアが担当していない客車以外にも人が乗りそれぞれタラップがあげられれば、彼女は口にホイッスルを咥えてそれを甲高く吹き鳴らす。

そのホイッスルに応えるように蒸気機関車の汽笛が鳴らされると、ゆっくりと巨体が動き始める。ソフィアは安全を確かめた後、客車と客室の間に飛び乗った。

「上手く聞こえていますように」

ソフィアは動き出した列車の騒音にかき消される独り言を言いながらジョージが乗っている客室の壁面を開き、そこから一つの聴診器を取り出し、それを壁面に設けられた金属製の壁に当てて耳を澄ませる。

『一年もののワインです』

すると、そう言ったジョージの声がソフィアの耳に入ってくる。

実はこの客室には伝声管が密かに設置されており、その末端が先ほ

どソフィアが聴診器の先を当てた金属板だったのだ。

後からジョージ伝いに聞いても良かったのだが、ソフィアはできればジョージと話す相手の肉声を知っておきたかった。だからこそ、こんな迂遠なことをして盗聴していたのだ。

『うむ。美味しいな』

『でしよう。我が家にある中で一等良いものを選んできましたから』

ジョージはそうやってワインを周りに振舞いながら場を温めていく。そして、他愛もない話や、蒸気機関の未来について少し語らった後、こんな密室でしかできない密談を始めた。

『で、ロングフェロー殿。例の件、かなり進んでいるぞ』

『ええ。こちらはかなり積極的に動いています』

前者がかなり威厳のある男の声、後者は少し軽薄な男の声。そして、言葉をつづけたのは威厳のある声の方で、ソフィアが声を聴いておきたかったのもこの男だった。

『ダミアンの奴、相当入れ込んでいてな。50人もギリシアに送り込むことになりそうだ』

『50人も!』

『ああ、確かにギリシアで秘密裏に実験するのは俺も賛成した。だが、ダミアンは俺が考えている以上に……この発明に未来を見ているようだ』

驚いた声はジョージ。『この発明』と言いながら男は何かを取り出したらしく、がちやがちやと音を鳴らしていた。ソフィアが類推するに、それはライフル。それも次世代の試作品だ。

前装式ではあるものの、弾と火薬に細工をしているはずの物。

『ロングフェロー殿。貴君が考えている以上にこれは凄まじい発明なのだぞ』

『そうなのですか?』

『順を追って説明しよう。』

従来の火薬で弾を撃つたら不純物が砲身の中に溜まる上に、大量の煙を出していた。

一方で、この無煙火薬と言うのはその不純物が極めて少なく、煙も

その実無煙とは言えないものの最小限に抑えられる。

砲身の掃除の手間、煙による視界不良から我々は解放されるという事だ』

『ええ。それは知っています』

『だが、それだけじゃない。ここからが革命なのだ。』

この……ピクリン酸と言ったか、は単純に威力が大きい。

威力が大きいということは、従来の大砲、小銃、それに付随する弾と炸薬を全て小型化できるということでもあるのだ。

今までより少ない量で同じ威力を発揮できるからな』

『なるほど……』

『小型化できるということは同じ輸送量でより多くの弾薬を運べるということで、それはそのまま戦力へとつながる。』

それに、弾薬の初速が上がったことで今までは山なりに撃っていたものがより直線的に撃てるようになり、命中精度も上がる』

『いいことづくめですなー！』

軽薄な男の声を手を叩きながら声をあげる。

『そう。いいことづくめだ。革新的すぎる。』

だが、この老いぼれ以上にダミアンはこれに未来を見ているのだ。

頭が固くなった俺にはそれが分からんがな』

ソフィアは耳を澄ませるために一旦閉じていた目を開ける。

視界の端では景色が勢いよく流れており、彼女は頬に感じる風に関放感を覚えながら一人思う。

(後装式と、薬莖だな。)

ダミアンの奴、やはり頭が良いな。流星はゲームの敵役だ。)

後装式とは、銃や大砲に弾を装填する時の方法である。銃口側から弾を込めるのではなく、銃身の後ろ側から弾を込めるようになることで、様々な軍事的な革命が起きるようになった。

特に歩兵に顕著であり、今までは銃口から火薬や弾を注ぎ込む関係上、一旦構えを解いて、その上地面に銃全体を立てて装填しなければいけなかった。それでは歩兵は座ったり伏せたりすることが出来ず、装填中は格好の的になっていた。

しかし後装式になれば、歩兵は座ったり伏せたりした状態で弾を込めることが容易となり、それによって相手から狙われにくくなる上に、大きく構えを解かなくてよくなるので装填スピードも速くなっていくのだ。

そして、その傾向をさらに押し進めたのが薬莖の発明であり。数秒で次の弾を装填できるようになった上、湿気などの環境変化にも強くなり、そして何より今までは無かった弾倉という発想をもたらすのだ。

弾倉が発明されれば次は連発銃であり、それが極まっていけば機関銃となっていく。機関銃が発明されれば歩兵は塹壕にこもり、騎兵は姿を消す。そして、機関銃に対抗するために戦車が現れるのだ。

ドミノが次々倒れるように次の概念と発明が生まれていく。その急先鋒にるのがソフィアであり、先ほど名前が挙がったダミアンなのだ。加えて、その急先鋒から引退を考えている人物が先ほど解説していた男であり、ダミアンの上司だった。

（私はともかくとして、ダミアンの名前がここで聞けるとはな。今の奴は20と少しか？）

これからギリシアに行くのであれば手出しはできないなあ）
ソフィアはこれから必ず敵対するであろう男に思いを馳せようとした。しかし、その思考はすぐに打ち切られることとなる。

『次は私ですね。アリーが対オスマンに領きました』
『本当かね？』

軽薄な声の発言に威厳のある声が問いかける。

『ええ。マームズベリー卿がおっしゃっていた、不審な金の流れ。当局でも確認できました。その流れを強引に止めて、無理やりエジプトに引き込むこともできる事が分かればアリーは二つ返事で領きましたよ』

不審な金の流れと言うのはソフィアの指示でオスマンから流出しかけているそこそこの量の金である。今はその金があるとある港の倉庫に眠っていて、それを国ぐるみで奪い取ろうと——ソフィアからすれば献上——しているのだ。

まだスキームが十全に動いていないので量こそは多くは無いの、今何が何でも身を立てるものが必要なムハンマド・アリーには魅力的に見えたのだろう。

『エジプトが得るのはさらに高度な自治権。まあ、完全な独立ですね。イギリスが得るのはスエズ地峡の利権。』

オスマンが力を失いすぎるのは少し不安ですが、ロシアとやり合う時にはどちらにせよ介入することになっていましてしようし今更ですね』

『では』

『ええ。スエズ地峡に鉄道を引く件。もちろん、マームズベリー卿にお願いすることになるかと』

ソフィアは今一番欲しかったものが手に入るとわかれば、思わずガツポーズをしてしまう。もちろん、最終的にはスエズ地峡には運河を建設するのだが、その時はまたその時の話だ。

『して、マームズベリー卿はなぜオスマンで不穏な物を見つけられたのですかな?』

(あつ。がんばれ! ジョージ! 言い訳するんだ!)

『少し前に話題になった投資詐欺会社、あれの種類があるのではないかと各国で調べていたのです』

『ああ、あれか。俺の親戚も引つかかってかなり凹んでいたな。』

事が大きかっただけに議会のみならず王宮も動いたそうだな

『それは災難でしたね。どのような手法かははつきりとはわかりませんが、先日仕事で赴いたウィーンでも高配当、短期、という共通項があった投資会社があったので気になったので調べたのです。』

私が確認した限り、オーストリア、オスマン、フランスで見つけ、戦争に乗じて派手にやっているのがオスマンでした』

『なるほど、そうだったのですね——』

ソフィアは聴診器を外し、ほっと一息つく。

(これなら多少怪しまれるだろうが、誤魔化しきれるか。)

どうせやっていたのは法も何も関係のない悪魔だしな)

そうこうしている内に列車のスピードが落ち始める。もともと長

い線路を用意できなかったこの路線、20分もしない内に止まることになるのだ。

列車が草原のど真ん中で止まり、ソフィアはその地に降り立つ。
(ここまでは最初の計画から大きく外れずに進めてきた。

金を集め、蒸気機関車や製鉄所を誰よりも先んじて作る。無煙火薬を作って戦争に介入。

上手くいかなかった物もあるが、概ね上手くいった。

(ここからが勝負だな……)

ソフィアは気合を入れ直しながらホイッスルを鳴らし、客車の夕ラップを下ろす。

そのホイッスルの音と、蒸気機関車の汽笛は、草原の向こうへと当てもなく吸い込まれていくのであった。

経過

ソフィアは双眼鏡を覗き込み、はげ山の茶色い斜面を見つめていた。

その彼女の耳にアスタロトの声が届く。

「時間です」

「発破までのカウントダウンを」

「はっ！発破1分前……………」

……………5秒前！4…3…2…1…発破！」

その瞬間、土が一気に盛り上がり、その盛り上がった中心が猛烈な勢いで土ぼこりを立ち昇らせる。そして、その数秒後、

——ドオオオ……………！

ようやく爆発音がソフィアの耳に届いた。やがて土煙が風に流されていくのを見届けたソフィアは双眼鏡を下ろす。

双眼鏡を下ろしたソフィアの目はそのアメジスト色がより美しくなり、彼女は青年と呼べるような姿になっていた。その実、彼女は5歳になったところなのだが、年齢操作の魔術で10歳ほど年齢を増ししているからこそその姿だった。

「ニトログリセリン、凄まじい爆発力ですね」

「ああ。戦争には間に合わなかったが様々な使い道があるだろうな」

アスタロトがそう言うと、ソフィアはヘルメットを脱ぎながら頷く。

ソフィアが生まれて1年もしない内に始まった、ギリシア—エジプト独立戦争はオスマンの決定的敗北で終わっていた。

最初はギリシアが押され気味だったがオスマンはそこでギリシアを押し込み切れずやがて痛烈な反撃を受け、オスマンが支援を要求したエジプトもギリシアと呼応するようにオスマンからの支配を振り払うために独立戦争を開始。

二正面作戦を強いられたオスマンは戦闘を継続しようにも、首都で発生した大規模な経済的混乱で戦費が賄えなくなってしまう。

その後停戦交渉に訪れたイギリスに向かって砲撃をしたためにナ

ヴアリノ湾で海戦が発生し、その時点でオスマンはギリシアとエジプトの要求の殆どをのまざるを得ないことが決定してしまった。

最新型の大砲を積みこんだイギリス海軍はその破壊力を思う存分オスマンの時代遅れの軍艦に叩きつけ完勝。そのままイギリスとオスマンは明確に戦闘状態に入り、その時点でオスマンは戦争を継続できないと白旗をあげたのだ。

(ダイナマイトを戦争に投入したくなかったのだが、恐らくその判断は正解だったな。

帝国陸軍、いや、ダミアンか？ 奴はこの存在を知ったら何が何でも東方で実験したがつただろう)

ソフィアは溜息を誰にも気づかれないように零す。

帝国陸軍が秘密部隊をギリシアに送り込んだのはソフィアも把握していたことなのだが、ジョージが陸軍から漏れ聞いた噂によれば、ナヴァリノの海戦以前にオスマンの将校を狙撃してしまったらしい。

一歩間違えれば重大な国際問題だ。その時はあくまでイギリスは第三者であり、外交的に暗躍は出来ても実際の戦場で戦局を動かしてしまえばそれはもう当事者になってしまう。

それを踏まえると、ダイナマイトの開発を遅らせたことや、爆薬の中でも比較的扱いの難しいニトログリセリンを生成したのは正解だったともいえる。

「さて、帰るか」

ソフィアはヘルメットをアスタロトに投げつけて、後方に止まっていた馬車に向かって歩みを進める。

この五年、ソフィアは屋敷にこもり裏から情勢を操っていただけが、その間にも数多くのことがあった。

「お手を」

御者のエスコートでソフィアは馬車に乗り込む。そして、未整備の草原をしばらく走れば、いつもの石と砂利とで押し固められた道に出る。その道はターンパイク・トラストと呼ばれる有料道路でよく使用された舗装方法なのだが、しばらく走ってもマイルストーンや料金所ゲートが現れない。

そのまま何事もなく街に入れば、その街の道は黒いアスファルトで見事に舗装されていた。

ここはウェールズ南部にある運河が張り巡らされたとある街。ジョージが設立したロングフェロー財団によって大規模に資本が投下され、次々製鉄プラントが建設されている場所だった。

「本当に走りやすくなった」

ソフィアは達成感を滲ませながら窓の外のアスファルト製の道路をみる。たった5年で舗装道路は作り上げられたのだが、道路舗装の知識など皆無だったソフィアは相当に苦労してこの道路を作り上げたのだ。

しかし、その苦労のかいもあって、ガタガタと揺れない馬車の快適な旅がごく狭い範囲ながら実現していた。

「そうですね。素晴らしい道だと思います」

「この周辺のターンパイク・トラストを駆逐したからな。その分、アスファルト舗装をしてその代わりにならなければ詐欺だろう」

南ウェールズはロングフェロー財団、ひいてはその黒幕であるソフィアのおひぎ元となっていた。蒸気機関車を作り上げた後はその改良と路線を引くことに注力した彼女は、少しずつ資金を貯めながら、線路や鉄道橋などによって元々需要があった鋼鉄の需要をさらに拡大させた。

そこで満を持してジョージは鋼鉄精錬技術の平炉法を発表した。

『奇跡の投資家』とすら称されたジョージの投資によって、今までかかっていた鋼鉄生産のコストを10分の1にする技術が開発され大々的に発表されたのだ。

そして、その平炉法を利用した製鉄プラントが南ウェールズに集中的に建てられ、その開発の一環でこのアスファルト舗装の道が引かれていった。

揺れの少ない快適な走りをする馬車はやがてレンガ造りの駅舎の前に止まる。そして、ソフィアとアスタロトが地面に降り立つと、彼女達二人の前を自転車を通り過ぎていく。

「ふむ。自転車も普及し始めているな」

「労働者の足と言われているそうですよ」

「その労働者だって、うちの会社の者だろうに」

ジョージが所有、運用している会社の全てでは相場よりも高い金額の給料を支払っていた。

『労働者に金を渡しましょう。そうすればまわりまわって自社製品を買うことになりますよ』

とアスタロトがある種のフォード主義を提言したのがきっかけだった。ソフィアはその言葉を受け入れ、自転車製造に流れ作業方式を一部導入してそれによって自転車を市場に安く供給していった。

ソフィアは左右を見渡してもう自転車が来ていないことをしっかりと確認してから馬車を離れて駅舎へと入る。そこにはチケット売り場があり、大きな路線図もあり、時刻表もあり、まさしく鉄道の駅だった。

「次の時間は……5分後です」

アスタロトが時刻表で時間を確認しながら言う。ソフィアはそれに頷き、定期券を見せてプラットフォームへと進んでいく。

すると、そのプラットフォームにはすでに蒸気機関車が止まっていて、それは水と石炭の補給をしているところだった。5年前ジョージが演説をした時にお披露目をした二台とは違う、さらに世代が進んだその蒸気機関車はこのイギリスのみならず、その植民地でも広く使われているベストセラーだった。

ソフィアとアスタロトが自由席の客車に乗り込み、適当な椅子に座る。この客車は向かい合うように4人掛けの椅子が設置されていたので、二人の目の前にも別の乗客が座っていた。

その乗客が広げていた新聞には『ソールズベリー女学校、遺伝の法則の発表』と大見出しが出ており、ソフィアはそれをちらりと見た後窓の外へと視線を移す。

（学校の名声を底上げするのも上手くいっている。

ゴムの加硫はともかく平炉法の発表は少々刺激が強すぎたが、今では大学は平民や下級貴族女性のあこがれですらある）

ソフィアは自分の未来の知識をソールズベリーに立てた女学校を

通して発表していた。発表者は大学に送り込んだ悪魔が担当し、彼女ははその研究発表によって巨万の富を得たと大いに新聞を通じて報道した。

そうすれば、多くの女性がもしかしたら自分もと大学に殺到し、その中から優秀な子を選びすぐっていけば立派な大学の完成だ。今はまだオックスブリッジには対抗できていないが、パブリック・スクール、ラゲッド・スクールから教育を重ねていつかはその二校と肩を並べられるほどの水準に持って行きたいとソフィアは考えていた。

「まったく、女が勉強とはね……」

新聞を読んでいた男が呆れた表情でそう呟きながら新聞を折りたたむと、汽笛が駅に鳴り響いた。そして、警笛もいくつか鳴ると、やがて列車がゆっくりと動き出す。

わずかな揺れと引つ張られる感覚を覚えたソフィアは流れる景色を見ながら、含み笑いをする。

(勉強は男がするもの、か)

隣ではアスタロトも目の前の男の呟きに悪い顔をしていて、その吊り上がる口元を手で隠していた。

二人は博愛精神や人権意識に目覚めたわけではない。二人はコミュニティの分断、迫害、敵視が最終的にどういう事に繋がっていくのかをよく理解していた。それが、ソフィアがある夜に言った『爆弾』であり、その夜にアスタロトが考え付いた計画でもあるのだ。

列車は様々な思惑を乗せてウェールズを抜け、イングランドへと入っていく。最初は様々な工事現場が流れていた景色もすぐに牧歌的な風景へと変わっていく。

その牧歌的な風景の中を蒸気機関車が走っていけば、やがてソールズベリーへと到着する。

少し前までのソールズベリーは音楽と芸術の街だったが、最近では女学生がうろつくようになり学問の街としても発展し始めていた。背の高い大聖堂の尖塔と対になるかのように建てられた時計台が新たな街のシンボルとして受け入れられ、その時計台の麓で多くの学生が今日も学んでいるのだ。

ソフィアはソールズベリーにいる時はあえて馬車にも馬にも自転車にも乗らず、アスタロトも追い払って一人で歩くことにしていた。今日もそうで、汽車から降りるとアスタロトを追い払って一人で駅舎を出ていく。

そう広い街ではないが、芸術が盛んだった街だからか景観はよく整えられていた。

人々の活気も、最近では特に溢れていて、未来へ向かおうというエネルギーに満ち満ちていた。

(絶対この街には工場は建てん)

ソフィアは歩道を悠々と、方角だけは屋舗の方に向かいながら当てもなく歩く。

(新しい花が売り始められたな)

彼女とて、花屋を見ればそちらへ目を奪われるし、美しい音楽を奏でる人がいれば足を止めてそれに聞き入る。

「この前ジョンがさあ！指にトンカチを打ち付けた挙句にさあ！」

パブから酔っぱらいの声が聞こえれば、迷惑そうに顔をしかめながらも楽しそうだと少し笑いもする。

「わっかんね〜よお!!」

ベンチに座って頭をかかえる学生を見て、声はかけないが『頑張れ』とエールを心から送りもする。

街は人々が送る日常で溢れている。

そんな光景をソフィアは——彼女自身の本質がどうあれ——愛していた。

そして、ソフィアが公園へとやってくると、そこには一人のプラチナブロンドの髪を持った少女がベンチに座っていて、彼女はソフィアのことを見つけると立ち上がったとととと走って彼女の腰に抱き着く。

「アリス。迎えに来てくれたのかい？」
「ん」

ソフィアが少女のことをアリスと呼び、彼女の頭を撫でながら問いかけるとアリスは小さく頷いた。

「ありがとう。ただいま、アリス」

「おかえり、お姉さま。……だっこ」

「はいはい」

抱っこを要求したアリスにソフィアが微笑むと、彼女のことを抱き上げる。

アリスはジョージが買った5人の赤ん坊の中の一人だった。不幸にもその内の一人は病気で亡くなってしまったが、4人のことをソフィアを始めジョージやその他悪魔達は手を抜かずにしつかりと育てていた。

ソフィアは年齢操作をしている関係上あまり表立って彼女たちに接することはしていなかったのだが、どこから聞き及んだのかその4人共がいつの間にかソフィアのことを「姉」と言い始めたのだ。

「今日はね、エマとね一杯ご本を読んだの。後、ベアトが走り回ってまたカーテン破いてた」

「そうか……。いっぱい本を読めて偉いな、アリスは」

ベアトリスにはよく言つて聞かせないと、と一瞬剣呑な表情をしたソフィアだったが、すぐにその表情を柔らかい笑顔にしてアリスの頭を撫でながら褒めてやる。

すると、アリスは嬉しそうに目を細め、ソフィアの首に腕を回してぐりぐりと自分のことを押し付ける。

（最近、力が強くなってきたな。体も大きくなってきたし、抱っこを続けるのも結構きついぞ……）

ソフィアはしばらくアリスの好きにさせてから彼女のことを地面に下ろし、彼女と手を繋いで屋敷の方へと真つすぐ歩き始める。

その道すがら二人は他愛もない話に花を咲かせ、ソフィアはアリスのことを少しだけ観察する。

（アリスがきつと、霧の都のマジのソフィアだな。最近、顔立ちがよく似てきた）

ソフィアは一つの確信を得ながらアリスの相手をし続ける。一方で、残った頭のリソースを別のことに割いていた。

（彼女がソフィア。ダミアンも一応確認した。そして、手に入れたま

ま解読できていない暗号文の持ち主もまたゲームの登場人物の可能性が高い。

主人公は今頃何をしているんだろうな……)

ソフィアは目の端に映った花びらが落ち始めたデイジーを見て、もうすぐ春が終わるのか、と改めて思ったのだった。

(もうすぐ、世界的な寒冷期も終わる。

今年の夏は暑いのだろうか……)

ソフィアが顔を上げて太陽を見上げふと物思いにふければ、話に集中してない！とアリスに怒られるのだった。

第一章

エルフの騎士が丘の向こうからやって来る

見事な尖塔が立つ大聖堂のすぐそばの、芝生が生える小さな丘で亜麻色の髪を持つ小さな少女が一人で歌っていた。

「エルフの騎士が丘の向こうからやって来る♪

ぴゅうぴゅう、ぴゅうぴゅうと

彼は角笛を吹き鳴らす

風が吹いて窓が吹き飛ばされた」

彼女が歌うのに合わせ風が吹き、美しい緑の芝生はきらびやかに光の波をたたせる。

「彼は東に吹いて、彼は西にも吹いて

彼は望む方向に角笛を吹く♪」

青空を流れる白い雲はまるで白馬のようで、それはゆっくりと形を変えて流れていく。

「ああ、その角笛が私の手にもあればよかったのに

あの騎士様が私の胸にあればよかったのに♪」

そして、そこからは少女は鼻歌を歌い、手に持った木の枝を振りながら丘の頂上へと登っていく。

すると、そこには先客がいて、その女の子は寝転んで空を見上げていた。

「あつ」

「……」

少女が声を上げると、その先客の少女が体を起こして、バツが悪そうな顔で頬をかいた。

「邪魔したかな」

その先客は金色の髪を持ち、宝石のように美しい紫色の瞳を持っていた。

「ううん。いいの。シスター？」

「いいや、違うよ」

少女が首を傾げて問いかけると、先客は少女と目を合わせながら首を振って否定する。

すると、少女は木の棒で地面をぐりぐりとしながら、続いて問いかける。

「じゃあ、暇？」

「暇……暇と言えば暇、かな？」

「暇なら、遊んで」

少女が首を傾げながら後ろ手にお辞儀をして可愛らしく問いかけると、先客は困ったように笑いながら立ち上がる。彼女は少女よりも背が高く、そして髪も少女よりも長く美しかった。そして、そんな先客は頭に付いた芝を取り除きながら、何かを探すように辺りを見渡す。

「うくん……参ったな……」

「迷惑だった？」

少女が少し悲しそうに言えば、先客は慌てた顔でしゃがんで少女と目を合わせる。

「あ、いや！大丈夫。迷惑じゃないよ。ただ……、まあいいや。遊ぼうか」

「うん！ありがとうございます！」

「どういたしまして。じゃあ、何して遊ぶ？お歌でも歌うかい？」

「ん……追いかけてっ！」

少女は木の棒を振り上げてそう言うなり走り出す。先客は少し呆れたように腰に手を当ててため息をつき、やがて十分少女が離れた頃合いを見計らって自身も走り出した。

「待て待て〜」

「待たないよお！」

少女はきやあきやあと歓声を上げながら丘を下って逃げていく。風も彼女のことを押すように、はたまた導くかのように吹いていた。

先客は髪を風にはためかせながら少女を追いかけて、やはり体の大きさが違ったのですぐに捕まえてしまう。

「捕まえた」

「きゃく捕まっちゃったあ！」

先客は少女の肩から彼女のことを包み込むように優しく抱きしめてあげる。それに少女は嬉しそうに彼女の腕を掴みながら体を揺らして、スキンシップに応える。

「攫つて、食べちゃうぞお！」

「あはははは！」

楽し気な声で少し怖いことを言いながら先客が後ろにゆっくり倒れれば、少女も楽しそうに笑い声をあげながら背中に柔らかさを感じつつそれに甘えるように同じく倒れた。

二人は笑い声をあげながら芝生の上を転がったり、かと思えば少女が立ち上がってまた逃げようとしたり。そうやって二人は追いかけてっことを思う存分楽しむ。

そして、ひとしきり追いかけてっことを楽しんだら、先客はまたきよろきよろと辺りを見渡し始めた。二人が遊び始めてそれなりに時間が経っていたからだ。

「親御……お父さんか、お母さんは？」

「んくとね。お父さまは用事。お母さまは旅に出たって、お父さまが言ってた」

「そうなんだ」

少女はなんてことがないように人差し指を顎に当てて考えるそぶりを見せる。先客はその少女の回答ににっこりと微笑んだまま小さく頷いて、彼女の手を包み込むように繋いであげた。

二人は丘に腰かけ、その内の少女は運動をして少し火照った顔を風に晒しながら頬を膨らませる。

「お父さまね、酷いの。勉強をするために寮に入りなさいって」

「酷いんだ？」

「うん！だって、もしそうなら勝手に勉強しないといけないし、友達とも会えなくなるんだよ！友達と会えなくなるのは嫌！」

少女が拳を振り上げながら不満げな声をあげる。先客はそんな彼女の横顔を見つめながら「そうだね」と一度は同意する。その一方で、彼女は少女に言い聞かせる言葉を考えていた。

「でも、新しく友達が出来るかもしれないし、察だつて閉じ込められるわけじゃないからこれまでの友達にも会いに行けるよね？」

「うっ……そうだね……」

「あははっ、本当の気持ちを言つてごらん？」

先客は怒らないからといった風に優しい笑みを浮かべながら問いかける。そして、少女はバツが悪そうな顔で、俯き加減に小さく呟く。

「勉強、嫌い」

「まあ、遊びたい年頃だもの。勉強は嫌いだよ。でも、君の将来のためにも必要なことだよ。それは分かっているね？」

「うん。お父さまにもそう言われた。将来の夢にだつて役に立つて」

「良いお父さんじゃないか。自慢のお父さんだ」

先客は本心から少女の父親のことを褒める。すると、自分の父親のことを褒められた少女は、まるで自分のことかのように喜色満面となり、繋いだ手をぶんぶん振り回し始める。

「うん！自慢のお父さん！」

「大好き？」

「うん！大好き！」

「大切にしないさい」

先客は少女の頭を優しくなでてあげると、少女はうんと頷く。

そしてしばらく少女はなでなでを堪能し、それから興味と疑問が混ざった表情で先客に問いかけた。

「ねえ。お姉ちゃんは何か夢ある？私、まだないんだよね」

「お姉ちゃん？ええっと夢？夢、夢かあ……」

お姉ちゃんと呼ばれたことに戸惑いながら、彼女は空を見上げて少し考える。その視線の先の雲の合間に薄明るい月が見えた。普通の月。少し欠けているけれど、ただの月。

お姉ちゃんはその月を見て微笑むと、少女と再び視線を合わせる。

「そうだね。月に行つてみたいかな」

「ふふっおかしいな。無理だよそんなの！」

お姉ちゃんの夢物語に少女は口元を手で隠しながら笑い声をあげ

る。しかし、笑われた彼女は一つも嫌な顔をせず、少女に楽し気に語って聞かせ始める。

「いや。無理じゃないよ。そうだね……。気球っていう物、絵本が何かで見たことない？」

「うん。ある。温かい空気を入れるって、お父さんが言ってた」

「じゃあ、もつともつと凄いい気球を作ったら月に行けそうじゃない？」
少女はお姉ちゃんのその言葉に考えてみると、確かに空高く飛び続ければ月に行けるような気がしてきた。しかし、宇宙と言う物を知らなくても、少女は月がとても遠い場所にあるということは分かっていた。

「ずつとずつと遠いんじゃないの？」

「まあね。24万マイルって所かな」

「よくわかんない！遠いってことは分かる！やっぱり無理なんじゃない？」

少女が首を傾げれば、お姉ちゃんはにっこりと微笑み、改めて体に向かい合わせにして目を合わせ直した。

「一見不可能なことはこの世の中にいっぱいある。無理だってなる時もいっぱいある。」

でも、そういう時にこそ勇気をもつて一歩踏み出すんだ。

そうすれば、今までできなかつたこともきつとできるようになるはずさ。

勇気をもつて一歩踏み出すことが大事。わかるかな？」

その言葉に少女は分かつたような分からないような表情でこくと頷く。お姉ちゃんはそんな素直な少女に破顔すると、彼女の頭をまた撫でてやる。

うりうりと撫でられ、その少し乱暴だけと思いやりのある手つきに少女が目細めしていると、彼女の視界の端に見知った背格好の男が映った。

「あっお父さまだ！おっいー！」

少女が手を振り払うかのようにぱつと立ち上がり、両手でその男に向かって手を振る。少女曰くお父さまも彼女に向かって手を振り返

すのが遠目にも見えた。

そんな光景にお姉ちゃんが目を細め、おもむろに立ち上がる。

「……私ももう行かないと。じゃあね、元気でいるんだよ」

そして、少女のお尻に付いた芝を払ってやりながら、さよならを言い始めた。

「えっ！もうちよつと遊びたい！」

突然のさよならに少女が振り返る。少女が見上げたお姉ちゃんの様子は微笑んでこそいたが、何も言わなかった。

「駄目なの？」

察しの良かった少女は悲し気に手を所在なさげに動かし、ついには俯いてしまう。そして、少女がゆつくりと顔を上げると、お姉ちゃんは少し屈んで少女と目を合わせてあげていた。

そんな優しい彼女に、少女は言葉を投げかけた。

「いつか、また会える？」

「うん。きつと会えるよ」

「いつくらい?！」

少女の張った声の問いかけにお姉ちゃんは困ったように微笑み、少し間をおいてから少女の頭を優しく撫でてあげながら答える。

「……そうだね。君が良い子でいたなら、ゴーワンの花が咲くころに、きつと」

お姉ちゃんはそこまで言うと、少女の頭を撫でていた手を離し、その手でバイバイと手を振って、丘の向こうへと歩いていってしまう。

彼女の金色の髪が、日に照らされて光るその髪が丘の陰に隠れてしまった頃に、少女の父親が入れ違いでやってきた。

「さっきの子は友達かい？」

「うん。たぶん」

少女は丘の稜線を見ながら頷く。父親もそれに倣って稜線を見るが、そこにはもう誰もいなかった。

「何て名前？」

「聞いてなかった……」

「あちゃあ……」

少女のうかつさに父親は手を額にあてて頭を抱える。名前さえ分かっていたならまた会わせてあげられたかもしれないのに、と思つたのもつかの間、少女は彼の裾を引っ張る。

「エルフの騎士様かな？」

「ははっ。じゃあ、無理難題を言われるぞ」

父親はこちらを見上げて問いかけてくる少女に少し笑い、彼女の頭を撫でながらエルフの騎士の歌のことを思い出す。こういう物は悪しきものにしろ、善きものにしろ、リドルや困難なことを押し付けるものなのだ。

すると、やはり件のエルフの騎士は無理難題を言っていて、それを聞いた彼はつい大きい笑い声を上げてしまう。

「月に行きたいって」

「そりゃ、無理だ！」

「そうかな？」

「いやあ、無理だろー！」

そうやって笑っていた父親は、少し拗ねた顔の少女の次の言葉でその笑い声を引っ込めざるを得なくなってしまう。

「お姉ちゃんは『勇気をもつて一歩踏み出すのが大事』って」

父親は顔を真剣なものにするとしゃがみ、少女と目を合わせて、彼女の手を取る。

「そうだな……。そうだな、無理じゃないな。言い過ぎたよ、ごめん」
「うん」

少女はなぜか先ほどのお姉ちゃんも笑われた気がして、少し嫌な気持ちになつていたが、父親が謝つたことで溜飲がわずかに下がる。

一方の父親は不機嫌な少女のことを撫でてあげ、片方の手はそのまま繋いだまま立ち上がる。

「さ。何かいいものでも食べに行こうか。シャーロット」
「うんー！」

子供とは現金なもので、シャーロットと呼ばれた少女はすぐに機嫌がよくなる。そして、二人は仲良く手を繋いで風が吹く丘を去つていくのだった。

そうやって、大聖堂のすぐそばの、今は何の花も生えていない小さな丘にはついに誰もいなくなつた。

出会い

ロンディニウムの夜は暗い。それは昔からそうだった。だが、近年は昼も薄暗くなってしまっていて、最近は特にそれが酷くなっていた。

次々無節操に建てられる工場、工場以外にも人々が生活するために必要な施設も増えていく。それらが石炭や蒸気の煙、化学薬品のいやな臭い、キッチンや暖炉の煙と匂いなどを出すことでこのロンディニウムに薄もやを漂わせていたのだ。

そんな薄暗い昼の街を、サックコートまたはラウンジコートと呼ばれる少しゆったりとしたスーツに身を包んだ男が歩いていた。そのコートは黒色が少し色褪せてしまっていて、被っているシルクハットもよれてしまっていた。

ズボンは特に色褪せていて、彼の出で立ちには都市労働者でかつ中流階級の下の方の人間だとすぐに見て取れた。

しかし、彼はそんな中流階級の人間にあつて、とても特徴的な部分があつた。顔を包帯でぐるぐる巻きにしていたのだ。

今時のロンディニウムでは、時にそういう人間は見る事ができる。化学薬品か熱せられた蒸気かを被つてしまい、酷く顔を焼かれてしまった不幸な工場労働者だ。

しかし、その一方で男はそんな不幸な人間とはまた違った雰囲気をもっていた。

だが、その違った雰囲気の原因を言語化できる人間は少ない。

「最近、テムズがよっぼど汚くなってきたな」

「なあ、その『よっぼど』って使い方間違つてねえか?」

二人の労働者が休憩中なのか、テムズ川の欄干によりかかりながらそんなことを話していた。そんな労働者を見つけると、包帯の男はしっかりとした足取りで近寄っていく。

「聞きたいことがある」

「ひっ!」

「うげ……」

包帯の男の声は静かだがやけによく通る声だった。ロンディニウムの街中を埋め尽くす人々の声だけでなく、どこからか鐘のように響く歯車がかち合う音、近くでパイプが変形する音、ちようど背後の工場から鳴る蒸気機関のレシプロが鳴らすガゴンと言う音、それらにまつたく負けない声だった。

労働者二人は包帯の男を見て引きつった顔をするが、包帯の男はそんな反応を全く意に介さない。

「この辺りに銀の輪亭と言うパブがあるそうだが、どこにあるか知らないか？」

「あつちだよ。変な気を起こさないでくれよ……」

「ありがとう」

包帯の男の質問に労働者二人は逃げるように立ち去りながら、路地を指差して応える。その方向を包帯の男がちらりと確認すると、背中を向ける労働者に律儀に軽く頭を下げてそちらの方向へと向かい始める。

そして、包帯の男は路地に入って一本道になっているそこを歩く。工場の裏手になっているのか、熱がこもっており、何か酸っぱいような匂いも漂っている気がした。

「……迷ったか？それとも、適当な嘘だったか」

包帯の男は一本道の先にあつた二股の分岐に立つたため息をつく。先ほどの労働者達は分かれ道があることを教えてくれなかつたので、恐らく後者であろうことは何となく察しを付けることが出来た。

彼はその分岐路で左右どちらへ行くかを迷う、ふりをする。右はむき出しの工場のパイプをくぐっていかなければならず、左は何かオレンジ色の廃液の水たまりを跨がなければいけない。

さあ、どうするか？と首を傾げながら、包帯の男はスーツの懐に手を入れながら耳を澄ませる。相変わらず工場の稼働音はうるさく、そんな中、それに交じって人の忍ばせた足音が聞こえていた。

すぐ、背後から。

「誰だ？」

包帯の男は懐に手をつ突つ込みながら問いかける。すると、潜んだ足

音が、ほんの2、3m後ろで突如止まった。

「僕も聞きたいことがあってね」

そして飛んでくるのは男の固い声。どうやら、向こうもこちらを警戒しているようだ、と包帯の男は感じる。そして、ここまで近づいたということは、向こうもこちらを害する手段があるという事でもあった。

「最近、この辺りで何人も人が行方不明になっているんだ。知らないかな?」

「知らないな」

全く予想だにできなかった問いかけと、本当にその事柄を知らなかったことに、包帯の男は肩を落として懐で掴んでいたリボルバーのグリップから手を離す。

「振り向いていいか?」

「……ゆっくりとなら」

包帯の男がその声の言う通りにゆっくりと振り返ると、そこには仕立てが良いインバネスコートに身を包んだ、亜麻色の髪を持つ男が立っていた。

「ふむ。怪しくない男だな」

包帯の男がそう言って懐から手を抜き、両手のひらを空に向けてやれやれといったジェスチャーをする。

彼のそんな行動に毒気を抜かれたらしい男は少し口角を上げ、首を軽く振りながら言葉を返した。

「そういう貴方は実に怪しい男だ」

「当てが外れたか」

「たぶんね」

まだ疑いのこもった視線を向けられていることに包帯の男が、さてどうするかと少し考える。明らかに怪しい人間であることは自覚していたので、身の潔白を証明するのは難しい。

なら、相手が満足するまで付き合うか、と包帯の男は彼に指を向ける。

「じゃあ、好きに質問するんだな。大抵のことには答えてやろう」

「名前は？」

「偽名だが、ダン。でいい。ついでに君の名前も教えてくれ」

いきなりの偽名宣言に質問者は大きく肩を落とす。そして、これでもう完全に気が抜けたらしく、彼は額に手を当てながらため息交じりに名乗りを上げた。

「アラン。アラン・ホームズ」

「アラン・ホームズ？」

その名前にダンは目をわずかに大きくさせながら問い返し、それにアランは戸惑いながら頷く。すると、ダンは顎に手を当てながら俯き加減に何かを考え始めてしまう。

ダンにはアラン・ホームズと言う名前に心当たりがあった。彼の服装はインバネス・コート、それに加えて彼の体格は少し華奢。

(ああ、彼が主人公の父親か)

ダン、その正体であるソフィアは、目の前の男が霧の都のマジ本編開始直前に死んでしまう主人公の父親だと察した。彼が死んだことで、主人公はその真相を探るために彼のコートを借りて探偵となり、この街を駆けずり回り始めるのだ。

「ふっ」

ソフィアはつい笑ってしまう。いったい何の因果か、本編開始前にこんな所でキーマンに出会えるとは。

「僕に何か？」

「いいや。君の名前を小耳にはきんだことがあったただけだ。その記憶を引っ張り出していた」

戸惑うアランにソフィアは嘘は言わずに適当に誤魔化す。そして、ソフィアはポケットに手をつ込みながらアランへと声をかける。

「恐らく、私は君に協力できるが。どうする？」

「……信用できない」

「それもそうか」

怪しい男のダンが自分のことを知っていたという事に、先ほど鳴りを潜めた警戒心を再び露わにしたアラン。そんな彼に、ソフィアはどうしたものかと考えながら、突如なんてことないように歩き始める。

そして、アランの横を通り過ぎ、今来た路地をまた戻り始めた。

「あ、ちよつと！」

急に立ち去ろうとしたソフィアのことをアランは追いかけて始める。そして、ピツタリ数歩分後ろを歩きながら彼は声をあげた。

「質問！まだ質問があるー！」

「どうぞ」

「君は何者なんだ？」

「特に何者でもないが。そうだな……、今はただロンディニウムを散策したい人間だ」

「嘘だろ？」

アランが明らかに怪しい男が『特に何者でもない』と言うことに非難の声をあげる。すると、ソフィアは足を止めて半身で振り返り、包帯の奥から楽しそうなアメジスト色の瞳を光らせ答える。

「嘘じゃないんだな、これが。今は特に目的がない」

「……」

胡乱気な視線をアランが無言で返すと、ソフィアはポケットから片手を出しその手をひらひらとさせる。

「そもそも、このロンディニウムに来たのがつい数日前なんだ」

なおも無言のアランにソフィアは帽子の角度を直しながら、壁際に沿うように張られたちようど腰のあたりの高さのパイプに腰かける。少し温かいパイプだった。

「じゃあ、逆に聞こう。君は私のどこが疑わしい？答えて」

アランは狭い路地で、ソフィアと逆側の壁に背を付けながら、足元から頭の手先までじっくりと観察する。

「まず一つ。足取りが随分軽い」

「要領を得ないな、もっと詳しく」

「見た目ははつきりいって中産階級の下、そういう人間はどうしても足取りが重くなる。不安や、疲れ、他の負の感情からね。なのに貴方にはそれがない」

「お見事。他には？」

ソフィアはそう言いながらパチパチと手を叩く。

「包帯は汚れてこそいるが、綺麗だ。怪我人だったり、怪我が治っていても本当に困っている人はもつと包帯が汚くなる」

「素晴らしい。まだあるだろうか？」

アランは段々と自分がテストされている気分になってきていた。加えて、自分の直観としても、段々と目の前の男は潔白ではないにしろ悪い人間ではないと思いついてきた。

「声や発声、抑揚、そう言ったものが綺麗だ。下町でも、他の地方から来たわけでもなさそうだ……もしかして貴族かい？」

「実に鋭い。ただ、私の身の上に関してはお任せするよ」

「はあ……ロンドンに来ればつかりつて言うのはそうかもしれない。靴も古く見えるがすり減っていない」

「ふむ。他にはもうなさそうか？」

ソフィアは立ち上がって自分の服装を見回す。自分でも鏡を見て気が付いていた部分があらかた指摘され、やはり時々街歩きをする程度では簡単に街に馴染むことはできないかと少し反省した。

「最後に」

アランが指を一本立て、それにソフィアは顔をあげる。

「思慮が深すぎる」

「……それは自分でも気が付いていなかったな」

そして、思ってもいなかったことを言われて、ソフィアは一本取られたと楽しげに笑い、またパイプに腰かける。そんな行動にアランは頭を掻き、妙に警戒心を薄れさせるような気安さがある目の前の男のことを警戒しすぎることは止めることに決めた。

とはいっても信用するわけではないが。

「まだ質問したいことがあるんだけど、いいかい？」

「もちろん」

「僕のことはどこで？」

「探偵とかいう奴だろ？あまり多くはないからな、知っていたよ」

「あー……、なるほどね」

アランは目の前の男がスラムツアーなどをしたがるタイプのもの好きな貴族だったとしたら、確かに自分のような珍しい人間のことは

知っているかと納得する。何度か貴族を連れて下町を案内したこともあったので、そのつながりかもしれないなかった。

「納得できたかね？」

「したよ。まあ、怪しい人間であることは変わりないけど」

「良いと思うんだがな」

ソフィアは自分の顔を覆っている包帯に触れながらからからと笑う。煤だらけのこの街でマスクの代わりになるし、顔も隠せる、場合によっては相手に恐怖を与えられるかもしれない。

怪しすぎることも、包帯の男と言う虚像へ焦点を当ててしまい、真実がぼやけるといふ事にも期待ができた。

ソフィアはアランからの疑いが薄れたことを確認すると、妙に温かいパイプから腰を上げる。そして、その場から立ち去ろうとして、自分の本来の目的を思い出した。

「ああ、そうだ。銀の輪亭ってパブを知らないか？探しているんだ」「知っているけど……どうして？」

アランも壁から背中を放してソフィアの斜め後ろを歩きながら問いかける。

すると、ソフィアはわずかに上ずった声でその店に行く、二つ目の理由を語り始める。

「ヴァン・ホーテンのココアを美味しく飲めると聞いてね！後、固形チョコレートが食べられるとも」

バンホーテンココアはちょうどこの時期に開発された、初めての酸味が少ない現代的なココア飲料である。史実ではそれが洗練されるのも、また固形チョコレートが開発されるのももう少し先なのだが、この世界ではもうすでにそれらが完成間近になっていた。

(ゲームでキャラクターがたむろしたり待ち合わせするのが銀の輪亭で、そこで皆ココアなりチョコなりを飲み食いしていたからな。その都合だろう。)

本当の理由は今のうちに原作に出てくるスポットを見ておきたかっただけで、入店するつもりはなかったのだが、まあいいか)

アランはその二つを味わったことがあるのか、味を思い出しながら

うんうんと何度も頷く。

「ああ、そうか。あれは美味しいからなあ。よし、案内しよう。よく知っている場所だ」

「楽しみだ」

すると、なぜかソフィアが先に歩き始め、船頭となつてしまう。狭い路地なので二人並ぶことが出来ないのはそうなのだが、アランは彼の傍若無人さにため息をつきながら彼の後を追う。

路地を抜けて、広い通りに出てもソフィアは適当に左に曲がって歩き続けて、アランは小走りでそんな彼の隣に立つ。

アランが何でそんな適当に歩くのだと、隣の男に言おうとしたら、彼の視線の先に、一人の子供が束になった新聞を抱えて声を張り上げているのが見えた。

「新聞！新聞はいりませんか！」

「一部くれ」

ペーパーボーイと後に呼ばれるようになる児童労働者に対し、ソフィアは新聞の代金の5セントだけを支払う。そんなやり取りの最中、ペーパーボーイがエプロンのように吊り下げている木の看板には新聞の第一面の内容が大々的に示されていて、それをアランが読み上げた。

「電Electrical 氣seem 的phore 信Telegraph 号h 機h、もしくは電Electrical 氣telegraph 的h 通h 信h、か。気になる？」

「まあね。その内、電Telegraph 信hとだけ呼ばれるようになるだろうな」

新聞の第一面には『電氣的通信の発明！』と乗っており、その下に続く解説記事には、ソールズベリー女学校の研究者が通信プロトコルを含め新たな通信技術を発明したと書かれていた。

「どういうことだ？」

アランの問いかけに、ソフィアは彼の肩を叩いて先導する様にと促す。そう気安く接せられたアランは迷惑そうに眉を顰めつつも、悪い気はせずに目的のパブの方へと歩き始める。

そうして歩きながらソフィアが新聞を読みその内容を確認すると、それをアランへと『自分で考えろ』と言わんばかりに押し付ける。アランは新聞に書かれていた、公開された分の技術関連の解説を読んで

頭をひねり、「やっぱりよくわからない」とソフィアに視線を向けることで解説を促した。

「一般化するだろうってこと。政治、経済、情報、その他にかかわる人間のみならず、普通の人々の手紙もこれで送るようになるだろう。

今の内に慣れておくといい、きつと便利だ」

「ううん……僕も結構古いタイプの人間だからな。中々難しそうだ」

新聞を読む限り、この記者もこの技術が広く使われていくようになると考えているようだった。曲がりなりにも情報を扱う仕事だからか、この類の技術にはとても敏感で、メディアそのものがこれから成長するだろうという言葉も書かれていた。

「それにしても、ソールズベリー女学校は凄いな。どんどん世界が変わっていく」

「そうだな——」

アランは感慨深げにそう言って新聞を折りたたんで小脇に挟む。そして、そんな彼の隣を歩くソフィアは、街行く人々の数年前からほとんど変わっていない光景をみながら頷く。

この数年、確かに多くの技術は進歩していた。しかし、人々の生活は変わらない。それどころか悪化してさえいるように見えた。

「——世界は変わっていくものだよ」

そんな光景の中、ソフィアは感慨深く言うのだった。

人探し

アランの道案内でソフィアはとあるパブに来ていた。パブとはパブリックハウスの略で、大雑把には酒類を提供する場のことではあるが、その歴史は深くかつ様々な似た概念と混雑してきたので、その本質は一口には言い表せないものでもある。

今日、ロンディニウムにあるパブは全て法律の下に許可された場であり、そういう意味でもパブリックと言えた。事実、無許可の店があつたとしてもだ。

そして、そんな中許可を得て営業していたごくごく普通のパブの前で、二人の男が並んで喋っていた。

「ここが銀の輪亭なんだけど……」

と口ごもるのはインバネスコートに身を包んだ男。名をアラン。

「そうか。……入らないのか？営業しているようだが」

そして、その声にパブを指をさしてそう問いかけたのが、サックコートに身を包み顔を包帯で覆った男、変装をしたソフィアだった。

アランは顔をしかめながら自分の顔に指を向けることで一つの主張をする。

「いや、ねえ。駄目だと思うんだよね。僕」

「……ああ。なるほど」

ソフィアは自分の顔を覆っている包帯のことを思い出し、確かにと頷く。しかし、ソフィアはためらわずに一步進んでパブの扉に手を掛ける。

「追い出された時は、追い出された時だ」

「なんだか僕、貴方のことが分かってきた気がするよ」

後からついていくアランがため息をつき、その声と共に扉に付けられたベルがカランと鳴る。果たしてその扉の先にはトレイを持った給仕らしき女性がいて、その女性が振り返って入ってきた人に「いらっしゃいます」と口を開きかけて、目を丸くさせる。

「ななっ!!」

「危ないぞ」

思わず手を上げて悲鳴を上げかけてしまう給仕。そのはずみでトレイが宙に浮くと、ソフィアは一步前に出ながらそれに手を伸ばして空中で受け止める。

だが、それが悪かったのか、突如近付いてきた格好になった包帯男に、給仕は顔を真つ青にさせてついに絹を裂くような声をあげた。

「キヤーー!!」

「落ち着いて」

包帯男から逃げようとして転びそうになる給仕の腰を、ソフィアはトレイを持たない手で支え、彼女が倒れないように手助けをする。

結局給仕が転ぶことはなかったが、バタバタと手足を動かしてソフィアから逃げていき、彼女は包帯男の後ろに立っている知り合いに気が付くと、大声で非難の声をあげる。

「ホームズさん！なんて人を連れてきているんですか！」

「ハドソン夫人。落ち着いて。彼はダンと言います。……怪しいですが、悪い人では多分ありません」

アランは両手で落ち着いてと身振りをしながら、ソフィアの前に進み出てハドソン夫人に声をかける。一方のソフィアは掬い上げたトレイの上にこぼれていた、本来は皿に丁寧に盛りつけられていたであろうチョコレートを口に運ぶ。

(甘い。美味しい……素晴らしいな)

「ダン。名乗りなよ」

「ん？ああ、ダンって私のことか、そういえば」

ソフィアが久しぶりに食べるチョコレートの味に感動していると、アランが彼女のことを肘で突いて自己紹介を促す。そこでようやくソフィアは自分が話題にされていることに気が付いて、ハドソン夫人としつかり目を合わせて頭を軽く下げる。

「偽名ですが、ダンと言います。アランとは先ほど出会いましたね、少し喋りましたが彼はとても理知的で素晴らしい。きつと、このパブの素晴らしい菓子を食べているからでしょう」

『素晴らしい菓子』という言葉にハドソン夫人が頬に手をあてて嬉しそうにし、それにソフィアはにつこりと笑いながらまた一つチョコ

レートをお口にされる。

見た目通りの危なそうな人ではないと理解したハドソン夫人は、包帯男改めダンに上品に礼を返す。

「この店主をしておりますハドソンです。ええと、その包帯は？」

「気にしないでください」

「えっ？」

「気にしないでください。これ、お返ししますよ」

戸惑うハドソン夫人にソフィアはトレイを突き返して有無を言わさなかった。ちなみに、チョコレートをもたもう一つつまみ食いしながらだ。

チョコレートをお口に含んだソフィアは、すでに店内にいた客に見つめられているのを気にせず一番奥のテーブルへと進んでいく。

この銀の輪亭と言うパブの内装は、小奇麗でモダンな雰囲気があった。

ランプの揺らめく火に浮かび上がるテーブルや椅子はよく手入れされて、暗めの琥珀色に輝いていたし、カウンターテーブルも傷一つなく滑らかであった。カウンター奥には様々な酒が並べられ、その隣にはソフィアのお目当てのココアの缶も置かれてもいた。

そんなパブの一番奥のテーブル席をソフィアは選び、椅子を引き出す。椅子は男の腰あたりの高さであったが、ソフィアはその椅子に難なく座る。

(そう言えば、私って背が高いのか?)

この時初めてソフィアは自分の背が高い事に気が付き、ちらつとアランの顔を見る。同じテーブルの向かい側に着いたアランはソフィアよりも少しだけ目線が下にあり、アランと他の店にいる男達とを比べると彼は少しだけ背が低いようだった。

(主人公が同じインバネスコートを着るからな。彼も背が低いのか)

その事実にも妙に納得したソフィアはテーブルに腕を置きながら、ハドソン夫人を呼び立てる。すると、先ほどトレイの中身をダメにしたからか改めて配膳しなおしていたハドソン夫人が「少々お待ちを」と返した。

彼女がやってくるまでに少々時間が出来たため、アランはこれ見よがしにため息をつきながらソフィアのことをねめつける。

「なあ、猫被ってないか？」

「被ってないよ」

ソフィアはそうやって軽く返し、店内の壁に貼られたバンホーテンココアのポスターを見て内心感動する。

「僕はこの数十分の内で貴方のことがよくわかり始めたよ」

「ほう？」

ソフィアが片眉を上げて挑戦的にアランのことを見る。ただ、その表情変化は包帯で隠されて見えないのだが。

「自分勝手」

「自覚はしている」

ソフィアは頷くと、また店内へと視線を向ける。そんな彼女の態度にアランはまた長いため息をついたのだった。

「あれだ。自分の能力を信じて疑わないし、実際能力があるからタチの悪い奴。大学の教授連中みたいなの」

「大学に行ってたのか」

「まあね」

アランが口をへの字に曲げながら曖昧な肯定をする。ソフィアはそんな彼の言葉を聞きながら、はてアランは大学に行っていたのか？と前世の記憶を探ろうとする。しかし、すぐにそれはやめる。なぜならば、行っていないようが行っていないまいが関係がないからだ。

一方のアランはそうは考えなかったらしく、ソフィアへと真剣な表情で問いかける。

「貴方は大学教授？」

「好きに考えると良い。数学の問題でも出そうか？」

「そういう所だよ」

アランが今日何度目かのため息をついたところで、ハドソン夫人がテーブルにやってくる。

「何か聞きたいことがあるんですか？」

「ええ。ここでは酸っぱくないココアが飲めると聞いたのですが、本

当ですか?」

「もちろんですとも。バンホーテンのココアなんですけれどね。それをまたうちでアレンジしているんですよ」

ハドソン夫人は先ほどソフィアも見ていたポスターを指さす。そして、聞きたいことが聞けたとソフィアは深くうなずき、ハドソン夫人に注文をする。

「じゃあ、そのココアをいただきたい。後、先ほどの美味しいチョコレートも」

「承りましたわ。それで、ホームズさんは?」

「サイダーをお願いします」

「いつものですね」

「ええ、いつものをよろしくお願いします」

アランが頼んだサイダーとは炭酸飲料と言う意味ではなく、リンゴをアルコール発酵させて作った歴としたお酒である。日本ではシールドと呼ばれるのが一般的だ。

ハドソン夫人が注文を受け取ると、カウンターへと戻っていく。それを見送った二人の間には沈黙が訪れる。先ほど出会ったばかりだから仕方がないのだが、アランはその沈黙に気をもみ、先ほど押し付けられた新聞の残りに目を通し始め。一方のソフィアは興味深そうにハドソン夫人の手つきを観察していた。

そして、沈黙のまま時間は流れ、やがてハドソン夫人が注文された品を持ってくる。

「ありがとうございます」

「いただきます」

ソフィアとアラン二人は彼女に礼を言うと、それぞれ注文したものを受け取る。ココアは柔らかな湯気が立っていて、チョコレートは黒光りしてとてもおいしそう。サイダーも、ランプの光の加減であめ色に輝いて、気泡を揺らめかせていた。

ソフィアは先ずはカップを持ち、ココアの匂いを楽しみ、一口飲む。

(甘いチョコレート香り、少しミルクも入っているか? 実に美味しい) 目の前でお上品にココアを飲み始めるソフィアのことを観察する

アランは、いつもの“サイダーを脇に寄せ、それで開いたスペースに新聞のとあるページを開く。

「なあ。『私は君に協力できる』って本当かい?」

「覚えていたか。耳聡いな」

「まあね。で、どうなんだい?」

ソフィアはチョコレートを口に含んでその味を堪能してから、頷いた。

「人の失踪だったか?できるだろうが、仕事の合間を縫うことになる。調査にはほとんど同行できないぞ」

「それでもいい。今は猫の手も借りたいんだ」

その言葉と共に、アランは開いていた新聞を文字が読めるようにソフィアの方へと反転させて、その記事を指でトントンと叩く。

「じゃあ、改めて。今、ロンディニウムでは人が多く行方不明になっているんだ。

ここに書かれているように、新聞でも取り上げられるほどだし、広告欄でも人探しの投書がされている」

「はつきり言うが。今どきのロンディニウムで行方不明者は日常茶飯事だと思うが?」

ソフィアはココアを飲みながら新聞の内容に目を向ける。

『今ロンディニウムでは失踪が相次いでいる。それは下級労働者から中級労働者のみならず、高度技術者にまで及んでいる。中には貴族位を持っている者も。』

その失踪は前触れがない。昨日まで一緒に酒を飲んでいたのに、朝になったら行方不明となっている。

近隣住民や金銭的なトラブルも無いのに、煙のように消え去っているのだ』

「飛ばし記事に見えるが……そうじゃないんだな?」

ソフィアがそう言ってアランのことを見れば、彼はまじめな顔で頷く。

「僕はここに書かれている貴族位を持った方の親族に依頼された。本当に前触れなくいなくなつたようなんだ」

「ふむ」

「それで、調べ始めるとこの数か月で次々人がいなくなっていることが分かった」

アランは懐から手帳を取り出すと、そこに書かれた名簿をソフィアに見せる。そこには人の名前が羅列されており、その人を見かけなくなった日付、失踪者の人となり、人間関係、それらも要点を押えて書かれていた。

（一番古い日付が1年前。そこから規則性無く断続的に失踪が相次いでいる。

しかし、約4か月前から日付の間隔が急激に狭くなり、ほぼ連続して失踪、か）

「4か月、いや、この半年で居なくなつた人間が事件に巻き込まれている可能性が高いな。

それ以前の失踪者は別件か、個人的な理由だろう」

「貴方もそう思うか……」

ソフィアはココアを楽しむために一旦思考をやめて、それからカップに口を付ける。その間にもアランは手帳に目を落としながら言葉を重ねていく。

「いなくなつた人の共通点は今のところ見つからない。港湾労働者から、乗合馬車の御者まで、様々だ」

「ふむ」

一杯のココアの量はそう多くない。ソフィアはそれを飲み干してしまい、少し残念そうにカップを置いた。そして、チョコレートを手に取り、口に含む前にアランに問いかける。

「いなくなつたという貴族は何の仕事を？」

聞きたいことを聞くと、ソフィアは手に取った物を口に放り込んでその味を堪能し始め、そんな彼女にアランは手帳をめくってあらかじめ聞いていたことを再確認する。

「大学を卒業したばかりで、まだ仕事は決まっていなかった。

研究していたのは、ええと、……地面工学？ってご家族が。書いていたらしい論文はまだ調べられてない」

「地盤工学か？」

「そう、それ。よくわからないんだけど、どういう学問？」

「それを説明するためには、もう一杯のココアが必要だ」

その言葉にアランは立ち上がってカウンターへと赴き、ハドソン夫人へとココアの用意を頼む。そして、いつの間にか無くなっていたサイダーの代わりに、自分も一杯のココアを頼んだ。

ソフィアはアランが帰ってくるなり、解説を挟む。

「まあ、単純に言えば地面の下を考える学問だ。特に、何かの建物を建てる時の地面の下を考える」

「それだけ？」

「単純に、って言っただろ。実際は難しい分野だし、重要度も高い。これを軽視すると、かの有名なピサの斜塔のようになる」

ピサの斜塔と言われて何かに思い至ったのか、アランが納得したような表情になった。

「個人的には、今乱立している工場や建築物には安全性が担保されているのか、と一言言いたい。確かに今は建てれば売れるという――

ソフィアがアランに対する解説から続けてずっと感じていたことを口走っていると、その途中にハドソン夫人が二人のココアを持ってくる。

――ありがとう、夫人。今はそういう話では無かったな」

「ありがとう」

「いえいえ」

ココアの差し入れで一旦言葉が区切られたために本題を思い出したソフィア。そして、長話が始まりそうだと内心戦々恐々としていたアランは、二重の意味でハドソン夫人に感謝を述べる。

「何の話だったか？」

「行方不明になった人たちの共通点」

「ああ、そうだった。もう一度名簿を見せて」

ソフィアはアランから手帳を受け取ると、それをもう一度読み込み始める。現状はデータが集まり切っていないためか、傾向は余り読み解けなかった。

年齢は30〜50代が多く、中流以下は場所や身分問わずに失踪している。肉体労働者も頭脳労働者もいる。外れ値としてはやはり、一人だけいる地盤工学を学んでいた貴族だろう。論文も書いていたので、貴族と言っても学者の卵か。

ソフィアが一人考え、彼女が一定の結論を出すまでにアランがココアを飲んでいると、沈黙が訪れる。すると、その沈黙を利用して、話を漏れ聞いていたのかハドソン夫人が横から口を挟んできた。

「行方不明といえば、数年前、人が大量にいなくなったと話題になっていませんでしたか？」

「大量に？」

「ええ。イーストエンドのあたりじゃなかったかしら？物騒なことがあるものだと、震えあがりましたわ」

ハドソン夫人は自分を抱きしめるようにして震える仕草を見ると、話したいことはそれだけだったのかカウンターへと戻っていつてしまう。

「さっきの話、僕はロンディニウムが長くはないから知らないんだけど、貴方は？」

（イーストエンドで大量失踪？）

……私がジョージの息のかかった人間を殺した件か？）

ソフィアはココアを啜り手帳の内容に頭を悩ませているふりをしてながら、ハドソン夫人が言っていた事件はかつて自分が行ったことではないかと思いつく。果たしてこの件を知っていると言うべきかわざらざるべきか……、その判断は早かった。

嘘はつかないが、真実も言わない、と。

「ある程度は知っているが、今回の件と関係はあると思うか？」

「分からないけど、無関係ではないと思う。たとえば同じ背景がなくとも、共通項があるかもしれない」

「ふむ。確認するべきか」

（あれからあのテラスハウスはさらに所有者を転々とさせて、ジョージに繋がらないようにした。）

それからはどうなったか確認していなかったからな。これはいい

機会かもしれない)

ソフィアはココアを飲み干し、手帳をアランへと返す。彼はカップに口を付けながら片眉を上げてその手帳を受け取り、同じようにココアを飲み干すためにカップを大きく傾けて一気に呷った。

「何かわかった?」

「何も。ココアが美味しいという事くらいか」

「そうだね」

情報収集の途中だから悲観するものではないが、事態は行き詰まっ
てしまっていた。これを解決するにはさらなる調査が必要だと二人
には判断できた。

「で、どうする?手伝って欲しいならある程度手伝ってやれるが?」

ソフィアはそれなりに乗り気でアランに問いかける。謎を解明す
るのは楽しいものだし、一歩間違えれば自分に累が及ぶ可能性もあつ
たので、それにつながる糸口は先に見つけて封殺したくもあつた。

そんな思惑があるとはつゆ知らず、アランは右手を差し出す。

「手伝いを頼みたい。お願いできるかな?」

「もちろんだとも」

ソフィアはにっこりと笑ってアランの手を取り、しっかりと握手を
する。とはいっても、その表情の殆どは包帯で見えていなかったのだ
が。

「報酬はここを奢ってくれればいい」

「それくらいいいのかい?」

「いいんだ」

アランは余りに安い報酬に目を丸くさせる。彼は先の貴族の親族
からそれなりの前金を貰っていたし、成功報酬も多く期待できていた
ので、その半分は払う気で居たのだ。

「さて、探偵殿?これからどうするかね?今日は一日空いているから
付き合っってやれるぞ」

アランのそんな戸惑いを知ってか知らずか、ソフィアはからかうよ
うにアランに顔を少し近づけ、楽しそうな目線を合わせて問いかけ
た。

そんな彼女の仕草にアランは肩をすくめ、厚意に甘えることにした。

「じゃあ、これからイーストエンドに行ってみよう。多分そつちの情報はある程度集めやすいだろうし」

「というところ？」

「場所、どれくらいの人が居なくなつた、とかくらいならすぐに集められるだろうってこと」

アランはそう言つて椅子から立ち上がり、ハドソン夫人の下へと歩いていく。二人分の勘定をするために財布を取り出し、ついでに何かを——先ほど聞いた情報についてだろう——を話して背を向けている間に、ソフィアは机の端にある小さなグラスに目を向ける。

「さて、これは何だつたんだ？」

ワンシヨットグラスよりは少し大きく、ガラス質で特に装飾も無いサイダーが入っていたそれを手に取る。しかし、グラスの中に残るのは少しの水溜と、僅かなりンゴの香りだけ。

ソフィアは手の中でそのグラスを少し弄んでからひっくり返し、コツン、と音を鳴らして逆さまにテーブルに置く。

「ダン。大雑把な場所は聞いてきたよ」

「わかつた。行こうか」

そして、アランが帰つてくると、ソフィアは何事も無かつたかのように立ち上がり、二人は連れ立って銀の輪亭を出ていく。

後に残されたグラスは、ランプの火の揺らめきをただただ乱反射させていた。

潜入

イーストエンドとは一口に言ってもその境界線はあいまいだ。

ロンドンデニウムの東にあること、テムズ川の北側にあること、港湾施設があるあたりが中心であること。

明確なのはこれくらいだ。今は取り壊されたロンドンデニウムの壁の向こう側だの、アルドゲート・ポンプと呼ばれる給水所から向こうがそうだ、とも言われるがやはり明確ではない。

そんなイーストエンドの中心になっていた港湾施設、それそのものは健全に使用されていた。ただ、そこで働く人間は低所得者層で、彼らの給料はどうしても低く、彼らを支えるサービスもやはり低品質なものになって行く。その悪循環がここが結果的にスラムになり果ててしまった原因の一つだった。

それに加え、低所得者でも生活が出来るという事は、田舎からロンドンデニウムにやってきたばかりの人間も集まってくるという事で、ロンドンデニウム全体が繁栄するにつれてそのスラム化はますます加速していた。

最近では、そんなスラム住人が生んだ子供が加わり、ますます混沌とした雰囲気になりつつある。

そんなスラム街の比較的马シな通りをダンことソフィアとアランは歩いていった。

「嫌な雰囲気だ」

「これからもっと酷くなっていくぞ」

アランがイーストエンド全体に横たわる、活気があるようで無気力さが垣間見える空気に顔をわずかに顰める。しかし、ここはこれから半世紀以上もかけてさらにひどくなっていく上に、そもそもここはまだイーストエンドの端の方だった。ソフィアはその二重の意味を持つ言葉を語る。

「よし、手分けするか。効率的に行こう」

そして。ソフィアはポケットに手をつ突っ込みながらその言葉を残してアランと別れようとする。それに慌てたのはアランで、彼は彼女

の背中に声をかける。

「どこでどうやって合流するんだ！」

「大量失踪の事件現場で集合！」

ソフィアは片足でぐるりと回転して後ろを向くと、相談もなく勝手に集合場所を決めてしまう。そして、その回転の勢いのまま、スーツをはためかせながら進行方向へと向き直り、そのまま歩き続けた。

(ネクタルだったか？今もあるかわからないが、まずはあそこを目指そう。それから例のテラスハウスに行けばいい。

これにアランはつれていけないからな)

ソフィアはアリバイ作りのために道行く人に「かつてここで失踪事件があったらしいが？」と聞いて回る。最初は包帯をぐるぐる巻きにした男に警戒心を抱かれ、まともに聞き込みが出来なかったが、適当に金を包めば皆口々に情報を話し始めた。

曰く、

「ゴーストストリートの失踪だな。確か100人もの男女が一夜にして消えたんだ」

「誰も寄り付かぬ場所だよ。今でも人が消える」

「あそこは昔娼館だったんじゃ。それで、お偉方に一斉摘発されたんじゃ」

「実はあその土地は王族が持つてるって話だ。だから誰も近寄れないんだ」

「あのストリートは今じゃ、ゴーストストリートって言われてる。本当の名前は忘れたな。誰も近寄らねえ」

「その事件と同じ夜、どつかのパブでも殺人があつたんだよ」

「あそこには近寄るな！ゴーストが出る！よそ者が手を出すな！」

虚実入り混じる市民の証言にソフィアはうんざりしながら、かつてパブ、ネクタルがあつたと記憶していた地点の近くで中年の無精ひげを生やした男を捕まえる。

「聞きたいことがある。ここらあたりで、パブの店主が殺されたって話、知らないか？」

「ん？ああ。あそこだよ。あそこのネクタルって所だ。あそこのネク

タルつて所で、男が死んだ。あそこだな。今もやってる」

中年の男はひげをぞりぞりと搔きながら、思い出す仕草なのか首をゆらゆら振りながら応える。そんな男にソフィアはポケットから手を出しながら続けて質問をした。

「その店主が殺されたのと同時期に大量失踪事件があったらしいな。知らないか？」

「知らない。いや、知ってる。20人ほどいなくなった。全員、いなくなつた」

「そうか。ありがとう」

ソフィアは中年の男の顔をよく見て、それから最後に一つと付け加えて質問をする。

「君は普段どこで何をしている？」

「俺か？俺は、靴を磨くのが仕事。道端で靴を磨いている」

「そうか。邪魔したな」

ソフィアは手を上げて男から離れていく。そして、数歩離れた後、振り返り、その男のことをもう一度よく見た。

その中年の男は、農民が着るようなスモックを着ていて、幅広の帽子をかぶっていた。明らかに、靴磨きではない。そもそも、ソフィアの包帯について何も触れなかった。

ソフィアは不気味さを覚えながら、その男がゆらゆら歩いてやがて路地へと入っていったのを見送つてから、教えられたネクタルへと歩みを進めた。

そしてやってきたネクタル。ソフィアはパブの木扉を開け、その中へと油断なく歩みを進める。

果たしてそこは汚らしい男たちの巣窟だった。よれよれのスーツを着たうらぶれた男たちが煙草と酒とをテーブルに並べて管を巻いていたらしいが、今はその全員が驚きか敵意を持った目で闖入者を睨みつけていた。

そんなパブの玄関で、ソフィアは堂々と声をあげる。

「聞きたいことがある。それを聞いたらすぐ立ち去る」

「なんだあ？てめえ……」

「ああ、注文はしないとな。店主、ジンをボトルごと」

うらぶれた男たちの中でひとときわ気性が荒いらしい男が立ち上がるが、ソフィアは彼のことを無視してカウンターへと適当な数のシリリング硬貨を投げる。投げられたシリリング硬貨は空中でチンツと音を鳴らしながら互いに当たり、ほとんどはカウンターの向こうへと消えたが、1枚は届かずに床に落ちてしまう。

「舐めんじゃねえー」

男はそんなソフィアの態度が自分を舐めていると取ったのか、声を荒げてこぶしを振り上げる。そして、それが降り下ろされた瞬間、ソフィアは体を逸らしつつ前に踏み込みながら自身も拳を振るった。

男の拳は空を切り、ソフィアの拳は真つすぐ男の顎を貫く。

ゴツという骨と骨がぶつかる音が小さく鳴り響き、男は振るった拳の勢いそのままに倒れ込んで、けたたましい音を鳴らして木扉へと頭を突っ込ませた。結果、男の首はあらぬ方向に曲がり、その痛々しさに店内の人間が顔を一齐に逸らす。

一方のソフィアは着崩れたコートを襟を引っ張ることで着直し、視線をちらつと倒れる男に向ける。

そして、生きていることを確認すると、もう一度店内の人間に問いかけた。

「聞きたいことがある。昔、このパブの店主が殺されたらしいが、本当か？」

男達は一斉に今の店主へと顔を向け、視線が突き刺さる彼は苦虫を噛み潰したような表情で頷く。

「理由は分かるか？」

「知らねえ」

「知っている表情だ、言え」

ソフィアは取り出したシリリング硬貨を親指で弾き、真上へ飛ばす。そして、それをキャッチして、視線を店主のみならず客にも順番に向けていく。

「……アヘンのごごただらう。それくらいしか分からねえ」

客の一人が静かな口調で言えば、ソフィアは彼にシリリング硬貨を投

げてよこす。

「へへ。ありがとよ」

「もう一つ。同時期に起こった大量失踪と関係はありそうか？」

加えて、ソフィアはポケットに手をつ突っ込みながら問いかける。すると、客たちは素っ頓狂な表情になり、顔をそれぞれ見合わせる。

「それはねえだろ。ありや、悪魔の仕業だ。人間にやできねえ」

「んだ」

「悪魔なんて言うなよ……」

中々的を射ている発言だったが、ソフィアは何も言わない。一瞬、Jについても聞こうかと思っただが、藪蛇なのでやめておく。

「場所は分かるか？」

「ああ、ゴーストストリートだな。ここを出て真つすぐ行ける」

最後にその事件の場所を聞けば用は済む。ソフィアは踵を返しかけて、足元の伸びている男につま先を当ててしまう。彼女はその邪魔な男を足で転がして扉の前からどけながら、後ろのうらぶれた男たちに声をかけた。

「聞きたいことはそれだけだ。ああ、ジンは適当に飲みたまえ。迷惑料だ」

ソフィアはそれ以上は何も言わずに扉を開けて、パブネクタルを出ていく。

ネクタルを出たソフィアは先ず左右を確認した。見覚えのある人間はいるか？こちらを注視している人間はいるか？その疑念を解消するためだ。

その確認が終われば、かつて馬車で通った道を歩き始める。

そして、十数分の後に着いたのは、かつての姿よりも汚らしくなったテラスハウス。その建物が面しているゴーストストリートと呼ばれる通りも、人が不思議とまばらだった。

煤や埃で黒くなり、窓ガラスは割れたり曇ったり、人口が流入し続けているロンディニウムには似つかわしくない、人の息吹が全く感じられない建物だった。

「嫌な雰囲気だ」

その建物を見上げながらソフィアが呟くと、後ろから声がかかる。「ちよつと中を覗いたけど、中はもつと酷いよ」

ソフィアが振り返ると、そこにはアランがいた。彼はソフィアよりも一足先に聞き込みを終えてここに来ていたらしかった。そして、そんな彼にソフィアは空を見上げながら口を開く。

空は夕焼け色になっており、ロンディニウム上空に常にかかっている薄雲のせいで、もう日が落ちてしまったのではないかと錯覚してしまうほど街は暗くなっていた。

「もう暗い。今日は止めにしないか？」

「何言ってるんだよ。それだと次は僕一人で来る羽目になるじゃないか」

そのソフィアの言葉に、アランはにやりと口角を上げてからかい口調で彼女のことを口撃する。

「もしかして、ゴーストが怖いのかい？」

「ああ、実に怖い」

ソフィアの思いがけない肯定にアランは目を丸くさせ、まったく予期していなかったと無言で表情に表す。そんな彼の表情に心外そうな顔をしたソフィアは空に向けていた視線を、テラスハウスへと向けて口を開く。

「当然だろう。ゴーストがいようがまいが、実際に何らかがあつたからこそ、ここには誰も住んでいないのだ。」

場合によっては生きた人間に襲われる可能性も、この建物を調べたら困る人間に狙われる可能性もある」

「ああ……、なるほどね。そういう意味ね」

ソフィアが幽霊を怖がった真の理由に、アランは期待が外れたと肩を落としてしまう。そして、落とした肩を回し、気合を入れ直すためにインバネスコートの居住まいを正す。

「じゃあ、ますます、今行かないと。次来る時にダンがいる保証もないし」

「……。ああ、そうか。私はダンだったな」

「もういい加減慣れなよ。さ、行くよ」

そう言つてアランはテラスハウスの観音扉を開いた。彼に続いてソフィアもテラスハウスへと入ると、そこは人があまり出入りしていないのか、埃っぽい匂いに満ちていた。

まずは玄関ホールとは名ばかりの狭い廊下。ここはテラスハウスに住む住人の共有スペースだった。植えられた花がとつくに枯れた小さな植木鉢が哀愁を誘う。

「本当に見捨てられた家なんだね」

「ああ。流石に不気味だ」

二人が歩みを進めると、割れたガラスが床に落ちていたのか、チャリ、と小さな軽い音が鳴る。アランはどう探索しようかと目配せをし、ソフィアは無言で玄関ホールに面する扉へと目を向ける。

二人がその扉を開くと、そこは一つの部屋だった。はつきり言つて狭いリビングキッチンワンのワンルームで、穴の開いたベッドと、足が腐つて折れたテーブルが置いてあった。

ソフィアがキッチンの方へ行き、そこにあつたはずの食材を調べる。

「腐るところか風化しているが、観察するに色々置いてあつたらしい」「食材を持って行かなかつた、もしくは持っていけなかつたってことかな?」

アランはそう言いながらベッドの下を覗く。特に何もなかつたようで、彼は首を振りながら顔をあげる。そして、二人はその部屋を出ていく。

「とりあえず、順番にめぐろうか」

「そうだな」

アランの提案にこのテラスハウスの部屋を一つずつ調べていく。しかし、調べても調べても何も出てこない。すべての部屋は本来にある日突然家主が居なくなつて、そのまま放置されたようだった。

ソフィアにとっては、かつて自分が鍵を取り換えた地下室をアランに調べさせ、何も出ないことを確認させることができたのが収穫と言えれば収穫か。

すべての部屋を調べ終えた二人は、廊下を抜けて庭へと出る。扉に

囲まれた長方形の形をした地面むき出しの庭は、このテラスハウス全員の共有物であり、洗濯をしたり衣服を干したりする場所だ。

それに加えて、小屋が二つ。片方は物置で、もう片方はトイレだろう。

それらを見てソフィアは何も出ないと解っているため、少々徒労を感じてうんざりした声を上げた。

「次は庭と洗濯場、そして小屋、か。いい加減何か出てくれればいいのだが」

「嫌な雰囲気がある」

「もうとつくにしている」

ソフィアがジト目でアランのことを見ると、アランは冷や汗をかきながら厳しい目で物置の方へと目を向けていた。

「いや、そうじゃない。すごく、嫌な予感がする」

「ゴースト?」

ソフィアのその問いかけに、アランは何も言わなかった。ソフィアは彼のそんな様子をみて、内心覚悟をする。

（ゴーストだな。果たして私の用意しておいたこれが通用するだろうか……）

「よし、さっさと見て帰るか」

「ああ……」

二人は固まって庭を横切り、洗濯場を覗き見る。そこには何も無い。次はトイレ。臭いだけ。

そして、一番最後に物置小屋の前に二人は立った。木で作られた物置小屋はしっかりと作られた作りだったからか、痛んでこそいるがそこにしっかりと立っていた。

そんな小屋の扉をソフィアが開こうとしてノブに手をかけると、開かない。鍵がかかっているようだった。

「鍵開け、できるか?」

「できるけど、うーん……。このタイプは時間がかか——っ!」

アランが鍵穴を覗き見て、振り返ってソフィアにそう告げる。

そう告げた瞬間、彼は目を見開き固まった。

ソフィアはアランのその様子に、コートの内側に手を突っ込みながら素早く振り返る。

そこには、ワンピース姿の女の子が立っていた。顔は見えない。夕日に照らされて、蜃気楼のように揺らめく彼女の表情は苦しんでいるようにも、笑っているようにも見えた。

そんな女の子を睨みつけながらソフィアは懐でつかんだ、ある物を抜き出す。

曇りない銀色の細く長い銃身。その銃身の根元は円形に大きく膨らみ、一番付け根にはもうすでに立ち上がったハンマーが。

現代的なリボルバーだった。ハーモニカガンでも、ペツパーボックスピストルでもない、その銃口を女に向けて、ソフィアは鋭く叫んだ。

「その女!!何も言わずに手を上げる!!」

その言葉に、女の子は笑った。

肩を震わせ、悲鳴のような声で笑い声をあげた。

「アラン!どけ!」

ソフィアはアランを無理やり退かし、物置小屋の鍵に銃口を向ける。そして、一息に引き金を引いた。

バツギイインツ!!!

リボルバーが弾を発射する銃声と、鉄製の鍵が吹き飛ばれたたましい金属音。

ソフィアはすぐさま物置小屋の扉を蹴り開け、すぐにまた女へと振り向き直す。女はまだ笑っていた。

「アラン!!物置小屋を確認しろ!!早く!!」

「あつ……ああ!」

ソフィアは生唾を飲み込み、段々と俯きながら笑い声のトーンを下げていく女と対峙する。

「死体だ!白骨死体がある!」

(クソツ!誰かが隠してたのか!)

ソフィアはあの夜すっかりとこの家を探索させなかったことを今更後悔する。よく考えてみれば、同じ組織の人間が一堂に集められたら、何かを疑って可愛い我が子を用心のために隠すくらいのはす

る。

そして、親が死んで開けられなくなった物置小屋の中で一人の子供が死んだのだ。

「アラン!! あれは人間だと思うか!？」

「明らかにおかしいだろ!!」

ソフィアはアランのその言葉を、ある種の同意だゴースサインととらえ、女の足に向かって発砲した。

しかし、女は身じろぎ一つせず、彼女の背後の地面から小さな土煙が上がるだけだった。

(やっぱりただの弾丸じゃダメか!!)

「何やってんだ!! 逃げるぞ!! ダン!!」

アランがソフィアの腕を思いつきり引つ張ったその時、女が獣がとびかかるかのように二人へと襲い掛かる!

アランとソフィアは身をひるがえして全力疾走をし、その後ろを女が形容できない声を上げて迫ってくる中、二人は怒鳴り声をあげる。

「ありやなんだ!!」

「幽霊だろ!! というか、何だよそれ!!」

ソフィアが叫びながらリボルバーの弾倉を横にスライドさせて、そこに装填された金属薬莖の弾丸を抜いていく。アランはそんなソフィアの手元を一瞬見て、疑惑の声をあげた。

「自作ピストル」

面倒な説明を全部ふっ飛ばしてソフィアが答えると同時に、玄関扉にたどり着き、その両開きの扉に二人は体当たりをするかのように肩を当てて強引に開く。

「……で、あれは何だと思う?」

果たして、そこには、スモックを着た中年の男がいた。それを見たアランが息を整えながら隣のソフィアに問いかける。

ソフィアは左右を見て、このゴーストストリートに自分達三人しかないのを認めると、実に大きなため息をついた。

「扉を開ける時、変な奴に出会い過ぎじゃないか?」

背後には幽霊の女、前には農夫の男。

ソフィアはそつと、銀の弾丸を弾倉へと込めた。

戦闘

夕陽が差し、霧も深い、誰もいない通りの真ん中で、スモックを着た汚らしい農夫が口をくちやくちやくとさせながら立っていた。

それに相對するのはソフィアとアラン。ソフィアはリボルバーの弾倉を戻し、アランは気合を入れるためにコートの襟を引っ張り居住まいを正していた。

「で、どうする？」

アランが油断なく前を向いてそう言うと、ソフィアは振り返って銃口を後ろへと向けた。

「まずは後ろ!!」

パアンツ!

ソフィアの声と共に軽めの銃声が鳴る。銃口から亜音速で飛び出した銀の弾丸は、回転しながら真つすぐに飛び出し、女の子の姿をとるゴーストの判別が出来ない顔へと吸い込まれていく。

【ミツギヤアアアアア!!】

すると、頭を撃ち抜かれたゴーストはけたたましい悲鳴を上げて、後ろへ弾かれる。

(よし、銀弾ならいける!)

続けざまに、ソフィアは両手でしつかりトリボルバーを保持した後、もう一発の銀の弾丸を放つ。それは倒れ込んだゴーストの腹へと確かに突き刺さったが、しかし、二発目の銀の弾丸ではゴーストは苦しまなかった。

「なんでだよ!」

「ダン! とりあえず逃げるぞ!」

「ああ!」

アランの言葉に導かれるようにソフィアは走り出す。農夫は動かず、ゴーストは倒れ伏したまま動けなかった。

二人はいつも以上に霧が濃くなったロンディニウムをひた走る。しかし、走れども走れども人と出会うことはなく、馬車を引く馬も、猫もネズミも見当たらない。まるで、空っぽの都市に迷い込んでしまっ

たかのようにだった。

ソフィアはこの光景に心当たりがあった。

(異界か！ゲームじゃ、ここで戦闘が起こるんだったな！)

二人は後ろから何も追ってこないことを確認すると、走るペースを落として速足のまま街を行く。そして、息を整え終わった頃アランが足を止め、ソフィアの肩に手を置いた。

「ダン。落ち着いて聞いてくれ」

「手短に、簡潔に頼んだ。もう何にも驚かない」

アランは肩に置いた手とは逆の手で、ソフィアの目をしっかりと指さす。まるで、しっかりとこの指先を見て正気を保て、と言っているようだった。彼はその指をわずかに震わせながら、大真面目な表情で口を開く。

「ここは異界だ。ここは現実とは違った空間なんだ。妖精や怪物、幽霊、そう言ったものが跋扈する世界。

僕たちは何者かの手によって……十中八九はあの農夫らしきモノの手でここに引き込まれた。」

脱出方法は二つ。逃げ切るか、あの農夫を殺すかだ」

ソフィアはその言葉に目をつぶって二度、深呼吸をする。

(まさか、こんなにも早く自分が主人公たちと同じ目に遭うとは……)

もつと準備をしたかったが、腹をくくるしかあるまい。

私はここで死ぬつもりはない。冷静にいけ！)

ソフィアは目を開けてアランと目を合わせて頷く。

「よし。大丈夫だ」

「本当に？」

「ああ」

アランが心配そうに聞いてくるのに、ソフィアは頷き返し、走ってきた道の方向を見る。そこには、女の子が立っていた。

「ダン。さつき貴方が撃ったのは？」

「銀の弾丸だ」

ソフィアはリボルバーの弾倉をスライドさせ、残り二発になった弾丸の内一発を抜き取る。銀色に光り輝く弾頭と、金色に輝く真鍮製の

金属薬莖。アランはそれを見て目を丸くさせる。

「なんでこんなものが？」

「鉛玉を作るついでにな、お守りにでもしようと思ったんだ」

アランは口を開きかけ、見たことのない形の拳銃についてや、これまた見たことのない機構、弾丸について聞きかけたが、口を閉じて深く追求しないことにした。今はそれどころではないからだ。

「残りは後二発。だが、あのゴーストには二発目が効かなかったから撃たないぞ」

「二発目は何か別の細工は？」

「確か……ああ、そうだ。子供にあげようと思ったんだ。それで、せがまれて草の、ヤドリギの彫刻をした」

「それだ！」

ソフィアが面倒を見ている義妹たちの顔を思い浮かべ、彼女達のために彫刻をしていたことを忘れていたことを悔いるように頭を掻き、その言葉にアランは指をはじいて大きな声をあげた。

すると、ゴーストの女がゆらりと顔を上げて、二人のことを見つめ、やがてゆつくりと動き始める。

「大馬鹿者」

「すまない。でも、それだよ！」

「解説をしてくれ」

二人は踵を返してまたロンディニウムの街を駆けだす。そして、アランが息をわずかに切らしながら早口に解説を始め、その間にソフィアは一発の銀の弾丸はそのままに残りは鉛玉を装填していく。

「ヤドリギには様々な逸話と伝説があるんだ。冬でも青々としていて、それなのに地面に根を張らない。だから、特別なものとみなされ、不死、生命、復活、様々な物を象徴した。

そして、それはやがて、魔よけとしての意味も持つようになった。

これほどゴーストに有効なものはないよ」

「詳しいな」

「まあね」

ソフィアは鉛玉を初めに撃てるように弾倉を回し、装填を終える。

そして、リボルバーを右手に持ちながらアランに問いかけた。

「詳しいなら、アラン、君が方針を決定してくれ。私が持っているのは、11発の鉛玉、2発の銀の弾丸、それだけだ」

そして、ソフィアは左手で顔の包帯をずり下げていく。アメジスト色の瞳、切れ長の目、はつきりしていて整った目鼻立ち、それらが露わになって行き、彼女はその理性的な瞳でアランへと視線を送る。

「私は今更何も言わない。君がどういう知識を持っていいようが、どういう人間であろうとね」

アランは、中性的で明らかに高貴な雰囲気醸し出すその顔を見て、なるほどこれは隠すだろうと納得する。そして、誠意を見せてくれた彼にふっと笑うと、深く頷いた。

「なるほど、ハンサムだね」

「どういう意味だ、それは」

「モテそうだったってこと！」

そう言いながらアランが前に飛ぶように姿勢を低くする。すると、物陰から灰色の何かが嵐のように飛びかかってきて、ソフィアはそれに対して右腕をずいと伸ばし、引き金を引く。

ガアン！と激しい音が鳴り、それとほぼ同時に「ギャウン！」と獣の悲鳴があたりに響く。

アランが殆ど転んだ状態から姿勢を戻して後ろを振り返ると、そこには顔からぼたぼたと黒い血を流す狼がいた。ソフィアは油断なくその狼にリボルバーを向けながら、隣のアランに手を貸して立ち上がらせる。

「アラン。5発撃つたら装填を挟む。今はあと4発だな。必要とあらば銀弾を撃つが、指示をくれ」

「わかったよ。必要なものがある。今は逃げよう」

狼が顔を上げて二人のことを睥睨する。ソフィアはそれが動き出す前に、発砲するが、次は狼が俊敏に飛び退いて回避されてしまう。そんな中、アランは空中に向かって声を張り上げた。

「ピクシー！」

「はあい！もう呼ばれないと思っと思ったよー！」

その声に現れたのは、緑色の可愛らしいドレスに身を包み、尖ったナイトキャップのような帽子をかぶった透明な羽の生えた妖精だった。

「誤魔化してくれー!」

「わかった!迷っちゃえー!」

ピクシーが気の抜ける口調で両手を振り上げ、勢いよく下ろすと、二人と狼の間の霧が一気に濃くなっていく。すぐに狼がこちらへと走ってこようとするが、あまりに濃い霧でその灰色が見えなくなってしまうた。

「行くよ。長持ちはしない」

「頑張れー!応援してるよー!」

頭の上にピクシーを乗せたアランが踵を返して小走りで歩みを進め、ソフィアもギリギリまで霧の奥へ銃口を向けながら彼についていく。

霧が深いのに不思議と露で濡れないレンガの壁に囲まれた路地を急ぐ中、ソフィアがちらつとピクシーの方を向けば、彼女とパチリと目が合う。

「やっほー!お元気?」

「アラン、説明はしなくていいぞ。これからどうするかだけでいい」

「えーっ!」

「うん。とりあえず輪っか状の物があればそれで何とかする」

ピクシーはソフィアに手を振ったり、無視されれば空中で宙返りしてからアランの頭の上で地団駄を踏むなど、実にコミカルな動きをする。なお、余裕のない二人はそんな彼女に構っていられはしなかった。

やがて二人は路地を出て大通りに抜ける。相変わらず通りには誰もいない。そして、輪っか状の物を見つげるためにこのまま通りを行くのか、逃げ場が少ない建物の中に入るのか、その決断を迫られる。

「どうする……」

ソフィアがそう呟いた時、アランは霧の奥に四角いシルエットを見つけ、それに向かって一目散に駆け出していく。やがて距離が近付く

と、そのシルエットが霧の奥から現れ、形をとらえる事が出来た。それは馬のいない馬車だった。

アランはその馬車の車輪にとりつくつと、それをどうにかしようとして触れる。

「ダン！これだ！これを使う！車輪を何とか取り外せないかな？」
「どけ、一つでいいな？」

ソフィアはアランを退かして、それからリボルバーを持ちながら馬車の横に立つと、その車軸と車輪を繋ぐ固定具に向かって二度、三度と発砲していく。鉄製のそれが甲高い金属音を鳴らしながら弾け飛ぶと、ソフィアは馬車に肩を当てて僅かに浮かせながらその車輪を引き抜きにかかると。

「来てるよお！」

その時、遠くを見ていたピクシーが危機を知らせる。二人がはつと顔を上げると、霧の向こうに小さな子供の影が。ゴーストがゆらゆらと覚束ない足取りでこちらへとやってきていた。

「まだかかるぞ！」

ソフィアはそれに焦った声をあげながら歪んだ車軸の端を思い切り蹴ることで矯正し、抜きやすくする。

「手伝う！」

「真横に引つ張れ！セーのっ!!」

そして、ソフィアとアランが車輪を渾身の力で無理やり引き抜くと、アランはその勢いで尻もちをついてしまう。

しかし、車輪は抜けた。それはゴロゴロと転がり、やがて通りの真ん中で横に倒れる。

はつと振り返れば、もうすぐそこまでゴーストは来ていた。

ソフィアが馬車から肩を放すと、馬車がバランスを崩してギギツと音を鳴らす。そして、彼女はなけなしの銀の弾丸を撃つかどうかを迷い、リボルバーを構えながらアランの方を見た。

そこには、光が満ち始めていた。

【魂は眠る 身は亡ぶ】

アランは車輪の傍らに座り、両手をそれに添えていた。

【そして、廻り、巡り、流転する】

車輪が輝き、風が吹き、コートをはためかせる。

【月桂樹の根を枕に 迷える魂よ、眠れ！】

その言葉と共に、冷たい風が一陣、通りを吹き抜けていった。

【……………！】

アランがゴーストの女の子へと向けて、呪文を詠唱しきらんとするその瞬間、女の子は嬉しそうに笑った。

冷たい風が彼女に吹き付けると、女の子は木の葉が舞い散る様に、吹き上げられていく。

ソフィアは風の向かう方向へと思わず目を向けた。風の通り道は不思議と霧が晴れていて、まるで一本の光の回廊のようだった。もはや女の子は空気に溶けどこにもおらず、アランと車輪が発していた光もその回廊へと導かれるように消えていく。

そして、吹き荒れる風がやむ前に、馬車の上に灰色の影が突如現れた！

「ダン！」

ソフィアの死角からの攻撃にアランが悲鳴のような声をあげる。ソフィアはその声に正気に戻り、せめて頭を庇うために左腕を掲げながら体をひねりながら飛び退く。

上から下への狼の爪はソフィアの頭があつたあたりで空を切り、ソフィアは背中を強かに石畳に打ち付けながら、リボルバーを今まさに着地した狼の体めがけて発射する。

ガン！！

「あゝッ!!あゝ あ!!痛い!!いゝだあアいい!!」

果たして弾丸は狼の右肩を吹き飛ばす。狼は犬のような姿形ではなかった。それは頭だけが狼の、毛むくじやらの人間だった。彼は人語で悲鳴を上げ、そのおぞましい光景にアランが顔を顰めながら痛みに悶えるソフィアの下へと駆けつける。

「うぐ…、あ、あれは狼男か？」

「だろうね。大丈夫？」

「大、丈夫だ。ゴーストは？」

「もう輪廻の輪に戻ったよ」

ソフィアはアランに手を貸してもらいながら立ち上がる。打ち付けた背中が痛むが、頭を裂かれるよりは十分マシだった。

「狼男なら、銀の弾丸だな。これくらいなら分かる」

「あの建物探る奴、殺さないといけない。追いかけて、追いかけて、殺さないといけない。」

「……………なんで?なんで?」

狼男が血の滴る右肩を押さえつけながら、まるで自分に言い聞かせるかのように呻く。それにアランは気の毒そうな表情を向け、ソフィアは鉛玉と先ほど抜いた銀の弾丸を装填し、弾倉にある銀の弾丸二発の位置を確認した。

「……………随分狂わされてるみたいだ」

「そうか。関係ない」

「できれば一発で……………」

「保証はできないな」

ソフィアが弾倉を戻したのと、狼男が地面を蹴るのは同時だった。

「殺つ!殺さない!!」

「ダン!」

狼男が爪を振り上げる、ソフィアはシリンダーを回す。

狼男が大口を開ける、ソフィアはハンマーを親指で持ち上げた。

(一発、無理だな)

ソフィアはあくまで冷静だった。リボルバーの銃口を狼男の下半身へと向け、引き金を引き絞る。

引き絞った瞬間、狼男は人の身長よりも高く飛び上がった。

そして――

カチン

――とハンマーが落ちる音だけが響いた。

そして、ソフィアはすぐさま真つすぐ銃口を上に向けた。空中で放物線を描く狼男にはもうどうすることもできない。

ガン!!

「ツツ!!あゝあゝあゝ!!」

汚い悲鳴を上げた狼男はへその下あたり、骨盤を致命的に破壊され、弾丸のエネルギーによってバランスを崩し、ちょうどソフィアの目の前の地面に顔から墜落してしまう。

ソフィアは油断なく反動で持ち上がった銃口を素早く戻し、照準を目の前の狼の頭、その中心へと定める。

引き金が引き絞られ、回るシリンドーに装填されていたのは一発の銀の弾丸。

「ああ……」

パン!!

狼男が諦観の表情でソフィアのことを見上げた瞬間、乾いた音が通りにこだまのように響いていく。

「終わったか?」

【死んでるねえ】

ソフィアがつぶやいた言葉は、空を飛ぶピクシーによって肯定される。アランも、霧に目を向けるように視線を彷徨わせて口を開いた。

「霧の動きが変わった。異界の主は居なくなつたよ。現実に戻る」

「そうか。じゃあ、色々説明してもらおうか」

二人は段々霧が濃くなつていく中、歩道へと足を向ける。そして、彼女達が歩道へと登り、狼男の方へと振り返ると、彼の姿はもう霧のヴェールに隠されてしまつていた。

ソフィアはすぐに踵を返したが、アランは彼のことをじつと見つめていた。やがて霧が薄れていき、人々の喧騒が遠くから帰ってきたころ、彼はようやくソフィアの背を追いかけた。

二人は無言で人の少ない路地を歩く。そして、路地を何度か曲がって、帰ってきた人々の喧騒がまた遠ざかった頃、ソフィアは振り返る。

「さて、ここならいいか」

【いいんじゃない?】

「どこから説明したのか……」

ピクシーはソフィアの肩に止まり、アランは腕を組んで唸り始める。その間の時間を使ってソフィアは、ピクシーが止まっていない方の手を使って片手で器用に包帯を巻き直していた。

「端的に言うとうと、僕は魔法使いでね。魔法なり魔術なりで人探しをしていったんだ」

「悪い奴ではないんだな？」

「まあ、善き隣人^{Magus}つて所かな」

ソフィアはこれ以上を追求しようか迷い、空を見上げた。そこはもう夕焼け空ではなく、星々が瞬き始めていた。

（原作ではアランは魔法使いつてことくらいしか説明されないから、何も知らないんだよな）

「やつぱり、恐ろしいかな？」

ソフィアが空を見上げたことにアランは何かを勘違いしたのか、自嘲気味な笑みを浮かべて肩をすくめた。そんな彼に、ソフィアは夜空から視線を戻し、アランのことを見る。

「別に、恐ろしくはない。ただ……」

「ただ？」

「……そうだな。君が心優しい男だという事はなんとなく分かっている。

ゴーストにつかった魔法で、私はよくわからないが、彼女は輪廻の輪に戻ったんだろう？」

「うん。本当はもつとちゃんと送ってあげたかったんだけど」

「そうか。それが分かっていたら何でもいいか」

ソフィアは仕舞っていたリボルバーを取り出し、その中から最後の一発の銀の弾丸を抜き取る。そして、リボルバーだけを仕舞い、その弾丸を弄り始める。

急に無言で弾丸を弄り始めたソフィアに、アランは手持無沙汰になって、彼女の肩に乗るピクシーに視線をやった。すると、ピクシーはやれやれと首を振り、アランはどこか所在なさげにソフィアに声をかけた。

「子供、いるんだって？息子さん？」

「娘だ。ちようど10」

ソフィアはアリス達のことを思い浮かべながら答え、その回答にアランは一瞬、何かを考えるかのように明後日の方を向き、すぐにソ

ファイアへと視線を戻した。

「僕にも娘がいてね。今は寄宿舎にいるんだけど」

「そうか」

ソフィアは短く返し、少し手を止め、それからまた手を動かしながら口を開いた。

「娘のために働いてるのか。出稼ぎか？」

「そんなところ。田舎ではお金が稼ぎにくくてね。ロンディニウムなら稼げるかと思って出てきたんだ。」

魔法を使えば色々探せるからね。それで稼いでいるんだ」

アランの背景を知ったソフィアは「そうか」とまた短く言って、工作が終わったのか顔をあげる。手には、葉莢から抜かれた銀の弾頭がだけが握られていた。

「……結局だ。まだ事件は終わってはいない」

「え？あの狼男が……いや、そうか」

「そうだ。あの失踪者リストの中にはあの狼男に殺された者もいるだろう。恐らく、今まで断続的に出ていた失踪者はアレにやられたと推測できる。」

だが、それだけでは失踪者の数が多すぎるし——」

ソフィアが銀の弾丸をアランに投げて渡し、それを受け取った彼は真剣な表情で頷く。

「貴族の失踪が説明できない。彼はゴーストストリートには行っていない」

「ああ。まだ事件は終わっていないどころか、未だ私たちは振り出しから動けていない」

アランは頭を掻き、思った以上に大きい事件に巻き込まれかけていることを自覚する。多くのことを知っているソフィアもこの事件の根幹がどこにあるのかを特定できていなかった。

アスタロト以外の悪魔が関わっているのか、それとも全く別の魔法使いが独自に動いているのか、いずれにせよ、ソフィアはいくつか確認しないといけないことがあった。

「私は独自に調べてみる。君はこれからどうする。降りるか？娘がい

るんだらう?」

ソフィアの問いかけにアランは首を振る。

「一度約束したことを反故にすることはできない。たとえば、それがどんな約束だろうと」

「魔法使いとして、か」

アランは頷く。そんな彼にソフィアは微笑むと、彼の手の中の銀の弾丸を指さす。

「気安めだろうが、お守りだ。魔法使いには不要だったかな?」

「いや、そんなことはない。ありがとう。心強いよ」

アランが銀の弾丸を握りしめて頷くと、ソフィアの肩に乗っていたピクシーが彼女の頬にもたれかかりながらつまらなそうな声をあげる。

【ねえ、話終わった?】

「うん。終わったよ」

ピクシーに言葉を返すのはアランで、ソフィアは少し鬱陶しように視線をピクシーとは別の方向へと向ける。そんなソフィアの仕草には気付かず、ピクシーは彼女の肩に立って腰に手を当てる。

【まあ、あんたたちが何しようと思手だけど、アラン、何かやるなら気を付けてね】

「どういうことだい?」

【このあたり、いや〜な雰囲気がい〜っぱい】

アランが少し剣呑な表情でピクシーに問いかけると、彼女は頬に指を当てて【ん〜】と考えるそぶりを見せる。そして、ソフィアの肩の上でぐるぐる回り始めると、ぱつと花が咲いたような閃いた顔をする。

【懐かしい何かがあるっぽい感じ!】

「懐かしい?」

【そ、懐かしい感じ。でもなんか違う感じ】

ピクシーの要領を得ない言葉にアランが首を傾げていると、言いたいことは全部言ったとすつきりした表情でピクシーが羽根を震わせてソフィアの肩から飛び上がる。

「ま、サイダー分は働いたし、好みの男に忠告できたし、私は帰るよ。サイダー美味しかったよ。じゃあね！」

「あつー！ちよつとー！」

「また呼んでね〜」

アランが慌ててピクシーのことを引き留めようとしたが、彼女は一瞬にして消え去ってしまふ。後に残されたアランがソフィアに向き直り、首を傾げつつ口を開いた。

「さっきの意味わかる？」

「いや、『気を付けろ』以降は何も聞こえなかった。教えてもらえるか？」

このソフィアの言葉は真実だった。『懐かしい何かがある』というくだりはアランにだけ聞こえていた。そして、それを理解したアランははっと目を見開くと、首を力強く振る。

「いや、駄目だ。彼女が隠したってことは、知らない方が良いつてことだ」

「そうか。気にはなるが、仕方がないか」

ソフィアは本当に気にはなっていたが、下手に追求してあのピクシーの恨みを買うのは嫌だったのでこれ以上は踏み込まないことに決めた。

そして、彼女はポケットに手をつ突っ込むと、アランから視線を外し、彼に背を向けて歩き始める。

「私も帰るよ。何か分かったら銀の輪亭に言付けを頼むから」

「ああ。今日はありがとう。貴方と出会えたのはとても幸運だった」

「（ちらり）そ」

ソフィアもアランと同じく深く自分の幸運に感謝した。彼女は路地を曲がって、アランの視線から外れる寸前で足を止める。そして、包帯を巻いた顔で彼に首だけを向けた。

「アラン。一つ、忠告だ」

アランは頷く。ソフィアは低い声を一層低くして口を開いた。

「君はこれから色々なことを知るだろうが、あまり知り過ぎないほうが良いだろう」

「それはどういう？」

アランがピクシーにしたように彼のことを呼び止めようとしたが、ソフィアはもうアランの声が届かないのか、歩みを止めずに、路地を曲がって闇夜へと消えていった。

「どういう……ことなんだよ……」

一人残されたアランが、深い不安に押しつぶされないように空をおもむろに見上げる。

星空は未だ瞬いていたが、やがて薄雲が星の光をどんどん薄れさせていくのだった。

看破

朝、目が覚めて、それから鏡を見る。

ソフィア・ロングフェローのいつもの習慣。

鏡の中には金髪の美女が立っていて、彼女は長い金髪を適当にまとめ始めて、モーニングドレスを着ていく。

彼女のドレスは当時では男性が着るようなドレスシャツであり、世間一般の貴族女性のような締め付けのきつ過ぎないコルセットとその上から体にフィットさせたガウンを着る形ではなかった。

動きやすさと快適さを重視していたソフィアは、下もスカートではなくズボンをはいており、はつきり言つてこの時代の貴族の女としては異端も異端ではしたないとすらいえる格好だった。

実際、文句を言つてくる使用人を遠ざけたからこそ、彼女は一人で朝の支度をしていたのだが。

(悪魔の使用人は驚くほど気が利かないからな……)

そういう事を専門に行うことができる悪魔もいないことはないだろうが、自分の世話のためにわざわざ新しい契約をするのもバカらしかったので、彼女は結局自分の身の回りのことは自分で行うようになっていた。

とはいっても、朝食の支度は流石に使用人に任せており、彼女はそれを自分の書斎に持つてこさせていた。

身支度が終わり、朝食と仕事のためにソフィアは書斎に向かう。

彼女の書斎は多種多様な書物が積み上げられており、最新の論文から運営している会社の資料、最近だとゴシップ誌などもその山に加わっていた。

ソフィアは書斎で一人、今日配達されたばかりの新聞に目を通す。最近では自社のメディアも上手く回り始めていて、質が良くかつ自分が知りたいことを効率的に調査できるようになっていた。

ソフィアはつい数日前のゴーストストリートで起こったことが新聞で報道されていないかを一応確認するが、それらしいことは何も書かれていなかった。後もう一日二日もすればアランの通報で、少女の

白骨死体が見つかったと大騒ぎにはなるだろうが、狼男の件についてはほぼ闇に葬られることが決定していた。

「お嬢様。朝食です」

ソフィアが新聞を読んでいる最中、その言葉と共に書斎の扉がノックされる。入室の許可を出せば入ってきたのは、サービスワゴンを押すアスタロト。ワゴンの上には今日の朝食であるサンドイッチが乗せられていた。

そして、それら朝食が並べられると、ソフィアはまずは紅茶で喉を潤し、その風味と温かさを味わう。一口飲んで、カップがソーサーに置かれた時、ソフィアは部屋の隅で待機するアスタロトに視線をよこさずに声をかける。

「ところで、アスタロト」

「何でしょうか？」

アスタロトはあくまで自然体。いつものように慇懃で、しかしどこか人を見下しているような雰囲気があった。

ソフィアはそんな彼に何も策を弄さずに、あえて直接的に問いかけた。

「かつてイーストエンドに所有していたテラスハウス付近に、狼男を配置したか？」

「ええ。いたしました」

ソフィアの率直な質問に、アスタロトも何も言葉を飾らずに答える。そして、そのアスタロトの回答に、ソフィアは変に遠回しに聞かなくてよかったと痛感する。そうすれば場合によつては誤魔化される可能性があったからだ。

「そうか」

「何か問題がありましたか？」

アスタロトの問いかけに、ソフィアは意識的に平静を装いながら首を振る。自分が死にかけた、など口が裂けてもいうつもりはなかった。今は確かに契約しているが、アスタロトはどこまでいっても人間の敵である悪魔なのだ。

彼らは虎視眈々と契約者の隙を狙っている、それを忘れてはならな

い。

「いや、特に問題はない。近くを通りかかって襲われたからな、火の粉を振り払う羽目になった。」

後、そこにはもう戦力を配置しなくていい。放っておけ」

「かしこまりました」

ソフィアはそれだけを言うと、サンドイッチに手を伸ばそうとして、手を止める。彼女は昨日のうちに書いていたメモ用紙を取り出しながら、次はアスタロトの方を向いて口を開いた。

「それと、ケープ植民地で行えることになった鉱山開発のために、いくつか用意して欲しい資料がある」

「かしこまりました。すぐに用意します」

メモを受け取ったアスタロトは一礼をした後、書齋を出ていく。

彼が扉を閉め、足音が遠ざかっていったところ、ソフィアはようやくサンドイッチを手にとってそれを口に含む。

（狼男はあいつの仕業か。となると、アスタロトは私の許可も取らずに独自に動いていることになるな。）

私に動かせる駒は少なく、奴には膨大にある。その上、奴は悪魔だ。魔術だつて使うことができる。

今の段階で独断専行をしていることを知れたのは悪くはない。

さて、どうするかな……)

一人で考える事には慣れている。むしろ、考え事をするのには一人が良い。

ソフィアはそういう人間だったので、アスタロトがいない間、食べているサンドイッチの具が何かを把握できないほどに思索に没頭した。

そして、サンドイッチを食べ終え、スコーンに手を伸ばす。と、何も無い。

カチと、爪と皿が当たる音だけが虚しく響き、そこでようやくソフィアは意識を浮上させて皿の上を見る。そこにはスコーンなど影も形も無かった。

ソフィアは首を傾げながら立ち上がり、自分から死角になっている

書齋机の影を覗き込む。

すると、そこには小さく蹲る金色の髪の毛があった。

「クレア、いつの間に……」

ソフィアがその少女の名前を呼ぶと、クレアが顔をあげる。下がり眉で少し大人しそうな子だが、四人いる義妹の内では一番の悪戯小娘がこのクレアだった。

「おはようございます、お姉様。スチュアートが出ていったときに入りました」

「おはよう。それにしてもアイツ……」

「気付いてなかったと思います」

ソフィアがため息をつきながら椅子に座り直すと、クレアも立ち上がった。机の上に置いてあったソフィアの飲みさしの紅茶を手にとって勝手に飲み始める。

「やめなさい。はしたない」

「……ごめんなさい。喉が渴いていたの」

ソフィアは立ち上がると、書齋の棚からこういう時のために置いてある予備のカップとソーサーを取り出す。そして、そのカップに紅茶を注いでいると、クレアは地面に平積みされていた本を適当に積み上げて、即席の椅子を作り上げていた。

「次からは椅子も必要ですね」

「そうだね」

ソフィアはクレアの行動に呆れた声を上げたが、その行動を咎めることはしなかった。ただ、後で妹四人の分の椅子を用意することはしっかりと頭の中のメモ帳に刻み込んでいた。

そして、二人が雑談をしながら紅茶を飲んでいると、アスタロトが戻ってくる。手にはそれなりの分厚さの書類。ソフィアがそれを受け取ると、アスタロトは食べ終わった朝食を片付けるために空いた皿類をワゴンに乗せて、すぐに退出していった。

「何を調べていたんですか？」

「何だと思う？」

ソフィアが書齋机に書類を並べてその中身を読み始めると、クレア

もそれを読もうと覗き込んでくる。しかし、机の反対側からは上手く読めなかったようで、彼女は即席の椅子から降りると、机を回ってソフィアの下にやってくる。

そして、ソフィアの隣に立って机の上の紙の文字列に目を通し始めるが、難しい語句が並んでいるためにクレアは眉をひそめて唸り始める。

「うくん……。採掘……ナントカポンプ、岩盤？」

「やっぱり難しいか」

クレアが読みやすいように椅子を回して、机に対して体を半身にさせたソフィアが少し笑う。

すると、それが癩に障ったのか、クレアはソフィアの膝の上に少々乱暴に座り込んだ。10歳近い子供に勢いよく下敷きにされたソフィアは背筋をビクツと伸ばして、無言で痛みに耐える。

そして、特に機密も何もない書類を手にとると、彼女は一行ずつ優しくクレアに読み聞かせてあげた。

「難しいですー！」

結局子供のクレアにはやはり難しかったようで、彼女は足をぶらぶらさせながらつまらないと言わんばかりに後頭部でソフィアの胸を叩く。

「暴れるのは止めなさい。要するにこれはね、地下を掘っていつ自分達が見つけたいものを……」

「どうしたの？」

ソフィアは言葉を言いかけて段々と声を小さくしていき、ぱつと机の上にならんだ書類を見る。そして、今自分に必要な情報を取捨選択し、ピースを集めていく。

（地面を掘って、自分の見つけたいものを見つかる？）

あの貴族が書いたらしい地盤工学に関する論文は……これか、シールド工法を行う際に必要な地質調査に関して。

ドンピシャじゃないか!!)

「おー姉ー様ー？」

ソフィアは膝の上のクレアの頭を撫でて彼女のことを一旦落ち着

かせる。

「誤魔化されませんよ!」

(地下で何を見つける? 何を見つけたい? 今、このタイミングで……)

いや、今このタイミングじゃないとできないことか!)

ソフィアはいつか読んだ新聞記事を思い出し、それによつて散らばっていた多くのピースが脳内で繋がり始める。しかし、それは大まかな輪郭を浮かび上がらせるだけで、そこに何が描かれているのかは詳細には分からない。

だが、輪郭さえわかれば、原作の知識を駆使してソフィアは行動することができる。

「クレア。仕事が出来た。今日は帰りなさい」

「えー!?!」

クレアが悲しそうな顔でソフィアのことを見上げる。そんな彼女にソフィアはすまなそうに眉を下げ、心から謝る。

「ごめんな、大事な仕事なんだ。ついでにスチュアートを……」

ソフィアはそこまで言つて口を閉じる。そして、思い浮かべたのは10年近く前、契約をした瞬間の事。

—— 隠されたものを見つけさせたがった奴がいた。

—— それは、あの時無表情になったアスタロトだ。

—— ひいては、霧の都のマジに出てきた悪魔全員だ。

「スチュアートが?」

「いや、何でもない」

ソフィアは首を振る。

(あの状況を打破するにはこの契約が必要だった。後悔はない。

それに、これを主導しているのはアスタロトでは流石にないだろう。また別の悪魔か、悪魔崇拝者の可能性が高い)

「お姉様、怖い顔してるよ」

ソフィアはクレアのことを胸に抱きしめ、彼女に見えないように白紙の紙の切れ端に走り書きをして行く。そう多くない量の文章を書けば、それを折りたたみ、クレアのことを解放した。

「クレア」

「何？お姉様」

ソフィアはクレアのことを膝から下ろし、床の上に立たせる。そして、彼女の両肩に手を置いて、しっかりと目を合わせて口を開いた。「今からゲームをしよう」

態度とは裏腹に軽い口調のソフィアに、クレアはまじめな表情でこくこくと頷く。

「この紙をお父様、ジョージに渡しなさい」
「分かった」

そして、ソフィアは内心こういう事を子供にさせるのを心苦しく思いながら、先ほど書いたメモをクレアにしっかりと握らせる。

「スチュアートにも、他のメイドにも見つからずに渡すことが出来たら、お父様からケーキがもらえるよ」

「ケーキ！」

「うん。クリームたっぷりだね。さ、行きなさい」

「ケーキ！ケーキ！」

ソフィアが笑顔満点のクレアのことを送り出すと、彼女はスキップしながら書斎を横切り、扉に耳を当ててから外に誰もいないことを確認してドアノブを回す。そして、扉を閉めながらソフィアに手を振り、ソフィアもそれに笑顔で手を振り返す。

扉が閉まり、小さく音が鳴ると、ソフィアはさつと立ち上がって、机の上の書類と、書斎中に散らばった様々な物の中から必要な資料を全部取り出し、まとめていく。

すると、書斎の扉が叩かれる音。

「スチュアートです」

「入れ」

ソフィアの許しにアスタロトが書斎に入ってくる。すると、ソフィアはまとめた書類を彼に押し付けるように手渡した。

「アスタロト。遠出するぞ」

「は？」

「ケープ植民地でダイヤモンドを掘る方針を立てたいが、実際に現地を見てみたいと思ってな。」

だが、それだけでイギリスを出るのは非効率だ。ついでに、アメリカとパナマ地峡を見に行くぞ。大西洋一周だ。

4日後、蒸気エンジンを積んだ大型船の処女航海だったろう？あれに間に合わせる」

「はっ」

突然の強行スケジュールにも、アスタロトは恭しくお辞儀をする。

「少し出てくる。供はいらない」

「かしこまりました」

ソフィアが散歩に行くかのような気軽さを装って書齋を出ていくと、後に残されたアスタロトは手渡された書類をめぐり始める。

その中には様々なものが書かれていた。高度で綿密な露天掘りの計画書と、現在分かっている地形でのパナマ運河の設計案、加えてとある新兵器。それらを統合して莫大な利益を得ようとする世界をまたにかけた戦略も。

「やはり素晴らしい！」

アスタロトは掛け値なしにソフィアと言う人間を褒めたたえる。そして、彼は書類をまとめ直し、それを懐に抱えながら誰にも聞かえないほど小さな声で呟いた。

「だからこそ……ね」

夕方のロンディニウムを、男装して顔に包帯を巻いたソフィアが走っていた。目指すは銀の輪亭。鉄道と馬車を乗り継ぎ、できる限り近くまで来てからは自分の足の方が早いと路地を縫って走ってきたのだ。

そして、銀の輪亭にたどり着くと、やや乱暴にその扉を開いた。

ガラランツガラランツとベルが激しく鳴り響き、その音に振り返ったハドソン夫人が、突如入ってきた包帯男を見て目玉が飛び出さんばかりに眼を？く。

「キャー！！」

「失敬！アラン・ホームズはいるか？」

悲鳴を上げるハドソン夫人に構わず、アランの居場所を問いただ

す。すると、軽食を食べていたのか、口をもごもごさせたアランが店の奥から手を振りながら飛び出してきた。

「ぶはっ。何がどうしたんだい？」

「分かったぞ、アラン」

ソフィアはすぐさま本題に入る。そして、アランもその言葉で一氣に真剣な顔になり、一つ頷いた。

「ああ。僕もいくつか分かったことがあったよ」

ソフィアは答え合わせのつもりで、口を開く。

「鉱山労働者だな？」

「うん。失踪した人の八割が、かつて鉱山かそれに類するトンネル事業に何らかの形で従事、特に坑夫として働いていた人達だった。

ダイナマイトの発明で仕事にあぶれた結果、ロンディニウムで職に就いた人たちが狙われたんだと思う」

ソフィアは自分の予想が当たったことに僅かに上を向き、アランはソフィアに共通点を言い当てられたことに不思議そうにした。

そして、ソフィアはアランと目を合わせると、彼の目に指をさす。先日アランがしたのと同じように。

「いいか、よく聞け、黒幕の目的は未確定だが、どこで何をやっているかは見当が付いた」

「どこだい？」

ソフィアはもったいぶらずに、自身の結論を口にした。

そして、その言葉に、アランはピクシーに言われた『懐かしい何か』と言う言葉も合わせて、顔をこわばらせることになる。

「テムズ・トンネルだ。」

「奴等、ロンディニウムの地下で何かを探してる」

突入

ロンディニウムのロザーハイズと言う場所、そこは端的に言えば港だった。

ここでは大型のドックが建設され、日夜船を作ったり、貨物船から荷物を積んだり下ろしたりしていた。現代ではそのほとんどが埋め立てられてしまうのだが、この時代では日夜開発が進められており、まさしく黎明期と言ったところだった。

ロザーハイズの開発が進む一方、この場所はテムズ川の南側にある立地が問題となり始めていた。この時代、テムズ川の南北を行き来するのは少々難儀するものだった。そもそも川を横断できる橋が少なかったからだ。

だが、ロザーハイズは成長していく一方。このままでは多くの機会を損失するという事は誰の目にも明らかで、そのために求められたインフラ工事の一つがテムズ・トンネルだった。船が行き来するので橋はかけられない、ならば川の下にトンネルを通せばよい、という考えでこのトンネルは生まれたのだ。

かくして、ロザーハイズの成長は約束された。

とはならなかった。大型の船舶が行き来できる規模の川の下にトンネルを通すことなど、世界を見渡しても例が無かったからだ。

当然工事は難航し、当時最新技術だったシールド工法が投入されても、工事は失敗に終わってしまう。

そして、度重なる失敗で一時的にテムズ・トンネルの工事は放置されてしまうのだ。

その、放置されたテムズ・トンネルの工事現場に、ソフィアとアランはやってきていた。

時間は夜。もうとつくに日は落ちて、月と星の灯り、加えて手元のランプだけが頼りだった。

「ここがテムズ・トンネルの工事現場だ」

大きな鞆を背負ったソフィアがランプを手にアランのことを先導する。見えてきたのは、背の高い木でできた壁。一般人が入ってこら

れないようにするための衝立であった。

アランは辺りを見回し、遠くに見慣れた建築物があるのを見つけた。

「あそこは、ロンデイニウム塔か」

テムズトンネルの工事現場の対岸を見て、少し左を向けばそこにあるのはロンデイニウム塔——現実ではロンドン塔——だ。中世にロンデイニウム防衛のために立てられた砦であり、今は王宮の一つとなる場所。

そして、その位置はイーストエンドとロンドン中心部の境目。

そう、テムズトンネルの対岸は曰く付きのイーストエンドなのだ。

「ジャストーマイルと言ったところだな」

ソフィアはあらかじめ調べていた、この地点からのロンデイニウム塔までの距離を言う。それにアランはわずかに険しい顔をする。

そんな渋い顔をするアランにソフィアは声をかけた。

「地下に何があると思う？」

「分からない。分からないけど……妖精が『懐かしい』と言ったんだ。何が出てきても驚かないよ」

「そうか。『懐かしい』か」

ソフィアは木の壁に近づくとつれて嫌な予感を感じ、アランは恐怖心を押さえつけるために拳を握りしめていた。やがて二人はそこにたどり着き、扉に手を掛ける。

不思議と鍵のかかっていた扉を開けると、そこには暗闇が広がっていた。

ソフィアは扉をあけ放ったまま、背負っていた鞆を地面に下ろし、それを開き始める。一方のアランが中を確認するために扉の中へと顔を入れようとすると、ソフィアが慌てて声をあげた。

「危ないぞー！」

「うわっ………凄いな」

アランは扉の奥の光景に驚き、素直に感嘆する。そこにあっただのは巨大な円形の縦穴だった。機材や物資、他には換気用の空気を地下に運び入れるための、立坑たてこうと呼ばれるものだ。

テムズ・トンネルの立坑は、この工事が前例のないものだったから余裕をもった半径と深さの立坑が掘られており、その円に沿うように木で螺旋階段が地下深くまで設置されていた。

アランが恐る恐る一番底を見ようと覗き込むが、ただでさえ暗い夜ではその底を見ることは叶わなかった。

「準備する時間を与えられなくてすまない。時間がないんだ」

アランが覗き込んでいると、ソフィアが申し訳なきような声をあげた。彼女は鞆から取り出した装備を体に巻き付け、その後は何かを組み立てていた。

「謝らなくていい。ここに一人で入るよりもずっとましだ」

「そう言ってくれると助かる」

（私に内緒で動き始めているアスタロトを一旦帝国から遠ざけるために外遊をねじ込んだが、そうになるとアランが孤軍奮闘することになるからな。

できればこの一番真実に近いであろう事件は一緒に解決してやりたい……）

ソフィアは地面に置いていたランタンを掲げてそれをアランに手渡す。そして、今組みあがった物を両手で持つて立ち上がった。

ランタンに下から照らされる、アランとソフィア。亜麻色の髪を持った男と、包帯を巻いた男。彼らは信念を瞳に湛えながら目を合わせる。

「私はこの事件が解決しようとしまいと、アメリカに行くことになった。」

アラン。今日に限らず、気を付けるんだぞ」

「わかった。御忠告痛み入る。無謀なことはいないと誓おう。」

……とところで、なんてものを持ってきているんだ」

ソフィアは手に持ったものを掲げて見せる。それは、ライフルだった。

土台は磨かれた木できており、それに乗るのは少しくすんだ色の鉄。それに加えて、今までのライフルと一線を画すものが、横に向かつて飛び出していた。

「使い方を一応教えておく。この横に飛び出ている物はボルトと言う。これを握って持ち上げ、それから引くと、このように薬室が開く。そして、この金属薬莖を薬室に入れ、ボルトを逆の手順で戻せば装填完了だ。」

後は狙いを定めて引き金を引く」

「ええつと……」

アランは困惑した表情で、後にボルトアクションライフルと呼ばれることになる最新式のライフルを眺める。そして、ソフィアに疑問を投げかけた。

「こんなライフル見たことがないんだけど？」

「あまり出所は聞かないほうが良い。アイデアそのものはもうすでにあるから喋つてもいいが」

「誰にも言えないよ、こんなの」

アランは大きいため息をつく。そして、目の前の男はやはり学者か技術者で、それも相当に優秀なのだろうと理解した。

アランが様々な物を飲み込んで無理やり納得したのを、ソフィアは表情から理解する。それを確認すれば、ライフルを軽く構えながらもうすでに開いている扉に視線を向けた。

「さあ、行こう。ランプを頼んだ」

「わかった」

アランは頷き、ランプを掲げながら扉をくぐる。立坑は暗闇に満ちていて、弱いランプの光程度ではその先の全てを見通すことなどできない。見えるのはかろうじて足元の木でできた螺旋階段と、落ちないための手すり程度。

アランとソフィアはそんな中で、ぎしぎしと小さな音を立てながら一段ずつしっかりと暗闇の底へと降りていく。

(立坑には見張りはいないか)

ソフィアは時々立坑の底を覗き込む。もし、底に人がいるのであれば、向こうからはランプの光が見えてしまうだろう。それなのになんのアクションも無いという事は、この立坑には誰も人がいないという事の証左となる。

やがて二人は時間をかけて立坑の底へと降り立つ。足元はしつかりとしていたが、空気はわずかによどみ、腐ったような匂いと何か焦げたような匂いが充満していた。

アランがランプを掲げ、辺りを見回す。

ちょうど円形になったこの立坑は木で壁が崩れないように補強されていた。そして、そんな木の壁は上に向かって伸びていて、三階建ての家くらいなら余裕ですっぽり入りそうなほどの規模だった。

「凄い」

「正しく工事されていれば後々貴重な遺産になるだろうな」

アランの賞賛にソフィアも追従する。そして二人はそんな木の壁にある、一つの門に目をやった。

テムズ川方向に備えつけられた門は、本来なら資材の搬入の時には開けられ、出水や何らかの事故が起これば閉じられるのだろう。工事が行われていないはずの今もそれは閉じられていたはずだ。

しかし、その門の下部にある、人が一人分出入りできる扉のわずかな隙間から光が漏れ出ていた。

「私が先行する。アランは囚われた人を助け出すことを優先しろ」

「わかった。頼んだよ」

ソフィアがその扉にとりつこうとすると、その向こう側から騒ぎ声が聞こえ始める。先行するソフィアがアランに目配せをすれば、彼はソフィアが見えやすいようにランプを高く掲げ、ソフィアはわずかに扉を開きそつと中を覗き込んだ。

——見つかったか!?

——おい！出水じゃないか？逃げるんだ！

中は天井が高くアーチ状のトンネルが掘られ、それとは別に進行方向から垂直に小さな坑がいくつも掘られていた。ソフィアが観察するに、その横坑の一番奥のもので大騒ぎをしているらしかった。

雑に設置されたランプで薄暗いトンネルでは、作業服を着た男たちが坑から出てきて顔を見合わせていて、逆に統一された軍服に身を包んだ男たちは何かがあったらしい坑へと入っていくのが見える。

ソフィアは後ろのアランにそれを説明しながら、これからどうする

かを考えるためにさらに観察を続ける。

「本来のトンネルは500フィート(約150m)くらい。ただ、そこから別方向に幾つも穴を掘っているな。そのうちの一本で何か問題があったらしい」

「どうする？」

「今のうちに侵入する。今人がいないらしい穴があるからそっちに行こう。」

ランプは消している。

走るぞ！」

ソフィアはそう言いながら静かに扉を開き、姿勢を低くしながら一番近い横坑へ転がり込む。アランも彼女の後ろについて行って、同じように横坑へと身を隠す。

横坑は本来のトンネルとは違って、ずさんな作りだった。高さは大人の男が腰をかかめなければいけないほどで、天井は適当な木の板で作られ、それが崩れないように木の棒でつつかえる形になっていた。

そんな作りのトンネルはいつ崩れてもおかしくなかった。

「炭鉱みたいだ」

ソフィアは率直な感想を述べると、ちらつと顔を出し、数メートル先にある別の横坑を確認し、またそこに走っていく。すると、そこにはぼろぼろの作業着に身を包んだ鉱夫が隠れていた。

「わっ」

「シッ！」

鉱夫が声を上げかけたのをソフィアは手で口をふさいで黙らせる。彼女は自分が包帯男という事をすっかり忘れていた。

そして、アランがすぐに合流すると彼がすぐに事態を察して説明を始めた。

「大丈夫です。僕たちは貴方達を助けに来ました。」

だから叫び声をあげないで、いいですか？」

アランの言葉にこくこくと鉱夫が頷くと、ソフィアは彼の口から手を放す。すると鉱夫はアランに縋りつきながら涙目で訴え始めた。

「たっ助けてくれ。頭のおかしい奴らに攫われたんだ！」

「大丈夫。大丈夫ですから」

「その、頭のおかしい奴らは軍服の連中だな？人数は？」

「そうだよ、見りや分かんたろっ、20人くらいだ！なあ、早く俺を逃がしてくれ！」

横坑から外をうかがうソフィアの問いかけに律儀に答えた鋳夫、アランは先ず彼をどうにかしようと思案しかける。だが、彼女に話しかける前にアランは、トンネルの中央付近に一人の男を見つけた。

「ダン。彼だ、彼が失踪した貴族だ！」

「あいつか」

その男は薄汚れたスーツを着ていて、顔は憔悴していた。彼は何か騒ぎがあったらしい坑を見ながら、へたり込んでいた。

「アラン。私はひと暴れするから、誘導を頼んだ」

「何をするか事前に言ってくれ！」

「爆破する時は言う」

「ばっ!？」

ソフィアはそう言うと、絶句するアランを置いて、ライフルを構えながら横坑から飛び出す。そして、一番奥の横坑の前で中をうかがっていた制服の男の背中に向かって照準を合わせ、すぐさま引き金を引いた。

ダーンツ!!

拳銃とはレベルが違う銃声がトンネルの中で反響し、その音の中で背中に穴が開いた男は悲鳴も上げる暇なく前に倒れ込んでいく。

銃声がわんわんと反響する中、トンネルはびたりと静まり返り、全員がソフィアのことを見た。

「鋳夫全員に告げる!!逃げる!!逃げる!!逃げる!!」

「う、うわああああ!!」

鋳夫達はライフルを持った包帯男に恐怖したのか、悲鳴を上げながら這う這うの体で出口に向かって走り始めた。そして、一番奥の横坑からは地響きのような怒声が飛んでくる。

「誰だ貴様は!!」

「貴様らに名乗る名はない!!」

ソフィアは油断なくライフルを構えつつ、別の坑から飛び出してきた制服男の眉間をぶち抜いた。そして、四方八方から撃たれるのを防ぐために手近な横坑へと身を隠す。

その間にも刻一刻と状況は進んでいく。

鋤夫たちは転びながらも出口に向かって走り――

「総員戦闘準備イ!!!」

横坑からは命令が轟き――

「そこの人!!出水だぞ!!君も逃げるんだ!!」

貴族の男が逃げながらもソフィアに忠告を飛ばし――

ダーンツ!!

ソフィアは奥の横坑から頭を出した男を狙って撃ち――

「ダン!!すぐに逃げるんだよ!!」

アランが必死に叫びながら避難誘導をし――

「構えエ!!」

再度命令が飛んだ瞬間。

地響きのような音がトンネル中に響いた。

一瞬皆が天井を見上げ――

「出水だあっ!!」

誰かがそう叫んだ瞬間、一番奥の横坑から、慌てた人間が何人も飛び出してきて、彼らのすぐ後ろから大量の土砂がトンネル内に雪崩のように流入し始めた!

ソフィアは慌てて無事そうな軍服の男達を優先して狙い撃ちし、アランはこけた鋤夫に手を貸して立坑への扉をくぐっていく。

「おのれえ!!」

「隊長!!何人も巻きこまれた!!」

「畜生!!」

制服の男たちが悪態の声をあげようと、出水はどんどんひどくなつていき、一番奥の横坑だけではなく、その近くの横坑からも濁流が発生し、その土砂は見る見るうちにトンネルの地面を覆い始める。

そして、自身の足元にまでその土砂がきたソフィアはすぐに構えを解き、自身も逃げようと腰を上げる。

だが、その瞬間、ダウン！というけたたましい銃声が鳴り、ソフィアのすぐ真横の壁が吹き飛んだ。

「っ！」

ソフィアはすぐに横坑に体を引っ込める。そして、そつと顔を半分出せば、体中を泥だらけにしながらもしつかりと膝について射撃体勢に入り始めた男たちが見えた。5人が横並びになり、1人がその列の後ろに控えて手を振り上げる。

「射撃用意!!」

ソフィアは彼らのライフルが旧式の物であろうことを推察し、その上その銃身が酷く濡れていることも理解すると、また走り出そうとする。

（脅しだろー！）

「発射！」

（まずっ）

ソフィアは横目で、先ほどの銃撃で彼らが発生させたはずの白煙が無いのを見た。はつきり言つて、100m以上先のそれが無いことを見たのは、ただの幸運だった。

ソフィアは慌てて横坑に戻る。その瞬間鳴り響いた一糸乱れぬ5発の銃声。

バババツ!!という音と共に、ソフィアが隠れる横坑入り口付近がはじけ飛ぶ！

ソフィアは急いで彼らが再装填する前に体を出して、ライフルを放った。それによつて、一人の腹に穴が開けば、後ろに控えていた隊長格の男が叫ぶ。

「いかん!!前進!!前進!!前進!!」

（奴等、無煙火薬を使っている!?まだ秘匿されている情報のはずだ!!）
ソフィアは内心動揺しつつも、すぐにボルトを引き、次弾を装填する。そして、銃剣を振り上げながら走り込んでくる男達に向かって発砲した。

「「チャアアアアジ!!」」

Charge!

突撃と叫びながら男たちが走ってくる中、ソフィアは更に発砲し

ていく。土砂が次々流れ出てきているのに、仲間が次々倒れているのに、一糸乱れぬ銃剣突撃を敢行するのは彼らが歴戦の兵士であることの証左だった。

そして、彼らの執念は一人の男をソフィアの下までたどり着かせた。

その男は銃剣を走ってきた勢いのままソフィアへと突き出す。

「死ねえええ!!」

「うおおお!!」

ソフィアも裂ぱくの気合と共に、両手で持ったライフルを横に振るう。そして、何とか男の刺突を受け流す。しかし、足元が悪い中では男の勢い全てを逸らすことはできず、二人はもみくちゃになりながら土砂の中に倒れ込んだ。

最初に立ち上がったのは男だった。その男は腰から瞬時にナイフを抜き取ると、それを振り上げ一気にソフィアへと突き刺してくる。

「クソがよおー!」

泥にまみれたソフィアは悪態をつきながら男の腕を掴んで何とかそれを押しとどめる。勢いのまま男は体重をかけてソフィアを殺しにかかり、ソフィアはその男からのナイフをなんとか押しとどめるために歯を食いしばった。

そして、ソフィアは男の泥にまみれた顔を見た。

(こいつー!ダミアンか!)

ソフィアは先ほどの白煙の出ないライフル射撃、そして目の前の見覚えのある男の顔で全てを理解した。

目の前の男はギリシア独立戦争に、無煙火薬を持って秘密裏に出征をした男だという事。

霧の都のマジに出てくる悪役の一人であるという事を。

「貴様あ!!我々の計画を邪魔しよってえ!!」

「ぐううっ!!ろくでもない計画だろうがあ!!」

ダミアンが叫び、ソフィアも叫ぶ。

そして、その叫び声にも負けないくらいの破壊音がトンネルに響いた。

放置されたトンネルの天井が、無計画な横坑と、そこからの出水によつて崩れ始めたのだ。

さらに流入する多量の水を含んだ土砂、地面で取っ組み合いをする二人は、その土砂による黒い津波に巻き込まれてしまうのであった。

暴露

アランは足をくじいた鋤夫に肩を貸し、立坑の螺旋階段を登って行く。友人を一人、危険なトンネルの中に置いてきてしまったことは気がかりで焦燥感をひどく煽ったが、今肩を貸している鋤夫を見放すこともできない。彼は必死に足を動かし、大柄な鋤夫のことを一段ずつしっかりと引き上げていった。

「助けに来てくれてありがとう。それと、手伝えなくてすまない」

そんなアランに声をかけたのは、彼が探していた貴族の男だった。彼は狭い螺旋階段でアランのことを手助けできない事を申し訳なきそうにしながら、少し上の段を先行していた。

「ご無事で何よりでした。ご家族がご心配されていましたよ」

「そうか……苦労を掛けたな」

その時、立坑の下の方から破壊音が反響して、立坑の門が酷く軋んだ音を鳴らす。立坑へと土砂が流入するほどのものではないようだが、それでも恐怖心を煽る音だった。

三人は立坑の底を青い顔でしばらく眺めていたが、すぐに上を向いて階段を登り始める。

「酷い出水だな……。あの者は無事だろうか？」

貴族の男が心配そうに言うが、アランはその言葉に応えるすべはない。そして、アランは自身の不安から気を逸らすために、目の前の男に問いかけた。

「あの軍服の男達は何を探していたかわかりますか？」

「わからん」

「何でもいいんです」

アランが継る様に聞けば、男は一つ心当たりがあつたのか口を開く。

「そうだな。奴らは水を探していた」

「水？」

「そう！出水の度に、奴ら喜んでいた！その度に、ギリギリのところまで塞いで……死ぬかと思つた！もうたくさんだ！」

なんでトンネル工事で水なんてものを探さないといけないんだ！
狂ってる！」

アランは制服の男達が水を探していることに、背筋にうすら寒いものを感じる。そして、何か重大な閃きが、螺旋階段を登るにつれてにじり寄ってくる。

なぜ深く掘ってまで水を探したのか？なぜあえてロンデイニウム塔の近く？ただ、テムズトンネルが都合がよかったから？

アランは一足先に地上にたどり着いた貴族の男に問いかけた。

「実際、水があつたとして、どれくらいの範囲に広がっているものなんですか？」

「そうだなあ……。もし水を通しにくい層があつたら、この辺り一帯に大きく広がってるんじゃないかな？」

アランはその回答を聞きながら一つゾツとするひらめきを得た。彼は体をわずかに震えさせながら、何とか鉱夫と共に地面を踏みしめる。

「ドラゴン……」

「ん？」

アランはそう呟いた。

「地底湖、そして、ドラゴン……」

「ああ。おとぎ話の？」

貴族の男がアランの呟きに首を傾げる。一方のアランは鉱夫を地面に座らせると、大急ぎで踵を返して螺旋階段へと向かい、未だほの暗く、反響した破壊音が何かの遠吠えのように聞こえる縦穴を下っていくのだった。

体を覆う、重く冷たい土砂を振り払いながらソフィアは立ち上がるうとする。

しかし、奥から次々と押し寄せてくる土砂に足を取られて立ち上がることが出来ない。一瞬見えたダミアンも同じように藻掻いていた。

(まだ破局は起きていない。なんとか……なんとかしないと！)

そうは思っても何もできないソフィアは土砂の流れによって、トン

ネルと立坑とを分かつ門へと勢い良く叩きつけられる。

「ぐうっ!!」

左半身を強かに打ち付けることになったソフィアは、呻きながらもナイフを抜き、それを門へと突き刺す。そして、それを支えに何とか立ち上がると、すぐに顔を上げてダミアンがどこにいるのかを確認する。

果たしてダミアンもトンネルの壁を伝いながら立ち上がっていて、ソフィアは彼の様子を確認した後、門の扉とトンネルの天井とを確認する。

(逃げるか、確実に殺すか。)

今は出水が小康状態、なら、殺す!)

ソフィアはひざ下までである土砂でもお構いなしに走っていく。そして、ダミアンも同じように走り始め、彼は逃走を選んだのか門の扉へと向かう。

ダミアンは腐っても軍人だ。彼の方が移動スピードが早く先に扉へとたどり着きそうだった。

(リボルバーは……抜けない!今これをダミアンに見せるわけにはいかない!)

ソフィアは確実に殺せると確信しないとリボルバーを抜くことはできないと判断した。故にナイフを振りかぶると、ダミアンに向かって投擲する。

「むっ!」

ダミアンはすぐに飛来物に気が付き、それを躲そうとする。だが、それはソフィアが意図したとおりの悪手だった。足元が悪いこの状況で体をひねればバランスを崩し、彼は盛大に転んでしまう。

ナイフはダミアンからも遠い位置に落ち、一瞬ダミアンがそのナイフの位置を確認した時間の浪費もあつてか、ソフィアはダミアンが立ち上がった瞬間に彼の下にたどり着くことが出来た。

そして、ソフィアはダミアンに向かって拳を振るい、次は悪手を打たなかったダミアンはその拳を腕で防ぐ。

「軽い!」

「チッ」

ダミアンは大したダメージも無く、右フックでソフィアに反撃をする。

そうして、二人はトンネルの出水をよそに殴り合いを始めた。

足を踏ん張れない状況では殴りかか相手に攻撃する方法はない。しかし、その殴打の威力も著しく落ちていく。かといって、このまま泥沼の戦いをしているのは共倒れになる。

ダミアンは必死にあたりを観察し、相手を観察し、打開策を練る。そして、彼は一つの物に気が付いた。

「それは!!金属薬莖か!?!」

ソフィアが体に巻き付けたベルトが一部破損し、先端が鉛色で全体は金色の細長い円柱状の物が覗き見えていたのだ。ダミアンはそれを金属薬莖だとすぐさま看破した。

「やはりな!!あのライフル、後装式だろう!?!」

「黙ってる!!」

ソフィアは高揚した顔のダミアンの顎を強かに裏拳で打ち抜いた。しかし、彼はひるまず立ち向かい続ける。

「二目見て分かったぞ!!あの装填速度!!精度!!やはり俺の考察は正しかった!!」

叫ぶダミアンの鋭いテレフォンパンチがソフィアの鼻を潰し、彼女は鼻血を噴き出した。赤い鮮血が泥濡れの包帯を新たに濡らしていく。

「あのライフルで戦争は変わる……いや!!」

ダミアンは好機と体をひねって、回転力も加えたボディブローでソフィアの腹めがけて拳を振りぬく。

「俺が変わる!!」

「ぐおっ!!」

みぞおちだけは守ろうとソフィアは体をひねる。すると、偶々銃弾の入ったベルトがそこにあり、ダミアンの痛烈な一撃の直撃をなんとか遮ることが出来た。

「くっ!」

「お返しだ!!」

それでも痛みを訴える体を制してソフィアは手刀を振り抜き、ダミアンのこめかみを打つ。しかし、ダミアンもカウンターでまたもボディブローを放った。

そして、それをまともに受けたソフィアは息が詰まりながらも踏ん張り、ダミアンの隙を伺い続ける。彼女の奥の手は一瞬で勝負を決めることができる。だが、それは確実に当てられたらの話だ。

反動で体が硬直するなど、愚の骨頂だ。

「はあ……はあっ!」

「しつこいぞおっ!!」

二人は一瞬息を入れ、ファイティングポーズで向かい合う。そして、先手を取ったのはダミアンだった。

「我々にはやらなければならぬことが山ほどあるのだ!!どけえ!!」
「!!」

ダミアンは殴るのではなく、姿勢を低くし、タックルを決めに来た。ソフィアはその、姿勢を低くした瞬間、腰のリボルバーを引き抜いた。「なあっ!?!」

銀色に光るものが視界の端に映ったダミアンは躊躇する。ナイフを抜かれたならタックルは悪手も悪手、背中を刺されて殺されてしまう。

「私の勝ちだな」

その一瞬の隙を見逃すソフィアではない。彼女は引き抜いたリボルバーで、ダミアンの右肩を撃ち抜いた。けたたましい銃声と共に、赤い花がダミアンの肩に咲き、彼は撃ち抜かれた衝撃で後ろへと倒れ伏す。

「うぎやあああ!!貴様!!貴様!!それはなんだあっ!?!」

ダミアンは無事な左手を、銃口を向けてくるソフィアへと必死に伸ばす。

「そうか……そうかあ!!分かったぞお!!それは連発銃だな!?ハーモニカガンの次の形!!」

「だから見せたくなかったんだ」

ソフィアはため息をつきつつ、未だ垂れる鼻血を拭う。そして、油断なくダミアンへと銃口を向けたまま、トンネルの様子を探る。今は断続的な出水は今も収まっているが、いつまた決壊して大量の土砂が流れ出るかわからなかった。

「聞きたいことがある。誰の差し金だ？」

「言うものかよ。さっさと殺せ」

(ダミアンは戦争狂の英雄症候群だ。原作では戦争がしたいがために悪魔の力を借り、それを自分で鎮圧することで英雄になろうとした。

だが、今の時系列でのこいつの主目的は何だ？ 地下の封印を探すのが目的なんだろうが、そう考えると……)

ソフィアは今すぐ殺していいものか少し迷う。聞きたいことがいくつかあったからだ。一方の、ダミアンはもう覚悟が決まったのか目をつぶって大人しくしていた。

その時、門の扉とは別の場所のそこそこの大きさの窓が開き、そこからソフィアの知った声が響いた。

「ダーン！ 大丈夫かー！？」

「大丈夫だ！」

「扉が開かなくなってる！ 早くこっちに来るんだ！」

「わかった！」

ソフィアはそう言いながらダミアンに意識を戻す。

「さっさと見え。誰の差し金だ」

ダミアンは黙ったままだった。そして、沈黙の中、僅かな地響き。

もはや猶予はない。

ソフィアはダミアンに近づくと、彼の胸倉を掴んで引っ張り、その眉間に銃口を突き付ける。

「言え!! 誰の差し金だ!!」

「……」

「早く!! こっちに!! ダン!!」

なおも黙るダミアンにソフィアは舌打ちをし、歯をむき出しにしながら叫んだ。

「全部言い当ててやろうか!!」

「やれるものなら……」

ダミアンが不敵に笑う。顔同士が近付いたからか、ソフィアの鼻血がダミアンの頬を伝う。

「全ての黒幕はオールバニ公だろう!!」

「……」

「オールバニ公って……」

アランが驚きの声をあげる。オールバニ公は王弟であり現在王位継承権第一位、王が高齢で子供が望めないことを考えれば、次の王となる男だ。ダンの口からそんな名前が出てくることにアランは混乱してしまう。

「このテムズトンネルの工事はオールバニ公によって提案されたものだ!! 正確には、オールバニ公からの口利きでこの工事は予定より大幅に早く着工した!!」

そして、失敗した!! だが、その失敗は見せかけだな!?

失敗したと見せかけて、お前らはここで何をしていた!!」

ダミアンは何も言わない。天井がきしむ音が響く。

「オールバニ公の最終目標は一つしか考えられない!! いや、一つしかない!!」

王位継承だろう!?

オールバニ公の目的は玉座だ!! 違うか!!」

ソフィアは掴んだ胸倉を揺らし、ダミアンを激しく詰問する。一方のアランは順当に行けば王になれる男がこんな大それたことをするものなのか、何故ダンはこんなことを叫ぶのか、と錯綜する思考に頭をくらくらとさせる。

「ふっふふ……はははっー!」

すると、何が可笑しいのか、ダミアンは血が足りずに青白くなり始めた顔で笑う。そして、目の前の包帯が外れかけた、顔のいい男を見た。

「お前、あれだな? 何かを知ったが、証拠がなかったんだな? それで、何もできないんだな? だから俺に自白させたいんだな?」

ソフィアは何も言わない、しかし、ぐりぐりと銃口を押し付けてダ

ミアンのことを黙らせる。

「今、この地下を掘っている目的は何だ？さあ！言え!!」

ダミアンは口角を上げ、壮絶に笑う。

「俺はあつ!!俺は!!英雄になりたい!!それだけだよ!!ちよおつと、塹壕を掘ってただけだ!!ばあああか!!」

ダミアンが適当なことを言いながら目の前の男のことを嘲笑すれば、今度は別方向から声が飛んでくる。

「ダン!!こいつの目的はドラゴンだ!!地底湖の底に眠るドラゴンの封印だ!!」

その言葉にダミアンはぱつとアランの方を見る。ダミアンからは、その男の顔は彼が持つランプの逆光で見えなかった。しかし、アランからはダミアンの、『なぜそれを』という驚愕の表情がよく見えた。

「オールバニ公がなぜ、ドラゴンの封印を探している？そして、お前はなぜオールバニ公に協力した？さあ、答えろ」

「……」

ダミアンは黙る。だが、無情にもタイムリミットだ。

ついにトンネルの奥がひしゃげていき、出水が見る見るうちに酷くなっていく。

ソフィアはそれを見て、それから掴んでいた胸倉を放す。

「ダン！やめるんだ！」

「殺せるか？俺をこ——」

バァンツ!!

ソフィアはダミアンの眉間を撃ち抜いた。最後の最後まで面倒くさい奴だったとソフィアはため息をつき、私刑現場を横で見る形になったアランは頭を抱える。

「ああ……なんて……なんて……」

「アラン。こいつは牢にぶち込んでもまた出てくる。今、ここで、確実に殺さないといけなかった」

アランは何も言えなかった。背後から濁流が迫り始めているのに、目の前の包帯のほどけた男は、ただ冷静に立っているのだ。

アランは彼に何も言えなかった。

「私は正義を為したいわけじゃない。分かるか？」

アランはソフィアのその言葉にようやく頷くと、窓から手を差し入れて彼へと手を伸ばす。

「さあ、掴まっつて。逃げるんだ」

しかし、状況がソフィアがアランのその手を掴むことを許さなかった。突如として土砂が引き始め、その突然の足元の動きにソフィアは対応するのに精一杯になったのだ。

凄まじい地面が崩れていく音、風鳴音、もはや音と認識できない音の唸り。

「アラアアン!!何が!!起きてる!!」

「……!ダアアン!後ろを!!見ちやあだめだ!!」

ソフィアは門の方へと必死に足を動かしているので後ろを見ることは叶わなかった。しかし、アランからはすべてが見えていた。トンネルの奥が落ちくぼんでいき、その奥に何か蠢いているのを見た。

「ダン!!早く!!掴まっつて!!早く!!」

「うおおお!!」

ソフィアは引きずり込まれるのに何とか抵抗し、アランの手を掴んだ。そして、そこから窓にも手をかけようとするが、上手くいかない。

腕がきしむのを感じながらアランは必死に叫ぶ。

「ダン!爆破できるんだっつて!?!」

「ああ!」

「爆弾を後ろに投げて!!」

「どうなっても知らないぞ!!」

ソフィアは体に巻いていたベルトを片手で外し、そこから一本の線を引き出し、それを口で噛む。そして、ポケットからスイッチを取り出すと、その線の先をスイッチに接続した。

「うぎいつ!!もう無理だよ!!」

「後数秒!!」

ソフィアは足に感じていた地面の感覚が無くなったことに気が付き、思わず振り返ってしまった。

そこはもはや崖のような坂になっていた。そして、蟻地獄のような

「さあ、登ろう。帰ろう」
ソフィアはアランの肩を叩き、アランも少し涙目になりながら頷く
のだった。

出航

テムズ・トンネルが崩落して数日後の、ブリストルはエイヴオンマス。開発されたばかりのコンクリートで作られた巨大な埠頭がその地にはあり、そこにとある客船が停泊していた。

黒い船体に金色のライン、全長は150mという巨大さ。2本の煙突からは黒い煙が立ち昇り、船体に乗るブリッジや客室すらもとんでもない大きさだった。しかし、その一方で予備の三本のマストは帆を完全に畳んで寂しく立っていた。

この船の名はブリタニア。世界初の大西洋横断を狙う蒸気船で、スクリュープロペラや複式機関も採用した野心的な設計だった。

そんなブリタニアを見上げるのは、瀟洒なドレスを身に纏ったソフィア。この船の設計をした人間でもあった。

「見た目以上に大きく感じるなあ」

「うう……そうですね……」

ソフィアの言葉に、低い位置から震え声で答えるのは、くすんだ金色の髪を持つ子供。その子供はソフィアの腰にぎゅうっとしがみついて、泣きはらしたのか目元を赤くさせていた。

「エマ。もうそろそろ機嫌を直してくれないかな？」

「やです……。行かないでください」

少女、エマはソフィアの義妹の一人だった。彼女達4人の義妹は、ソフィアがアメリカへと旅立つことに対し、皆一様にぐずった。全員が泣き、行かないで欲しい、行くならつれていけとわがまを言ったのだ。

ソフィアは何とかその四人を説得して、認めさせたのだが、当日になつてこの腰にしがみつくとエマが我慢できなくなったのだ。

「おねーちゃん!!すっごいおおっきい!!」

そんな二人とは打って変わって元気いっぱいだったのが、ベアトと言う愛称のベアトリーチェ。彼女は目の前の蒸気船に大興奮状態だった。最後方から最先端まで走っては、ジャンプしながら船員に手を大きく振ってを繰り返していた。

アリスとクレアも一緒になってベアトと追いかけてっこをしていて、子供たちは大いにはしゃいでいた。

「戻ってきなさい!……全く」

「うう……お姉様あ……」

腰のエマが小さく泣き声をあげ始めてしまい、ソフィアはどうしたものかと目をつぶって、ため息をかみ殺す。子供相手にため息などついてはいけませんが、今、許されるなら盛大に溜息を吐きたい気分だった。

「エマ」

ソフィアはエマを一旦引きはがし、しゃがんで彼女と視線を合わせる。エマは鼻水を啜りながら、潤んだ目を開けてソフィアのことを見た。

「お土産もたくさん買ってきてあげるし、手紙も毎週書く。」

君達からの手紙は時々しか受け取れないけど、その分いっぱい書いていいから。

ね?」

ソフィアは微笑みながらエマの涙をハンカチで拭う。その言葉でエマは何とか納得したのか、こくりと頷いた。そして、またも鼻水を啜りながら、ソフィアの胸に飛び込んだ。

「帰ってきたら、一緒にお茶してくれる?」

「もちろん」

「うう……。もう、わがまま言いません」

エマは最後にひとしきり涙を流すと、そのぐずりがようやくやく収まる。そんな彼女の頭を、ソフィアは微笑みながら優しく撫で、口を開いた。

「いい子だ。将来は立派なレディだね。——ぐえっ!!」

最後にもう一度エマのことを抱きしめてやろうとしたとき、横からすごい勢いで子供が飛んできて抱き着いてくる。それに、先日の戦闘でまだ体の節々が痛むソフィアは汚い悲鳴を上げてしまう。

「お話終わった?お姉ちゃん!!お姉ちゃん!!私もあれ乗りたい!!」

「駄目だって……言ってるでしょうが!!」

「いでっ！」

ソフィアは割と本気で怒って、飛び込んできた義妹の内でも最も活発な子供、くせ毛の金髪がトレードマークのベアトの額にデコピンをする。そして、彼女に説教をし始めたのだった。

その説教でベアトが涙目になってしまった頃、荷物の搬入を終えたらしいアスタロトが客船のタラップから降りてきた。

「お嬢様。お時間でございます」

「分かった。じゃあ、皆、家ではジョージお父様のいう事をよく聞くんだよ」

「はいー！」

いの一に返事をしたのはベアトでそれに続いて他3人も各々返事をする。

「それじゃあ。いつてきます」

ソフィアは笑顔で手を振って彼女らの下を離れ、客船のタラップへと向かう道中で辺りを見回す。その結果何かを見つけたのか、彼女は僅かに口角をあげる。

「アスタロト。少しお手洗いに入ってくる」

「かしこまりました」

そして、ソフィアはタラップを登る直前、アスタロトにそう断つてトイレへと足を運ぶ。その歩みの中、アスタロトから死角になった物陰に入ると、彼女はトイレへの道を外れて先ほど見つけた場所へ足を向けた。

そこは、客船とは別に停泊していた貨物船に乗せる荷物が待機させられていた場所だった。

「いないか……」

そこでは、インバネスコートを着た男が木箱に腰を掛けてため息をついていた。その場所からは客船ブリタニアが停泊する埠頭がよく見えていた。

ソフィアはそんな男の背後を指しながら一つ咳ばらいをする。

「いるぞ」

そして、ソフィアが発したのは見た目からは想像もできないほど低

い声。ダンの声だった。

「うわあ!!」

「そのまま、前を見ている」

インバネスコートを着た男、アランは思わず驚いた声を上げ、立ち上がってしまう。そして、そんな彼に振り向かれると困るソフィアはいつも以上にどすの利いた声でアランに命令を出した。

「なぜここにいる」

「いやあ、ここなら一目会えるかなと」

「どの船に乗るかは言っていないはずだが」

ソフィアは腕を組みながらアランの背中にため息交じりの声を投げかけた。すると、アランは頬をかいて、すこし誇らしそうな声色で解説を始める。

「アメリカに行くって言ってる、かつ技術者っぽいダンのことだ、あの最新鋭の蒸気船に乗るんじゃないかなって」

「お見事」

ソフィアは掛け値なしにアランのことを褒める。すると、アランは客船の前で別れを告げる家族たちのことを眺めながら口を開く。

「いやあ、凄い船だね」

「まあな。で、何の用だ?」

場を温めるための世間話をすぐに切って落としたソフィアに、アランは困ったように笑い、それから少し真剣な表情になる。

「あのトンネルに囚われていた人たちは全員元居た場所に帰ったよ」

「そうか」

「僕からお礼を言わせて欲しい。手伝ってくれてありがとう」

「かまわない。で、まだあるのか? 私はもうそろそろ行かないといけないのだが」

アランからのお礼の言葉を適当に受け取ると、ソフィアはタラップの方を見る。そこでは未だにアスタロトが待ちぼうけを食らっていた。

「これ、僕の事務所の住所。何かあれば連絡を、教えて無かったよね」
アランは後ろ手に一つの紙を木箱に置いた。ソフィアはそれを受

け取ろうと手を伸ばして、途中でその手を止める。

「……いらん」

「わかった」

ソフィアの拒絶の言葉、しかしやや間があつての拒絶に何か思うことがあつたのか、アランは一つ頷いた。そして、彼は何か決心をした表情で、小声で語り始める。

「ここからは僕の独り言だ。」

これから僕は、ロンディニウムで何が起こっているのかを探るつもりだ。君の言っていた某氏のこと、地下の何かのことも調べる」

ソフィアは何も言わない。これは独り言だからだ。アランの決断にソフィアは何も口を挟まないし、彼の行動を制限する気もなかった。

「手始めにウエールズに行くことにしたよ。」

ドラゴンのことについてはグウィネスズに行つて確かめる。ちょうど、鉄道でリヴァプールから近くまで行けるみたいだしね。

某氏のことについては、ちよつと見当は付かないかな」

ドラゴン。イギリスのドラゴンで最も有名なのは、赤い竜だ

ろう。その伝説にはいくつかのバリエーションがあるが、そこには必ず対になる白い竜がいる。果たして、ロンディニウムの地下で見たのはどちらだったのだろうか？

それ以前に、そもそも赤い竜の伝説は基本的にはウエールズの物だ。イングランドのロンディニウムの地下に封印されたという伝説ではなかったはず。アランはここに疑問を持っていた。だから、封印伝説のある地のグウィネスズに向かうのだ。

その上、公爵がこのドラゴンに執着しているのも、よく考えてみればその理由が分かっていない。

「それだけ」

そう最後に呟くと、アランはポケットに手を突っ込んだ。

海風が一阵吹き、客船からボーウという低い汽笛も鳴った。

ソフィアは髪が風で乱れるのを手で押え、それからあらかじめ用意していたものを小さな鞆から取り出し、木箱の上に置く。

「ここに一つ、物を落としていく。これをどう扱うかは勝手だ」

それは、かつて密輸船を悪魔に襲わせたときに手に入れた暗号文だった。これには魔術的な暗号化がなされており、ソフィアでは手出しができないものだった。彼女はそれをここに置いていくことにした。

「それじゃあ、私はもう行く。」

……死ぬなよ」

ソフィアはそれだけを言っただけでその場から立ち去る。アランは木箱に置かれたものの上に腰かけると、客船が人々を収容し、ゆつくりと埠頭から離れていき、やがて水平線の向こうへと消えていくまでを見守った。

「僕が来るって解ってたんじゃないか」

アランはそう呟いて、それから、「ああ、来なかったら僕を認める気はなかったんだな」と一人納得した。

外洋をこの時代では考えられないほどの速度で進む客船、ブリタニアの一等客室でソフィアは一人本を読んでいた。外にはまだグレートブリテン島が見えていたが、これはそのうち見えなくなるだろう。

ソフィアが読書を楽しんでいると、客室の扉がノックされる。入室の許可を出せば、入ってくるのはアスタロト。当然だ。彼をロンドンイニウムから引きはがすための出張なのだから。

そして、そんなアスタロトは部屋に入ってくるなり、ムと眉を顰める。

「客室に置いてあったんだ」

ソフィアは手元の本を閉じる。それは聖書だった。悪魔のアスタロトから見れば不愉快なその本を、ソフィアは備え付けの机の中にしてしまう。

「で、何の用だ？」

「お食事の用意が出来ました」

「そうか」

ソフィアは立ち上がり、そして一瞬だけ聖書のある棚へ目を向け――

|
(悪魔でありサタンである竜、か)
少し笑った。

第二章

勇気を出して、貴女に話しかけた

ソールズベリー女学校の敷地は様々な棟があるためにとっても広く、その中にある大講堂もまた広かった。

大学によく慣れてきたといったところの、とある亜麻色の髪を持つ新入生は、途中で道に迷ってしまったために大講堂の後ろの方の席に座ることになってしまったが、その生徒はこんなこともあるうかと用意していた使い古しのオペラグラスで講堂の中心を見るこ
とができていた。

そこでは一人の女性が黒板に文字を書きながら声を上げていた。

金色の長い髪を後ろで一本に纏めて、白衣を着たその女性の声はよく通っていた。それはこの大講堂にいる全員が静かに彼女の授業を聞いていたことの証左であり、彼女の声が不思議と響くものであったからだ。

そして、その女性は数式と解説を書ききると、ゆっくり振り返る。

眼鏡をかけたその女性の名前はソフィア・ロングフェロー。若くして多岐にわたる分野で活躍する、このソールズベリー女学校で最も有名な博士のうちの一人。

彼女は理知的ながらも柔らかな雰囲気をもとっていて、ゆっくりとチョークを何も置かれていない教壇に置く。

「——以上。これで無限小を厳密に考えることが出来ます。

そして、これにより、微分積分学の講義を終わります」

ソフィアのその言葉に、講義を聞く生徒たちは黒板の文字列を理解しようとして首を傾げたり、せめて講義内容だけでも写し取ろうとノートにペンを走らせる。中には納得顔で頷いたり、豊かな髭を蓄えた明らかに堅気ではない男が腕を組んで笑っていたりもしたが、それはそれ、である。

その亜麻色の髪を持つ生徒は、納得顔で頷いたうちの一人だった。

「微分積分学を理解することは、今日の数学の土台の一つを理解する

という事でもありません。授業内容をしっかりと復習して、その土台を堅牢なものにすることを期待します」

ソフィアはポケットから懐中時計を取り出し時間を確認する。授業終了の直前、完璧なタイムキープだった。すごい。彼女は顔を上げると、大講堂に集まる全員を見渡し、生徒たちの注目を集めるように手を一つ叩く。

「さて、これで全五回の集中講義が終わりましたが。それらの講義内容、特に今日の分を理解できたと自負する者、手を挙げて。

……よろしい」

講堂にいる人間の内、1割にも満たない数の手が上がる。その一割には、先ほどまで使っていたオペラグラスを仕舞った生徒もいた。その数と生徒を見渡したソフィアは、ゆっくりと頷いて、それから口を開く。

「極限の講義を最後に持ってきたのは、このイプシロン—デルタ論法がごく最近に学会で承認を得た物で、かつ、理解が難しいからです。そして、これが理解できないからと言って、微分積分と言うツールを全く使えないと自信を無くす必要はありません。

また、講義を聞いただけで理解できるものは、今見た様にほとんどいません。故に、しっかりと復習をし、時には友人と議論をし、理解を少しずつ深めていってください」

ソフィアがそう言い切った時、ちょうど授業終了の鐘が鳴る。

「はい！講義は終了！皆、次の予定に遅れないように！」

ソフィアがそう手をパンパンと叩くと、大講堂にがやがやと言う喧騒が戻ってくる。そして、おおよその生徒が大講堂を出ていく準備を始めるが、ソフィアは教卓に手をついて立ったままだった。

一方、大きな肩掛けカバンにオペラグラス他、荷物を全部突っ込んだ生徒は、ソフィアが帰ってしまう前に大講堂を降りていく。ソフィアにも彼女が見えていたのか、体をそちらの方へと向けた。

二人が並べば、お互いの歳はそう離れていないように見えたし、ソフィアは大講堂の席から見えた印象よりも背がかなり高かった。

「こんにちは。質問ですか？」

「こんにちは、先生。質問ではないのですが、よろしいですか？」

生徒のその言葉に、ソフィアは首を振る。

「他生徒からの質問があるかもしれないので、少し待っていてください」

ソフィアがしばらく待つて、大講堂の人間が誰もこちらに来ないことを確認すると、改めて向かい合う。

「場所を変えましょうか」

「はいー」

生徒はキラキラとした目でソフィアの言葉に頷く。そして、大講堂の出口に向かいがてら、ソフィアは自己紹介を始める。

「知っていると思いますが、私の名前はソフィア・ロングフェロー。貴族ではありませんが、学内では気にしなくて結構ですよ」

「申し遅れました。私は、シャーロット。シャーロット・ホームズと言います。ロングフェロー先生とぜひお話をしてみたくて――、先生？」

ソフィアは目の前の生徒の、シャーロット・ホームズという名前を聞いて、驚いたように目を丸くさせた。それに首をかしげるのはシャーロットで、ソフィアは小さく頷くとともに目の前の生徒のことを下から上に視線を動かして観察する。

正直質のいい服と防寒着コートを着てはいなかったが、よく手入れされていたし、彼女の短く切りそろえた亜麻色の髪は艶やかで、身だしなみはできる範囲で整えているようだった。

疑問を浮かべる濃い碧眼を持つ瞳もはつきりとしていて、全体的に可愛らしい雰囲気をもとっていた。

「いえ、何でもありません。君がシャーロット・ホームズさんですか」「えっ?」

次に驚いたのはシャーロットだった。彼女は自分のことが尊敬している人に知られているとは、もしや何か悪いことをしてしまったたであろうか、とまだ短い大学生生活を高速で思い返す。

しかし、その焦った表情を見てソフィアはくすくすと笑い、シャーロットの肩を叩く。

「主席合格者と聞いていますよ」

「えっ、あつ！ありがとうございますー！」

「君自身の頑張りなのですから、お礼を言う必要はありませんよ。胸を張ってください」

ソフィアの言葉にシャーロットは照れながら、大講堂の扉を押し開ける。すると、ぴゅうつと冷たい風が、外から大講堂へと入ってきて、二人の服や髪を乱す。

イギリスの大学の入学時期は9月である。そのため、新入生が大学生活に慣れ始めた時期となると、冬真っ只中になるのだ。

その吹き込む風にソフィアはブルリと体を震わせると、大講堂を出るなり早足に歩き始める。足のコンパスの差でシャーロットが慌てて小走りになると、ソフィアは白衣の前を寄せながら大講堂近くの学内カフェへと視線を向ける。

「将来有望な生徒にはココアとチョコを進呈しましょう」

「いいんですか!？」

シャーロットは花が開いたかのように笑顔になると、小走りがわずかにスキップのようになる。そんなシャーロットの様子にソフィアが微笑み、二人はやがて一面がガラス張りなのが特徴のカフェの中へと入っていく。

カフェの中は暖かく、そしてがやがやとしていた。ほとんどが女性なのだが、教授陣や、一部の聴講生の男性もわずかに見えた。中には、黒人をはじめとした有色人種もいて、客層はこの大学の特徴をよく表していた。

「ココアを二人分、チョコレートを三人分でお願いします」

ソフィアはカウンターでそれだけ注文をすると、さっさと席につき、その対面にシャーロットを座らせる。

「三人分ですか？」

「少ないですよ。少しね」

「ああ、そうなんですか」

二人しかいないのに三人分の注文をしたソフィアに疑問を投げかけたシャーロットは、ソフィアのその少し不満げな表情での回答に、

口元を押さえて小さく笑う。

「可愛らしい人なんですね」

「……口説いているのですか?」

「いいえ?」

シャーロットが楽しそうに言うのに、ソフィアが少し鼻白む。しかし、シャーロットは自覚がないのか首を傾げるばかりだった。そんな彼女に、ソフィアは一つ咳払いをすると一面のガラス窓から外を見る。

高さも幅も大きく、透明なガラスの向こうには、冬らしく曇った空と、落葉した木々、そしてその下に黄色く小さな花が生えていた。行き交う女生徒たちはそんな景色を見る暇もないほど忙しそうに、何より楽しそうに歩いていた。

「デイジーですね」

シャーロットもソフィアに釣られて外を見ていたのか、声をあげる。それにソフィアが首を傾げると、彼女はソフィアと目を合わせて外へと指を向けた。

「あの小さな黄色い花です。ナラの木の下あたりにあります。」

冬でも頑張っているんですね。綺麗です」

シャーロットが微笑みながらそういえば、ソフィアもその黄色い花を見る。ソフィアもデイジーを見つけたのを確認したシャーロットは、自分もまたデイジーへと目を向ける。

そして、嬉しそうに口を開く。

「私、デイジーが一番好きな花なんです。それを貴女と見れるなんて、今日はいいい日です」

「……そうですね。私も、中々悪くない気分です」

一方のソフィアはわずかに言葉を途切れさせながらシャーロットに言葉を返した。

そうして、二人がそのデイジーをしばらく眺めていると、ウエイトレスがやってきてテーブルにココアとチョコレートを置く。

ソフィアは目の前に置かれた二人分のチョコレートの盛り合わせから、いくつかを取り分けると、それをシャーロットの皿に移した。

「少し差し上げます」

「あ、ありがとうございます」

シャーロットが一瞬戸惑うも、すぐに嬉しそうに笑顔になる。そして、チョコレートを一つとると、それを口に運び、さらに幸せそうに顔を綻ばせる。ソフィアはそんなシャーロットの表情をしばらく眺め、口角をわずかに上げると、彼女に気付かれないように小さくため息をつき、ココアを一口飲むのだった。

「甘い」

ソフィアがそう言うと、シャーロットはチョコを飲み込み、目を細めて晴れやかな笑顔を見せるのだった。

「美味しいですー!」

王女殿下

冬が終わり春の季節になると、雪も解け気温も上がっていく。そしてイギリスは高緯度地域であるがゆえに、春とは言ってもソールズベリーの最高気温は15度にも満たない。その分、夏の一番暑い時期でも22度前後が平均最高気温と、過ごしやすいのだが。

そんな春真っ盛りのソールズベリー女学校を、一人の生徒と教授が歩いていた。

「暖かくなってきましたね」

「そうですね」

亜麻色の髪を春の暖かい風になびかせながら、隣のアカデミックドレスを着る教授に話しかけたのはシャーロット。しかし、裏地を少し分厚くしたドレスを着ていたソフィアは不満げな顔で襟に首を少し擦りつけながら応える。

そんな彼女のことを見ると、シャーロットはどうしても口角が緩んでしまう。この2、3か月の付き合いでソフィアが寒がりだという事を、彼女は理解し始めていた。

実際に「寒いのが苦手」などとはソフィアは言わないのだが、知り合ってからよく彼女と一緒に居るシャーロットから見ると、彼女が寒がりなのは仕草によく表れていた。

暖炉の近くに陣取っているのはよく見た光景ではあるし、曇りや風の強い日は建物から出ずに人を遣うようになり、それでもどうしても外に出ないといけない時は相当早足になったり。

シャーロットはそんな彼女がよく飲むココアのご相伴にあずかることが出来ていて、うぬぼれを差し引いても彼女にとっても気に入られていると感じていた。

流石にバスという隣の隣街まで温泉に入りに行こうと誘われた時は断ったが。

そして、今日もソフィアはココアを飲みにかフェへと向かい、シャーロットはそんな彼女の隣であれこれ質問したり、最新研究に対する自分の所感を述べていた。

「相変わらず、君の考察は鋭いですね」

ソフィアはシャーロットとの議論がひと段落つくと、素直にそう言う。ソフィアに褒められたシャーロットは短い髪をかきながら、照れた表情で首を振り、最初出会った時よりかは幾分か砕けた口調で言葉を返す。

「いえ、ボクはまだまだですよ」

「そんなことはありません。私が君の年のころは……、何でもありません。忘れてください」

ソフィアはシャーロットの謙遜に良くある常套句で返そうとするが、シャーロットの今の歳になる前から色々やってたことをすぐに思い出し、失言だとすぐに悟る。

あちやあ、と額に手を当てて首を振ると、シャーロットはくすくすと笑う。

「うかつでしたね、先生。私の年のころには飛び級していましたね」

「そうですね」

ソフィアはため息をつきながら、いつもの一面がガラス張りになっているカフェの扉を開ける。最近暖房も切られてしまっていて、ソフィアにとっては少し肌寒い室温だった。

カフェの中はいつも通り平和で、二人はいつものように2人分のコアと3人分のチョコレート頼む。最近ソフィアがシャーロットにチョコを少し分けてあげるのも常態化しており、その様子をよく見ていた店員は最初から一人分と少しの量のチョコを皿へ盛りつけていた。

そして、二人が良い雰囲気でお茶を楽しみながら、全く可愛くない内容の話をしていると、突如カフェの外から窓に一人の女性が張り付く光景が。

張り付くと言っても、照り返しを遮るために手を傘にした程度なのだが、あまり見られない行動ではあった。すると、その女性はカッと目を見開き、ソフィアとシャーロットのテーブルを睨みつけ、下品にならない程度の駆け足でカフェの入り口の方へと走っていく。

ソフィアはそんな女性がいたことに気が付いていなかったものの、

気付いていたシャーロットは実に嫌な予感をさせながらココアをすすする。

やがてすぐに、窓に張り付いた女性がカフェへと入ってきて、二人のいるテーブルへと歩いてくる。

その歩き方は背筋が伸び、威厳があつた。服装も華美なものではなく、大学と言う場にそつた物だが、いたるところに細かいレースがあらわれ、明らかに高級なものだった。

そんな彼女は黒い髪を束ねていて、その束ね方も恐らく使用人にやつてもらつたのだろうと見当がついた。

「ソフィア・ロングフェロー様！ やつと見つけましたわ！」

「ええと？」

そんな女性に突然話しかけられたソフィアはほんの一瞬迷惑そうな顔をするが、すぐに笑顔を作つてその女性に対応しようとし、ピタツと固まる。そして、彼女は慌てて立ち上がるようにするが、それを目の前の女性が手でいさめる。

「いえ！ お待ちになつて！ 私からご挨拶いたします。」

私の名前はアレクサン——……」

アレクサンと名乗りかけた女性にソフィアは冷や汗をかき、周りの一部の紳士淑女も何人かが顔を引きつらせていた。一方の、ソフィアの向かいに座る、シャーロットは何が何やらと言う表情だった。

「シャーロットですわ！ そうしましょう！」

（ああ、アラン、私がダンと適当に名乗つた時、君はこういう気分だったんだな）

ソフィアは今度こそ立ち上がろうとして、それを立っている方のシャーロットはまたも咎める。それに、ソフィアは内心ため息をつき、座つたまま仮称シャーロットを見上げて挨拶をすることにした。

「そのまま結構ですわ、ロングフェロー様。私は、今はただのシャーロット。ええ、ただのシャーロットですから」

「そうですか……。では、このままで失礼して。私の名前は、ソフィア・ロングフェロー。マームズベリー侯、ジョージの一人娘です」

ソフィアはそう名乗ると、段々事態が飲み込めてきたらしいシャー

ロットに視線を向けて発言を促す。シャーロットは恐らくソフィアよりも身分が高いと推察される女性に失礼の無いように立ち上がり、不器用なカーテシーをする。

「シャーロット様、初めまして。私もシャーロットと言う名前です。シャーロット・ホームズと言います」

「まあー」

仮称シャーロット、アレクサン何某は名前が目の前の平民と被ってしまったことに大層驚いたという表情をし、それからそのシャーロットと今まさにお茶をしていたらしいソフィアに視線を向けた。

「ところで、つかぬことをお伺いいたしますが、ロングフェロー様。彼女とのご関係は？」

「教え子です」

「まあ！まあまああ……」

アレクサン何某は口元を手で押さえ、僅かに嫉妬の炎をまとわせた瞳でシャーロットのことを視線で射貫く。

「勝負ですわ。シャーロットさん」

「え？」

「私だって、ロングフェロー様に色々教わりたいのです！」

「皆等しく生徒で、教え子ですよ」

アレクサン何某がそんなわがままを言い始めると、ソフィアは笑顔のまま応対する。因みに本名シャーロットはそんな笑顔のソフィアを見ながら、めんどくさがってる顔だなと当たりを付けていた。

「等しい教え子なんて嘘ですわ。ただの教え子にチョコレートに分けるものですか」

鋭く反論したアレクサン何某に、ソフィアは笑顔のまま言葉に詰まる。そして、凶星だったので何も反論はせず、彼女が言う勝負を用意するかとすぐに思考を切り替えた。

ソフィアはあたりを見渡し、野次馬がこちらを見ているのに辟易する。

「では、こうしましょう」

ある物を見つけた彼女がそう言いながら立ち上がると、事態を見

守っていた別のテーブルに行き、そこに座っていた生徒に「そのチェス盤を貸して欲しい」と頼む。すると、すぐに「構いません」と返され、また彼女は別のテーブルへと足を運ぶ。次に貸してもらったのは、ドミノだった。

それは、今日、日本でよく見る倒すだけのドミノではなく、1〜6までの数字が書かれた牌としての役割もある物だった。

ソフィアはその二つの玩具を持って帰ってきて、テーブルの上でその二つを置く。

「では、この8×8のチェス盤の上にドミノを敷き詰めてください。

ルールは二つ。斜めに置かないこと、ドミノの数字の書かれた正方形とチェス盤のマスを一致させること。つまり、チェス盤のマス二つでドミノが一個ですね。

それだけです」

「そんなの、簡単ですわ」

アレクサン何某は容易いことだと微笑み、ドミノをチェス盤に並べていく。その間にソフィアはカフエを巡って、同じものを用意し、それをシャーロットの目の前に置く。

「できましたわ」

「お見事。では、シャーロット・ホームズ君。

この、白のキングをチェス盤の角の白マスに置いた場合、ドミノはチェス盤に敷き詰められますか？」

ソフィアは言葉の通りにチェス盤の角にあらかじめ白のキングを置き、ドミノをシャーロットに手渡す。すると、シャーロットはすぐに、首を振って答えた。

「不可能です、先生。ドミノを置くルール上、敷き詰められるマスの数は必ず偶数です。

キングで一マス埋まっていると、マスの数は63マス。奇数となります」

「よろしい。では、ええと、ただのシャーロット様、何かご反論は？」
ソフィアはどう呼びかければいいか困りながら、黒髪のシャーロットに問いかける。彼女も、亜麻色の髪のシャーロットと同意見だった

ようで、首をすぐに振った。

その二人の正しい回答を聞いたソフィアは、その白のキングの対角線に、黒のキングを置く。加えて、アレクサン何某のチェス盤にも、黒のキングを角の黒マスに置き、その対角線に同じように白のキングを置く。

「はい。盤上は正しく偶数の62マス。

このチェス盤に、ドミノは敷き詰められますか？」

「?できるんじゃない?」

アレクサン何某はパチパチとドミノを敷き詰め始め、同じようにシャーロットもドミノを敷き詰めていく。すると、アレクサン何某のマスには3マスの空きが、シャーロットのマスにも2マスの空きが存在した。

ソフィアはそれを確認すると一つ頷き、顔をあげて二人に交互に視線を向け、口を開いた。

「できるなら、私にそれを見せてください。

できないなら、その理由を私に聞かせてください」

もはや、カフェの中の全ての視線が二つのチェス盤へと注ぎ込まれていた。カフェはしんと静まり、やがて、視線の中心の二人の邪魔にならない程度に議論が巻き起こり始める。

そして、実際の盤面が渡されている二人は真剣な顔でドミノの敷き詰め方を変えたりし始めるが、どうしても残りの2マスが埋まらない。

ソフィアはそんな二人の顔を見て、時間がかかりそうか、とぬるくなったココアを一気に飲み干すと、カフェのカウンターへと足を延ばそうとする。

すると、アレクサン何某のボードを眺めていたシャーロットが目を見開く。

「あッ!」

そして、小さく声をあげ、ソフィアの顔を見る。ソフィアはココアの替えを貰おうとしていた体勢を翻し、彼女へと向かい合い、心の底から賞賛の微笑みを浮かべる。

「その気付きはきつと正解です」

「ええっ!!」

ソフィアの正解宣言に、次はアレクサン何某が声をあげる。周りの野次馬達も顔を見合わせ、シャーロットのことを見つめていた。

そして、ソフィアは愕然とした表情の、アレクサン何某へと向かい、軽く頭を下げる。

「さて、殿下。お戯れはほどほどにしてくださいますか?」

「……殿下はよしてください」

殿下と呼ばれたアレクサン何某、本名を、アレクサンドラ・ヴィクトリカという、この世界における王位継承権保有者は、ため息を大きくつく。

「私は、試験を行って正式にこの大学に入りました。そして、構内では身分関係なく他者と接することも了承しています。

ゆえに、今の私は……この問題も解けないただの小娘ですわ」

アレクサンドラはドミノを弄りながら、やはり2マス埋まらないと首を傾げる。そして、ただの小娘発言をした彼女に、ソフィアはさつと札をやめ、すぐに教師の顔になる。

「そうですね。なら、シャーロット君、解説を」

話を振られたシャーロットは目を丸くさせ、無茶ぶりをするソフィアと隣で眉を下げるやんごとなきお方を交互に見る。そして、助けを求めようにあたりを見るが、野次馬達はすぐに目を逸らす。

事ここに至っては、腹をくくらないといけないかと、シャーロットは息と共に色々な物を飲み込んだ。

「では、僭越ながら——」

「普通で構いません」

「……はい。では、殿下、私の敷き詰められた盤面と、貴女の敷き詰められた盤面、この二つにはある特徴があります」

アレクサンドラは二つのチェス場に目を落とす。そこには必ず2つのマスが空いていて、よくよく思い返せばそのマスは必ず同じ色だった。

「同じ色?なのに、私の物と、あなたの物とは違う……」

「そう。私のボードは必ず黒マスが空き、貴女のボードは必ず白マスが空きます。そして、私のボードに置かれたキングのマスは共に白、一方で」

「私のキングのマスは黒」

チェス盤の対角線は必ず同じ色である。白マスの対角は必ず白で、逆もまた然り。シャーロットに促されたアレクサンドラはその事実を踏まえて、思考を巡らせる。

そして、最初にソフィアが提示した『チェス盤のマス二つでドミノが一個』というルール、いやヒントを思い出した。

「白と黒は必ず隣り合う。つまり——」

アレクサンドラは閃いたという表情の顔をあげて、頷くシャーロットと目を合わせる。

「ドミノは白と黒、その二つのマスを必ず使わなければ置けません」

「なのに黒マスは最初から2つ足りない！だからあぶれたペアの白マスが必ず2つ空いてしまう！」

アレクサンドラは手を叩き、そして、シャーロットの手を取って飛び上がる。

「わかりました！わかりましたわ！」

やんごとなき身分の方がスカートでぴよんぴよん飛び跳ね無邪気に笑うのに、シャーロットは引きつった表情になる。

そんな二人にこやかな表情で拍手を送るソフィアだったが、その内心は余り穏やかではなかった。

(ゲーム内では本編が始まってからしばらくして出会い、意気投合する二人だったのだが……)

「ねえ、シャーロット、私、あなたのことが気に入ったわ！お友達になりましょう！」

「えっ!？」

シャーロットがソフィアの方を向いて助けを求めるが、ソフィアのそれにもにこやかに頷くだけ。なんなら、本編でも友達になるんだからそういう運命だ諦めろ、とすら思っていた。

「ええっとお……」

はい、なりませうか」

あまりに身分が違い過ぎると一瞬シャーロットは葛藤したが、自分の中で折り合いを付ければ決断ができる彼女、少し躊躇はしたがしっかりとアレクサンドラと目を合わせて頷いた。

それに喜色満面、春の訪れを喜ぶ花のような笑顔を作ったアレクサンドラは、初めての同年代の友達にハグをした。

「ありがとう！」

(こうしてみると、アレクサンドラも普通の女の子だなあ)

ソフィアは拍手を続けながら少し失礼なことを想い、シャーロットはどうにでもなれと半ばあきらめた表情でハグを返す。

そして、ハグをやめたアレクサンドラは思案顔になる。

「ええつと、じゃあ、ジョージアナ……。いや、それだとロングフェロー様のお父様と被ってしまうわね……」

数秒むむむと考えると、アレクサンドラは手を叩く。

「決めました！ 私の名前はオーガスタですわ！」

よろしくお願いします。シャーロットさん！」

「こちらこそ、よろしく願います。オーガスタ様」

「様はいりません！」

「……オーガスタ」

「はい！」

そうして、片方は笑顔、片方は疲れた表情の二人はしっかりと握手を交わしたのだった。

ソフィアは終始笑顔で、二人が握手をやめてこちらを見てきた瞬間に、ポケットから懐中時計を取り出す。そして、アレクサンドラ改め、オーガスタに、もう先生と生徒と割り切った態度で声をかけた。

「次の予定の時間が来てしまいました。お二人はごゆっくりどうぞ。」

オーガスタ君、次はゆっくり話しましょう」

「あら、そうでしたの。お忙しい身ですものね。」

さ、シャーロットさん。ティータイムとしましょう！」

シャーロットはどうしたものかと困った表情でオーガスタに連れていかれ、一方のソフィアはチェス盤とドミノを元の持ち主に返却し

てからカフェを出る。

カフェを出た瞬間、冷たい風に吹かれたが、彼女は真剣な表情のまま構内を散歩し始める。

(いったいなぜ、アレクサンドラがここにいる?)

王室で何かが起こっているのか?

確かに、シャーロットとアレクサンドラが仲良くなるのは本編同様だ。だが、そのタイミングが早すぎる)

ソフィアは、こういった疑問にぶち当たった時は、比較検討するのが良いと知っていた。故に、本編の流れと今現在の流れとを比較する。

ややあって、彼女は自身が席を置く研究室のある建屋のはるか手前で立ち止まり、振り返る様にながら大学を見渡す。

(ソールズベリー女学校。この学校がタイミングを狂わせたのか。

アレクサンドラは好奇心旺盛だ。大学に入りたいとわがままをこねた可能性が高い。

多少はストリーが狂うと思ってたが、ここまで狂うか)

ソフィアはポケットに手をつ込みながら、大学のランドマークである時計台の文字盤を見上げ、ポケットの中の手に当たった硬質な物、懐中時計を握りしめた。

(色々確かめなければならぬか)

彼女は一つの決心をすると、懐中時計を取り出して時間を確認し、次の予定に遅れないように足早に研究室へと向かうのだった。

再会

ソフィアは屋敷の全く使われていなかった部屋でサンドバッグを殴っていた。

侯爵らしくとても広い屋敷だったので、その使われていなかった部屋も同様に広く、その場所に目を付けたソフィアの手によって今では様々な機材が置かれたトレーニングルームと化していた。

機材を設計してまでトレーニングルームを作ったソフィアは、上半身にいわゆるスポーツブラのようなタイトな下着だけを付けていて、下半身はウール材のこれまたタイトな物を履いていた。

そんな、この時代の女性からしたら考えられないような格好で、コンパクトな右フックでサンドバッグを殴り、ぎりぎりと言を鳴らしながらそれを揺らす。そして振り子のように揺れ始めたサンドバッグに左のジャブを打ち、それからもう一度右から強打を放った。

バスンツとサンドバッグを鳴らすと、鍛え抜かれた筋肉質な体から汗が飛び散り、ソフィアは力を籠めるために止めていた息を吐きながら揺れるサンドバッグを手で止める。

「お嬢様」

そんな彼女に背後から声がかかる。振り返ればそこには、プラチナブロンドの長い髪を持ち、ともすればきつい印象を相手に抱かせるほどに美人な、黒いドレスを着た家政婦ハウスキーパーがいた。とはいっても、その黒いドレスには控えめながらも美しい刺繍が入れられていて、明らかに普通のハウスキーパーには見えなかったが。

「どうした？アリス」

「次の予定の時間が迫っています」

「ああ、もうそんな時間か」

アリスと呼ばれたそのハウスキーパーは、タオルをソフィアに手渡す。彼女は最初はソフィアの代わりとして、そしていつからかは義妹として育てられた4人のうちの一人だった。彼女ももう、20を超え、成熟した女性になっていた。

ソフィアはスポーツブラを外し、手渡されたタオルで体の汗を拭き

始める。その間に、アリスは懸垂器に掛けてあったシャツと仕立ての良いスーツを回収する。ソフィアはこれからアランに数年ぶりに会いに行こうとしていたので、しっかりと男物を用意していたのだ。その格好は包帯男としてのものではなかったが。

そして、アランに会いに行くことを考えるとふと懐かしい気分になり、ソフィアはシャツの袖に手を通しながらアリスに声をかける。

「昔みたいにお姉さま呼びでもいいんだぞ」

その言葉に、アリスは口をへの字に曲げ、呆れた声をあげる。

「お嬢様の年齢の秘密をお教えいただけるのでしたら、今すぐにでも変えますが」

「子供のころは一歳、二歳変われば大人のお姉さんに見えるものさ」

「騙されませんよ」

ソフィアがシャツのボタンを閉じながら何てことのないように言うが、アリスは全く納得していないようだった。彼女の記憶では、物心ついたころにはもうソフィアは今のような姿だったのだ。

かつて、5年を超える外遊から姉が帰ってきた時は自分達とそう年齢が離れていないように思え、実際そのまま一緒に成長していったのだから彼女の言葉は真つ当に思えてしまう。が、やはり幼少期との記憶の齟齬がある。

「君がハウスキーパーになるとはなあ……」

「話をそらさないでください」

シャツを着終わったソフィアがしみじみとそう言うと、アリスはスーツを差し出しながら少し拗ねた口調で言う。対するソフィアはスーツの襟に指を引つ掛け、そのままそれを肩に掛けながら、片眉をあげてアリスに首を傾げる。

どうして、ハウスキーパーなんかに？

と問いかけているようだった。

「養子として育ててもらえた恩がありますから」

「そうか。ベアトみたく自由にして良いんだけどな」

「あの子の真似はできません」

「ははっ、そうか」

ソフィアは少し笑って、アリスの肩を叩いてから部屋を出ていこうとする。しかし、それに待ったをかけたのは振り返ったアリスだった。

「お嬢様。クレアから伝言です」

アリスがポケットから一枚の折りたたまれた紙を取り出すと、ソフィアはそれをひったくるようにして受け取り、そのまま片手でその紙を開く。気になっていたらしいアリスがそれを覗き込もうとすると、ソフィアはその紙と彼女との間に自分の体が入る様にアリスに背を向け、内容を隠してしまう。

（ノックも無しに入るところとか、こうやってじつと後ろで見つめてるところとかが、アリスの妹らしい所ではあるよなあ）

と益体の無いことを考えながら、紙に書かれた数字の羅列とは全く違うことを話し始める。

「ベアトが南アメリカの旅から帰ってくるそうさ。フィールドワークが上手くいったんだと」

「まあー」

アリスは一緒に育った姉妹が帰ってくるのに嬉しそうに笑顔になり、ちらつと後ろを振り返ってそんな彼女の表情を見たソフィアも微笑む。

「よかったな。」

それじゃあ、私は今日は遅くなるから」

ソフィアは紙をぐしゃぐしゃにしながらポケットに突っ込み、今度こそ部屋を出ていく。

彼女の表情は先ほどとは打って変わって、険しいものになっていた。

ロンドンイニウム。名実ともに世界の中心になりつつある街。

世界を席卷する蒸気機関の震源地でもあり、最先端の街。世界の工場とすら評されるほどの工業力で大量の物を輸出し、その代わりに世界中の様々なものが輸入される。

昨今では芸術や文化さえもここから発信され始めていた。

そして、最近では人口流入だけではなく、かつて流入した人間が産んだ子が生粋のロンディニウムっ子として働き始めたこの街を、しっかりとした服装で男装したソフィアが紳士らしくステッキを突きながら歩いていった。

向かう先は銀の輪亭。ここ十年訪ねていない場所だった。だが、ここに銀の輪亭は変わらずにあるだろうとソフィアは確信を持っていた。

果たして久方ぶりにたどり着いたそこには確かに銀の輪亭が存在していて、ソフィアはその扉を開く。

「いらっしやいませ」

「ごきげんよう」

かつて見た時よりもハドソン夫人は歳を重ねていたが、まだまだ若く働き盛りだ、元氣そうに挨拶をする。ソフィアもそれに帽子を軽く上げながら、スマートに挨拶を返す。

そして、ハドソン夫人は突然現れた明らかに身分の高そうな男に、少々委縮しながら口を開く。

「銀の輪亭になんの御用でしょうか？」

「そう、怖がらなくてもよい。少し言付けを頼みたいのだ。サイダーを貰えるかな？」

「少々お待ちを！」

ソフィアはそう言いながら店の中へと進み、カウンターに手袋を置く。一方のハドソン夫人は慌ててカウンターの中に入って、サイダーを用意する。

「いい店ですな」

「もったいないお言葉です。どうぞ」

ソフィアはカウンターに置かれたサイダーを一口飲む。味も鼻に抜ける風味も、ただのサイダーだった。

「このサイダーは自家製ですか？」

「ええ、そうなんですよ。夫が昔ながらの作り方で作っているんです」「そうなのですか」

（昔ながらで、自家製っていうのが重要なんだろうな）

ソフィアは微笑みを浮かべながら、かつてピクシーも楽しんだであろうサイダーの味を楽しみ、それを飲み干してから本題に入ろうとする。だが、カツン、とグラスがカウンターテーブルに置かれたことで音を鳴らし、その音にソフィアはおどけた顔をする。

そして、そのおどけた顔を微笑みに戻し、ソフィアはハドソン夫人に問いかける。

「ここによく、アラン・ホームズと言う方が来ますね？」

「ええ」

「その方に伝言を頼みたいのですが、よろしいでしょうか？」

「それくらいなら、お安い御用ですわ」

ハドソン夫人は自分にまかせてくださいと言わんばかりに胸を叩き、ソフィアはそんな彼女に微笑みながらポケットから封筒を取り出す。

「これを渡してくだされば結構です」

ハドソン夫人はその封筒を両手で受け取るとしつかりと頷く。ソフィアはサイダーの勘定を置き、手袋をはめてからステッキをパブの木の床に軽く打ち付けた。

「では、よろしく願います」

ソフィアはそう柔らかい顔でハドソン夫人に言いながら、退店する。そして、当てもなくロンディニウムを散策し、ここ数年の変化を自らの目で一つずつ確認するのだった。

ロンディニウム散策は昼過ぎから始まり、夕方を越え、やがて夜になる。

やがてやってきたトラファルガー広場の噴水の前、ソフィアはステッキの柄に両手を置きながらそれを眺めていた。この辺りは夜になると人はまばらになる。バッキンガム宮殿やウエストミンスター宮殿の目と鼻の先だからか、怪しい人間はいない。

因みに、この世界ではまだウエストミンスター宮殿は火災で焼け落ちていない。そのため、ビッグベンもまだ存在せず、加えてこのトラファルガー広場には未だネルソン提督像も建っていない。

そんな広場に一人のインバネスコートを着た男が手に封筒を持ち

ながらやってきた。そして、彼、アラン・ホームズは広場の中心に立つ一人の紳士を見つけるとそこへ駆け寄る。

「ダン！」

アランの呼びかけにソフィアは振り返る。アランはしつかりとした服装で包帯もつけていない彼女に一瞬面食らったが、すぐに気を取り直して右手を差し出した。

「久しぶり。元気だった？」

「この通りね。君は少しやせたか」

ソフィアもアランに手を差し出し、二人は固く握手をする。ソフィアの言う通り、アランは少しやせていた。とはいっても、やつれたような雰囲気ではなくどちらかと言えば精悍になったというべきか。

「まあね。いろいろ苦労したんだよ」

「そうか」

「ああ、そうそう。貴方が言っていた電信、あれに投資して結構儲けられたんだ。お礼を言わせて欲しい。本当にありがとう」

「お礼を言われる筋合いはないな」

アランは胸に手を当てて礼をすると、ソフィアはめんどくさそうに鼻を鳴らす。それにアランが困ったように笑うと、真面目な顔になる。

「本当に感謝しているんだ。これでお金を用意できたから、娘を大学に入れられたんだ」

「……そうか」

ソフィアはアランのその発言に、やや間を置いて返す。そして、僅かに沈黙が続く、やがてアランが手に持った伝言の封筒をソフィアに見せる。

「それで、わざわざ呼びつけてどうしたんだい？それも、こんな所に」
「秘密の話をするにはこういう場所がうってつけだ」

ソフィアは人がほとんどいないトラファルガー広場を見渡す。聞き耳を立てようと近付いてきた人間がいるなら、すぐにわかるだろう。アランは『秘密の話』と言う言葉にかけて彼に言った調べ物についてだろうとすぐに予測がついた。

「アラン。いったいどれくらい君は知ることが出来た？」

ソフィアは本題にすぐに入る。アランは少し迷ってから、重々しく口を開いた。

「このロンディニウムの地下にドラゴンが封印されているのはまず間違いないと思う。でも、ウェールズにもまたドラゴンの封印があった。」

多分だけど、赤いドラゴンはウェールズに、もう片方の白いドラゴンはこのロンディニウムに封印されているんじゃないかな」

「なるほど……」

ソフィアは完璧な回答だと心の中で唸る。そして、それは本編と全く同じなのだなどと確証も得ることができた。

ソフィアが何かの確信を得た様子を見抜いたアランは真剣な顔でソフィアのアメジスト色の瞳を射貫く。

「逆に教えて欲しい。かつて、『あまり知り過ぎないほうが良い』って言ったよね。それはどういう意味なんだ？」

そして、これ、これも一体どこで手に入れた？」

アランは懐から一つの冊子を取り出す。それは、ソフィアがかつて手に入れ、外遊する直前にアランに渡したものだだった。

「解読できたのか？」

「一部ね」

「表だったか？地図だったか？」

アランは何も言わない、ソフィアが納得のいく答えを言う前に口を割るつもりはないらしかった、ソフィアはアランの無言の問いかけにステッキをカツンと石畳を打ち鳴らし、口を開いた。

「おぼろげだが、私は事の全体像が見えている。この帝国の体制を揺るがしたい何者かがいるのだろう、とな。そしてそれが、恐らくオルバニ公だろうということも。」

だが、確たる証拠はない。すべては状況証拠だ。

社会全体の流れ、新聞に書かれる言説の傾向、紳士クラブの噂などから予想できるだけのな」

ソフィアはおおよそ真実は知っている。しかし、その知っているこ

とも、それが段々と外れ始めていることも誤魔化し、その代わりに確たる証拠を持っていないことだけは直接的に伝える。

アランは虚実入り混じるそれに言いくるめられたのかは定かではないが、一つ頷く。

「そして、とある密輸船から差し押さえた物の中から、私はそれを見つけた」

「密輸船?」

「アヘンと人身売買のな。少し、調査を依頼されてね」

密輸船を壊滅させたのは誤魔化す一方で、その全滅した密輸船が政府によって秘密裏に調査されたという事実はそれとなくほのめかす。

「だが、どうやってもそれを解読することはできなかった。まあ、密輸船にあつたものだ、帳簿か報告書か、地図だろうと当たりはつけられる」

「何かの表と報告書だと思う。数字と何かが並べて書かれているみたいだ」

アランは持ってきていた冊子を取り出し、解読できた一部をソフィアに伝える。それを聞いたソフィアはステッキの柄から片手を放し、顎にそれを当てて目をつぶって考え始める。

ソフィアが今日確認したかったのは、まさにこの暗号文だったのだ。

(この証拠は本編では存在しなかったものはず。それがここにあるというのがどれだけ影響を及ぼすのだろうか。)

アランの代で解決できるほどに事が進んでしまったりするの?」

「真実は未だ遠い、か……」

ソフィアが考え込み始めると、アランが肩を落とす。しかし、それに待ったをかけたのはソフィアだった。

「一つ。情報を持っている」

「本当?」

「持っているのだが……」

ソフィアはこの先を言うか逡巡し、珍しく齒切れが悪そうな顔になる。アランはそれに不思議そうな顔をし、ソフィアはややあつて今日

アリスから受け取ったクレアからの伝言、ひいてはジョージから受け取った情報が詰まった紙を取り出す。

「はつきり言って、教えたくはないな」

「ダン。頼む、教えて欲しい」

ソフィアは迷う顔でアランの決意に満ちた顔を見る。

（この情報を教えるかどうかという様に事態が進む？もはや予測不能だ）

そして、一つ問いかけることにした。

「なぜ、そこまでする？」

「そんなの、娘のためさ。娘には不自由なく暮らして欲しい。そのためには、こんな一歩間違えればどうなるか分からないことなんて、放っては置けない」

アランは彼女の問いかけに即答し、言い切る。ソフィアはそんなアランの表情を見て、確かにこの目の青い男はシャーロットの父親だと思った。

「そうだな……。うん」

ソフィアは深く頷き、そもそも『教えたくない』と口走った時点で、心の底では教えると決心していたのだろうなと自分を顧みた。

そして、彼女は手元の暗号化された文章を見て、口を開く。

「ヘイスティングス侯爵が怪しい。この10年近く療養中だと発表されているが、公には一切姿を現していない。

戦争、汚職、政争、彼は精力的に動いていたが、それが先ほど話題に上げた密輸船の失敗の時期から段々と散発的になり、やがて止まった。

ヘイスティングス侯爵と密輸船の関係は不明だが、相関がある可能性が高い」

アランはその名前に心当たりがあったのか、俯きながら何事かを考え始める。その間に、ソフィアもこれを見た時から受け続けていた衝撃を思い出す。

（この男は霧の都のマギの悪役、それも終盤の大物の一人だったはずだ。それがまったく活動していない？

あの密輸船は彼の物だった可能性が高くはあるが、その一つの失敗

でここまで鳴りを潜めるものなのか?)

ジョージに調べさせていたのは、ここ最近のヘイスティングス侯爵の動向だった。そして、その回答は『10年公に姿を現しておらず、会った人間も見つけることが出来なかった』だ。

そして、考え込む二人の内、最初に正気に戻ったのはアランだった。アランは解読中の冊子のとあるページを開いて見せる。

「実は、この……、この部分がヘイスティングス侯の名前だと思うんだ」

ソフィアが覗き込めば、そこには『??.、ヘイスティングスが戦争』と書かれていた。その一文以降もいくらか文章はあったようだが、ソフィアはかつて、運び屋から聞いたアヘン畑を軍が接收してきたという話を思い出す。

「別の戦域の可能性もあるが、密輸船の时期的にはインドの地名の可能性が高い」

「インドの?」

「彼はかつてのインド総督だ。相当大立ち回りをしていた」

アランが首を傾げると、ソフィアはそう注釈をつける。そして、もう一つ思い出したことがあったのでそれも付け加える。

「彼は借金を背負っていたはずだ」

「なるほどね」

アランが苦々しい表情を作りながら頷く。そして、ソフィアは彼について知っていることはもうないと、言わんばかりに視線を解読文から上げると、そのまま噴水へと目を向ける。

わずかに揺れる水面には三日月が浮かんでいて、それもぶれるように輪郭をぼやけさせていた。

「アラン。これで君は知り過ぎた。これからどうする?」

「どうって? 変わらないよ」

ソフィアは当然のように言い切ったアランのことを見て、彼と同じ髪色を持つシャーロットのことを思い出す。

「これ以上踏み込めば死ぬ可能性があるぞ」

「死にそうに見える?」

アランが冗談めかしながら両手をあげて、自身の体を見る。ソフィアはそのスーツがシャーロットにピッタリのサイズだと改めて思いながら、ため息をつく。

「見える」

その一言にアランは少しムツとして、ソフィアの胸に指を突き付ける。

「そういう貴方はどうなんだ？このヘイスティングス候を疑って、調べたのだから結構危険だろう？」

もつと危ない橋を渡ってるよ、とは言わず、ソフィアは目を細めるだけに留まる。

「貴方だって、僕と同じだ。子供がいるんだろ？」

暗に子供のためでもあるんだろうと、アランが問いかけてくるが、それにはソフィアは首を振る。

「私は私のために事態を追及している」

「どうやってさ」

ソフィアはアランのそのちよつとした尋問の言葉にあえて乗っかってやることにする。

「発生するだろう事態を逆手に取るだけだ。危険は冒さない」

ソフィアとて、遊んでいるわけではない。来たるアスタロトの排除のために少しずつ動いているのだ。それ以上に、最終的に自分が勝つために、布石を打ち続けている。

アランはソフィアが正直に自らの行動を言ったことに驚いた表情をする。

そんなアランの呆けた顔にソフィアは少し笑うと、彼の肩を叩く。

「気を付けろ。娘を悲しませるな」

「う、うん」

アランの首肯に満足そうに頷いたソフィアは踵を返す。その途中、ちらつと噴水を見て、そこに映る雲に半分隠れた三日月を見た。

「それじゃあな。また会えるのを楽しみにしている」

「貴方も気を付けて。それじゃあ、またどこかで」

ソフィアはアランの言葉に片手をあげて応えようと、ステッキを肩に

掛けながら彼と永遠になる別れをしたのだった。

日常

19世紀の娯楽はそうは多くない。とはいっても、現代と比べてであり、金があるところには相応の娯楽が数多くあった。

中でも賭け事、ギャンブルはその娯楽の中で特に大きな勢力を持っていた。

カード、競馬、クリケットやボウリングなどなど、様々なもので勝敗を予想して少なくない金を賭けるのだ。

そして、古くからの街であるソールズベリーにも、ご多分に漏れずそれなりの競馬場が存在した。1マイルの直線からヘアピンのような折り返しがあり、その直線へとすぐ戻るといふ形のレース場だ。

晴天のこの日、ソフィアはアリスを従者として伴い、その競馬場へ他の街からやってきた大勢の貴族を案内していた。とはいっても案内した後、あいさつ回りをすればすぐに個室に引っ込んだのだが。

「いやあーすごいですね！ボク、競馬を見るのは初めてです！」

そう言つて、パドックを歩く馬を見てキラキラとした表情で目を輝かせるのは、一等良いドレスに身を包んだシャーロット。ソフィアが社会勉強にと彼女を誘ったのだ。そうしたら、着ていく服がないと言つたので、ソフィアは彼女のことを思う存分着飾らせた。

二人が出会つて一年と半年が過ぎ、二人はもうずいぶんと気心が知れた仲になっていた。

「賭けますか？」

「いえ、それは止めておきます。こういうのはやらないというのが、父との約束なので」

「そうですか」

ソフィアはアランはよく彼女のことを教育しているのだなと感心し、しかし、シャーロットは困った顔をしながら手元の財布に目を落とす。

それはシャーロットが持つには不相応なほどに高級そうなもので、実際それは彼女の物ではなく、オーガスタの物だった。

「オーガスタは結局来れなさそうですかね」

「レポートが未提出な人間にかけてあげる慈悲はありません」

「あはは……。あの人は悪魔ですわ！つて言っていましたよ、彼女」

シャーロットの声真似に、ソフィアはふんと鼻を鳴らしてオーガスタの言葉を一笑に付す。悪魔と言うのは当たらずも遠からずだが、悪魔でなくとも自分が面倒を見ている生徒が課題をクリアしないままそれを放り出すのを看過することはできなかった。

ソフィアのその態度にシャーロットは、この人は時々こういうたぞんぎいな仕草をするよなあと、あまり良家のお嬢様らしくないその所作にわずかに引っかけかりを覚えていた。

「彼女曰く。このレースは3番が勝つ！だから賭けておいて！とのことですが……」

「何か問題が？」

「ボクには勝つようには見えません」

シャーロットは真剣な表情でパドックを回る馬を見る。彼女のその言葉にソフィアは後ろに座るアリスに振り返って、「双眼鏡を」と言つてそれを受け取る。そして、スタンドのある個室からは小さくしか見えていなかった馬を観察し始める。

3番の馬は栗毛で、筋肉がよく発達していて、落ち着いた雰囲気だ。
(うゝん。わからん)

ソフィアはしばらく観察していたが、他馬との違いが何も分からず、小さく唸りながら双眼鏡を覗くのをやめ、それを隣のシャーロットに手渡す。

「ありがとうございます」

シャーロットは律義にお礼を言つて、双眼鏡を覗き始める。そして、一通り馬を見るだけで、特に観察もすることはせず。すぐにそれを下ろした。

「うん……。うん。駄目そうですね。強い馬だとは思いますが」

ソフィアはアリスが差し出してきた競馬新聞を開き、その中に書かれた調教の状況や体重、今までの競争成績などをざっと洗う。とはいっても、今まで競馬にはほとんど触れてこなかったので、ちっともわかりはしなかった。

「わかりませんね。どうしてそう言い切れるのですか？経験があたりで？」

「え？いや、そういう事ではないんですけど……」

ソフィアの問いかけに、シャーロットは少し焦った表情で頬をかいた。その表情からは適当な言い訳を考えているのがあるにわかった。

「直感。ですかね」

その言葉にソフィアは小さくため息をつく。いつもの教師と生徒との関係なら、論理的にちゃんと言語化しなさいと言う所だが、今日はプライベートだ。そう言った追求はしないことにした。

「そうですか」

「ちゃんと言語化しなさいって言わないんですか？」

しかし、シャーロットが首を傾げてそんなことを言ってくるので、ソフィアは肩を落としながら首を振る。

「競馬には全く興味がありませんからね。説明をされても解りません」

「そうなんですか？ボクを誘うくらいですからつきり詳しいのかと」

「いいえ。父に競馬場をちゃんと整備しましょうと言った手前、大レースの時は見に来ているだけで、殆ど付き合いのようなものです」

そう言いながらソフィアはこの競馬場と周辺の土地を買い取った時のことや、これを機に勉強をしてみるかと各地の牧場を巡ったことを思い出す。しかし、あまりいい思い出ではなかった。

「それに、白馬だ珍しい、とすこし嬉しくなって買ってみたら、葦毛だつて言われるくらいですよ。私は。」

父はオルコックアラビアンの直系は掘り出し物だと唸っていました

「へえ、ソフィアさんも失敗することがあるんですね」

ソフィアは競馬事業を始めようとした時、やけにジョージが喜んだことを思い出す。曰く、『このレース場は彼のエクリプスも走ったコースなんですよ！』らしい。他にも『コースを変えるなんてとんで』

もない!』『牝馬を、買います』と妙に圧があった。

あまりの圧にソフィアもアスタロトでさえも押されて、結局は彼にほとんど任せることになったほどだ。だからこそ全く詳しくないままここまでできてしまっているのだが。

「まあ、レースは見ていて楽しいですよ。個人的には短距離走が好きです」

「楽しみです」

今日は一本のレースだけではなく、何本も距離を変えたレースを催し、一日中競馬場でギャンブルを楽しむことができる日だ。今年でキリの良い5回目となるこのレース群は賞金も当時としてはとんでもない額を出していて、その上それぞれの馬の調教度合いや陣営のインタビューまでも収集し、それを競馬新聞として大々的に市民にもプロモーションをしていた。

あくまで貴族の催し物で娯楽だったものを、市民にまで浸透させようとメディアを最大限駆使するよう指示を出したのはソフィアだ。

それにはいくつかの意図があつたが、その内のいくつかは早速成就していた。

ソフィアはパドックのほど近くで他の貴族と談笑しているジョージを遠目に見る。彼は馬について話しているのだろうか、身振り手振りをしながら大げさなまでに熱のこもった仕草をしていた。

そんな彼の隣にはアスタロトも立っていて、彼の熱量にやや困った表情をしながらサポートに徹していた。

ジョージのその本来の意図を忘れていそうな雰囲気にはソフィアは不安を覚えつつも、気を取り直すために一つ咳払いをする。

すると、その咳払いが合図のようにパドックから馬が出ていきはじめ、ジョージ達はスタンドの方、つまりこちらへと向かって歩いてくる。別の個室なので、鉢合わせることはないが、彼らは隣の個室に入る手はずになっていた。

そんな折、シャーロットは手元の財布を仕舞いこみながらソフィアに尋ねる。

「そういえば、賭ける時はどうしたらいいんですか?」

「通常ならブックメーカーですが、このレースはこの競馬場が唯一の胴元になっています。アリスをお使いに出せばいいですよ」

「わかりました」

とはいっても、負ける賭けに友人の金は出したくなかったのか、結局アリスにお使いを頼むことは無かった。

そして、馬がコースの端に寄って、その前に一本の縄が張られる。

「ところで、君の予想は？」

「5番の子です」

シャーロットがそう言った瞬間、縄が落とされ、次々馬が走っていく。馬の乗り方も現在ほど洗練されていないが、それでもわずかに前傾姿勢の騎手たちが馬を前へ前へと押し出していく。

10ハロンのこのレースは、この頃にはもうこれが一般的になり始めていた一本限りの真剣勝負だ。何度も競争を行うヒートレースではない。

一団となった馬たちが殆ど直線のコースを走り、1回目のスタンド前をそのまま駆け抜けていく。

そしてヘアピンカーブ手前、とある馬が一旦大外に出ると、きついカーブをアウト・イン・アウトして抜け、大きく前に出る。

「ほらー」

目立つ色の帽子の騎手と馬を指し示して、シャーロットが予想が当たったことに嬉しそうな声を出す。そして、そのままその馬が押し切って先頭でスタンド前のゴール板を通過したのだった。

シャーロットの予想が的中したことに、ソフィアはパチパチと拍手をする。スタンドは貴族たちの歓声とため息で満ちていて、遠くからジョージの大きな叫び声が聞こえた気もした。

「これは凄い。大当たりですね」

「ぐ、偶然ですよお」

シャーロットが恥ずかしそうに頭を掻きながらその拍手を受け取る。すると、後ろでずっと黙っていたアリスが小さな声でぼそっと注釈をつけてきた。

「お嬢様。我が家の馬ですよ」

「あつ、そうだったの」

「凄いですね!」

ソフィアはきつきの聞こえた気がしたジョージの声は気のせいではなかったのかと、少し気が遠くなる。特に窓ガラスでスタンドの中と外を区切つてはいないのだが、それでも隣の個室から叫び声が聞こえるのはいかななものか。

その上、あそこまで見事に勝つと、この後予定されている晩餐会は少々面倒なことにもなりそうだった。

「今日の夜のパーティは一層豪勢になるでしょうね」

ソフィアがそう呟くと、隣のシャーロットがそんな彼女の横顔に何かを察したのか、少し思案顔になる。そして、彼女はソフィアの手をとると、につこりと笑いながら一つの思いがけない提案をした。

「抜け出しちゃいます?」

いつもよりもさらに砕けたシャーロットのその言葉に、ソフィアは目を丸くさせ、そして、どうにも可笑しくて吹き出してしまう。

「いいですね! 抜け出しちゃいましょうか!」

ソフィアは晩餐会を内心面倒くさがっていたのを見破られたのが何となく心地よく、そのシャーロットの提案に乗ることにした。そして、心の底から笑ったせいで目元に溜まった涙を片手で拭うと、自分の手に置かれたシャーロットの手を一度握り返す。

「流石に無言は駄目ですので、家の者と話してきます。」

アリス。シャーロットをお願いします」

「かしこまりました」

シャーロットの手を離れた笑顔のソフィアは、個室から後をアリスに任せて出ていくとすぐに鋭い表情になる。

そして、従業員用の個室に入ると、暗いその部屋で静かな声を発した。

「アスタロト。晩餐会には出ないことにする。そして、首尾はどうだ?」

なにも競馬はジョージの娯楽のためだけではない。別の多様な目的があるのだ。そして、部屋の薄暗い部分から一人の執事がどこから

ともなく湧いて出てくるように姿を現し、恭しく礼をした。

晩餐会に出ない旨はもうソフィアの中では決定事項だったので、アスタロトもそれには何も言わなかった。

「写真については魔法のようだ」と大好評でした」

今回、新たに開発しておいた写真機を使って、機械的な勝敗判定を出したのだ。先ほど行われたばかりのレースの写真の現像は流石にまだだろうが、それ以外のレースに関してはもうすでに現像が済み、レースに馬を出した貴族全員に写真が配られたはずだ。

「コルセットの無いドレスに関しては、男性たちは余り反応しませんでしたね。御婦人方には好評でしたが」

このころのドレスコードとしてコルセットは必要不可欠なものだった。ウエストの高い位置で強く縛るといった体に負担をかけるようなものは姿を消していたが、それでもスタイルをよく見せようと皆必死だった。

そんな潮流の中の今日、何人かのモデルにコルセットが無いドレスを着せて、競馬場を回らせたのだが、そのデザインが好評だったのは僥倖だった。

(男達は多分、コルセットの有無に気が付いていないのだろうか)

ソフィアが一人苦笑いしていると、アスタロトは続いて真面目な表情のまま言葉を継いでいく。

「しかし、保護貿易関連法の撤廃。インディアンとの条約。どれもあまり感触がよろしくありません。

ヌエバ・グラナダ共和国との外交に関してはジョージが音頭をとれそうですが」

「そうか……。晩餐会でも引き続き頼んだ。特に、ヌエバ・グラナダとは良好な関係を構築したい。

キニーネに関する情報も渡している」

ヌエバ・グラナダ共和国とは、現在のコロンビア周辺地域に存在した国である。大コロンビアとしてこの国を含む周辺一帯がスペインから独立を勝ち取った後、いくらかの内部対立があつて主にコロンビアとパナマが主体となり成立したという経緯があつた。

過去、大コロンビア末期にはソフィアもこの周辺地域を外遊先の一つとして選び、パナマの調査も直々に行っていたので、運河建築のため
の要素は着々と集められていた。

キニーネはマラリアに対する特効薬であり、マラリアは上記の国々が属する熱帯から亜熱帯に掛けて常に脅威となる感染症である。パナマ運河建設の際にも大きな障害になりうるものが予想されていた。「それくらいだな。外交官としてのジョージは優秀だ。問題にはならないだろう」

ソフィアはそれだけを言うと、さっさと踵を返し、待たせているシャーロットの下へと帰っていった。

後に残されたアスタロトはくすくすと笑い、自身の、主人には秘密にしている思惑が上手く転がり始めていることを嬉しく思いながらジョージの下へと向かうのだった。

一方、アスタロトが一人笑っていることなどは知らないソフィアが個室に戻ってくると、そこで和やかに談笑していたアリスとシャーロットを見つける。

（本編では対立した二人が談笑しているのを見るに、やはり、ゲームと現実とは随分変わってしまったな。

先ほどの外交関係もそうだし、もうゲームの内容は当てにしないで
おくか）

「ソフィアさん。おかえりなさい」

楽しそうなシャーロットが微笑むと、ソフィアもつられて笑ってしま
う。表裏が無い彼女の表情には、つつい釣られてしまうような不思議な魅力があり、ソフィアはそんな彼女が持つその雰囲気は好ましいと感じていた。

「さ、二人とも、少し散歩に行きましょうか」

「はいー」

ソフィアのその言葉に二人は立ち上がり、外出の準備を始める。

ソールズベリーは古い街だ。自然も多いし、風光明媚でもある。3
0分も歩けばストーンヘンジすらある。

ソールズベリー大聖堂の尖塔は帝国一高く、大聖堂それ自体も素晴

らしい建築物だ。街並みだって古くから大切にされてきたものであるし、ソフィアはそれらを崩さないように最大限気を使って大学も建てた。

この街は歩くだけで、いくらでも時間を潰すことができる。

しかし――

「いや、見飽きてるか？」

ふと、自分とは違って生粋のイギリス人であるシャーロットとアリスはつまらないか？と、思わず呟いてしまう。

それはあまりに小さい声だったので二人は聞き取れず、どこからか聞こえた音に首を傾げる。

「何か言いましたか？」

「何でもありませんよ」

ソフィアは問い返してきたシャーロットに、曖昧に微笑みながら頭を振るのだった。

急転直下

(予兆はあった。)

長期休暇中にシャーロットが家に帰らなかつたり、この数か月銀の輪亭に行つても会えなかつたり。

気をつけろと散々言っていたのだが……)

ソフィアは手元の電報を見ながらため息をつく。

彼女は大学の事務員から受け取ったそれを丁寧に白衣のポケットに入れてから、一旦更衣室に寄る。そして、いつも着ている白衣を脱ぎ、正装となるアカデミックガウンに着替えてから、彼女は電報を持って自身が見ているゼミ室に向かう。

そして、ゼミ室の扉に立ち、ドアノブに手をかけたソフィアは中から聞こえてきた声に、それを回そうとする手を止めた。

『あの悪魔ア……。またレポート突き返してきてえ……。』

『まあまあ』

前者がオーガスタ、後者がシャーロットの声。他にも別生徒の声も聞こえてきて、中では随分ソフィアのことを好きに言っているようだった。その言葉に、ソフィアはすぐに扉を開けてやろうかとも思ったが、これからシャーロットに伝えることを考えると、ここは話が終わるまで待つことにした。

『そもそもーあの方、専門は電磁気学でしょう!?!なあんて、経済学とか農学とか……。』

やや間があつて、またオーガスタの声が漏れてくる。

『医学、心理学、物理、化学、地学にまで精通しているんですの!?!論文まで書いてるし!』

ソフィアはそれぞれのゼミ生に指を差していったのだな、と察する。そして、彼女は腕を組みながら小さくため息をついた。

『勉強したって言っていましたよ』

『限度がありますわ!』というか、もう卒論を書き始めないといけな
いって!早過ぎますわあ!』

この大学では4年次に卒論を書かせているのだが、ソフィアは自分

が受け持っている生徒には3年次からある程度準備をさせ始めていた。技術の発展スピードが凄まじく速くなっている今の情勢では、そちらの方がむしろ負担にならないだろうと考えてのことだった。

そんな意図を理解しているのかどうか分からないオーガスタの最後の叫びで、ある程度話がひと段落ついたらしく、ソフィアはそれを確認してから改めてドアノブに手をかけた。

「皆さんこんにちは」

ソフィアがそう言ってゼミ室に入ってくるのに、立ち上がっていたオーガスタは引きつった顔で軽く目礼をし、シャーロット含めた他の生徒は苦笑いをしながら頭を下げ挨拶を返した。

「シャーロット・ホームズ。こちらへ」

いつもの白衣ではなく正装のソフィアに首を傾げながらも、シャーロットは立ちあがってソフィアの元へと行く。そして、ソフィアは彼女に外に出るように促し、扉を閉めようとする。

「オーガスタ君。軽口は余り大声で言わないように」

扉が閉まる寸前、注意だけをしたが、当のオーガスタの表情は閉まった扉に遮られて見ることは叶わなかった。

「聞いていたんですか？」

「あれくらいなら構いません」

シャーロットが困った表情で愛想笑いをしていたが、ソフィアはあれくらいなら可愛いものだろうと首を振る。そして、一つ深呼吸をしてから本題に入ることにした。

「少し、ついてきてください」

「は、はい」

シャーロットはいつもと違った雰囲気ของソフィアに戸惑いながらも、彼女の先導で使われていない教室へと入った。

そして、ソフィアはその教室の扉をしつかりと閉めてから、静かな表情でシャーロットと向き合う。シャーロットは困惑した表情で、何がやらと困惑げだった。

「シャーロット・ホームズ。これから伝えることはとても重要なことです。」

覚悟と、心を強く持つてください」

「……はい」

シャーロットは尊敬する先生の言葉に、素直に一度深呼吸をして、どんな話をされても大丈夫なように覚悟をした。とはいっても、留年とかその辺りくらいの想像しかできていなかったのだが。

ソフィアは懐から電報を取り出すと、それをシャーロットに手渡し、しっかりと彼女の目を見て口を開いた。

「お父様が亡くなられたそうです」

シャーロットは、その後、ソフィアに様々な言葉をゆつくりと聞かされたが、その内容を理解することが出来なかった。

ロンディニウム郊外の墓地、そこには酷く雨が降っていた。

とある墓の前で傘も差さずに立ち尽くすのは、喪服を着た一人の女性、シャーロットだ。

そんな彼女のことを遠くから見つめるのは、傘を差したソフィア。彼女もまた喪服を着ていて、参列者がシャーロット一人だった葬儀が終わるのを待つてから墓地へと入っていく。

酷くぬかるんだ地面の中、ソフィアは墓の間を歩いていき、シャーロットの後ろに立つ。そして、彼女の頭上に自分の傘を掲げた。

雨が自身を打ち付ける感触が無くなり、バラバラという雨粒が良く張られた布を叩く音に、我に返ったシャーロットはゆつくりと顔をあげた。そして、愛する父の名が刻まれた墓を、腫れた目で見つめながら口を開く。

「ありがとうございます」

「風邪をひきますよ」

「はい」

一本しかない傘をシャーロットに差している都合上、ソフィアは長い金髪を雨に濡らしていく。そんな彼女の言葉に、シャーロットは心ここにあらずと言った雰囲気、ただ頷くだけだった。

ソフィアはどうしたものかと、シャーロットの小さい後姿から目を離す。すると、墓石に隠れるように真つ黒の犬がいたり、墓地の端に

植えられた木がやけに静かだったり、違和感が多くあった。

(魔法使いの死、か。惜しい人間を亡くした)

ソフィアはアランの死を心から悼んでいた。

とはいっても、彼女らしく自分勝手な理由もあるにはあったが。

(事件を解決する人間がいなくなつたのは正直手痛い。

エクソシストも動いているだろうが、すべて任せられるのか？まだ接触できていないから未知数だな。

見ず知らずの人間に任せるくらいなら私が動くべきか。アスタロトへの対策もひと段落つきそうだし……)

ソフィアがシャーロットに傘を差したまま一人思索にふけっていると、シャーロットがおもむろに視線をあげ、どこか遠くを見つめ始める。そして、抑揚のあまりない声が墓地に響き始めた。

「父は……殺されたそうです」

「……」

ソフィアは殺されたという事実は初耳だった。ある程度予想出来ていたとはいえ、実際にその事実が実の娘から聞かされると、流石にかける言葉がない。

しかし、それでもソフィアは何か声をかけるべきだと、口を開きかけた時、シャーロットの声がまたも眩かれた。

「通り魔で、犯人はまだ捕まっていないそうです」

「……無念でしょうが、警察が犯人を捕まえて厳罰に処すことを願いまししょう」

ソフィアは口を動かし終わった後、雨に濡れるまつ毛を伏せながら少し突き放し過ぎたかと反省する。しかし、こういう事態に慣れておらず、彼女はと言つて慰めればいいのかあまり分かつてはいなかった。

喪服を濡らす雨が段々と沁みてきて、肩に冷たいものを感じ始めた頃、ソフィアは目を開き、シャーロットの震える体を見た。

「シャーロット」

ソフィアはあえて彼女のことを呼び捨てにした。そして、心からの言葉を紡ぎ始める。呼びかけられたシャーロットは少し横を向き、後

ろに立つソフィアに意識を向けた。

「私は、君が当初の予定通りレポートと卒業論文を完成させることを期待します」

その言葉に、シャーロットはぼつと振り返り、泣きそうな顔で、唇を引き結びながらソフィアのことを見上げた。その、何かを言いたいが、心の整理が付かずに言葉が出てこないシャーロットに、ソフィアは真剣な表情で言葉を続ける。

「お父様は、何のために高い学費を工面して君のことを大学に入れたのですか？」

「そ、れは……」

声を震わせるシャーロットに、ソフィアはアメジスト色の瞳に意思を込める。

「実際のところは私には分かりません。ですが、少なくとも、卒業はして欲しかったでしょう。」

その後は、就職なのか、結婚なのか……何を考えていたのかは分かりません。

それはお父様関係なく、君の好きにきなさい」

君の人生なのだから、とソフィアが言えば、シャーロットは涙を零し始める。傘を差されているから、その涙は雨粒と間違えようがなかった。一方のソフィアは雨に体を濡らし、額や頬に無数の水の痕を残していた。

「ですが、大学に在籍し、私のゼミと研究室に所属している以上、私は君のお父様から君を預かっていると云えます。

私は、教員としての職責、一人の人としての責任をもって、お父様に恥じさせないためにも、誇りに思ってもらうためにも、君を卒業させましょう」

シャーロットは俯き、思わず伸ばした手でソフィアの服を掴み、力強くその濡れた布を握りしめる。ソフィアはそのシャーロットの手に自分の空いている手を重ね、彼女の冷え切った拳を温め始める。

「くれぐれも、早まったことはしないように」

ソフィアのその言葉に、はつとシャーロットが顔をあげる。なぜ

？、と問いかけているようだった。だが、ソフィアはある意味、彼女のことを誰よりも理解していた。

「通り魔を憎む気持ちは……。」

もちろん、君の痛みは私には理解できません。しかし、共感はします。

ですが、それを踏まえて言います。警察に任せなさい」

シャーロットは上げた顔をゆっくりと下げていき、やがて泥の水たまりへと視線を落とす。彼女の亜麻色の髪はもうすでに濡れ切っていて、彼女の体は震えていた。

ソフィアはそんな彼女のことを優しく抱きしめて、その震えが収まるのを待つ。

やがて、その震えが止まらないことを感じ取ると、彼女の背中を何度か撫でた。

「シャーロット。体を冷やしてはお父様が心配するでしょう。今日は私の所に来なさい」

「ありがとうございます……ご言います……っ」

ソフィアはシャーロットの肩を抱きながら、彼女のことを自分が乗ってきた馬車へと案内する。最初から、今日は彼女のことをロンディニウムにある別邸に泊めるつもりだった。すべての準備はもうすでに整っている。

そして、ぬかるんだ地面に二人の足跡が残されて行き、不快な水音と、シャーロットのすすり泣く声が耳を打つ中、ソフィアは次のことをもう考え始めていた。

（アランは恐らく何かを知り過ぎたことよって殺されてしまった。黒幕の規模を考えると、下手人を捕まえることはできるか？

下手人が始末されている可能性もある。それを考えると、早急に捜索しにいかなければ……）

ソフィアは俯くシャーロットの亜麻色の髪を見て、眉を顰める。

（納得が無ければ、この子は答えを得るために走り出してしまおう。

そして、本編同様にアランの跡を継ぎかねない）

復讐心、疑念、様々な思いを胸にシャーロットは父の死の真相を暴

きに行くだろう。実際それが霧の都のマギの導入部分だった。その後、父の死の背後に広がる大きな闇に気が付いてしまい、彼女はそれに立ち向かっていくこととなるのだ。

(できれば、アランがその役割を担ってくれればよかったのだが)

ソフィアは、もつとアランと深く関わっていればと後悔する。

だが、その後悔は一瞬で拭いさられ。彼女は前を向きながら次にするべきことを考え始めていた。

俯く最愛の教え子を無言で慰めながら。

闇夜

シャーロットを別邸に届けた後、ソフィアは古いサックコートを身に着け、包帯を顔に巻き、夜のロンディニウムに繰り出していった。

大雨の降る街灯の傍以外は真つ暗闇の街を、彼女は水たまりを蹴りながら歩いていく。向かう先はイーストエンド。目的は人探し。

大雨のため、通りを出歩く人間はほとんどいない。いたとしても、早く屋根の下に入ろうと走っているか、馬車と言う箱の中で雨を気にしていないかのどちらかだった。

一方のソフィアは静かな歩みだ。彼女は長い足のコンパスで、一見すれば優雅に、ともすれば雨に対して無感情に歩いていた。

そんな彼女はやがて、ガラの悪く、ゴミが散乱している通りにやってくる。そして、大雨の中営業している適当なパブの扉を開いた。

パブで酒を飲んでバカ騒ぎをしていた労働者たちはいつせいに押し黙る。なぜなら、入ってきた人間が、よれたシルクハットから水を滴らせ、包帯を顔に巻き、サックコートの裾から垂らした水で床をぼたぼたと鳴らしているのだから。

そして、その包帯の男は低く静かな声で問いかける。

「最近、急に羽振りが良くなった奴を知らないか？」

その、外の雨降る闇夜に引きずり込まれそうな声に、労働者達は一斉に首を振る。しかし、その回答にソフィアは満足しなかった。

「突然、高い酒を飲むようになったり、仕事をやめると言い出した奴を知らないか？」

「しっ、知らねえよ。出ていってくれ……」

パブの店主らしき男がこの場にいる全員を代表して、おびえたように顎を引き、上目遣いになりながらそう言う。そこまで言われて、ようやくソフィアは満足したのか、無言で頷き、踵を返してパブを出ていった。

そして、彼女がいくつかのパブに同じようなことをして、空振りに終わった後に向かったのは娼館。

この時代のロンディニウムには無数の娼館と、数えきれないほどの

娼婦がいた。彼女たちは自分の体を使って、違法行為とグレーゾーンを行き来しながら、日銭を必死に稼いでいたのだ。

そんな娼館の内の一つを適当に選び、ソフィアは扉を開く。その娼館はまるで宿屋のようになっていて、その受付には強面の男がいた。彼は急に入ってきた包帯の男にも怯まずに舌打ちをする。

「最近、見た目不相応な奴が来なかったか？」

「知らねえな」

「明らかにうらぶれているのに、高い女を買おうとした奴に心当たりは？」

「ねえよ」

強面の男が首を振れば、ソフィアは何も言わずに娼館を出ていこうとする。すると、強面の男は何かを思い出したかのように一瞬横を見て、それから口を開いた。その言葉に、ソフィアは開けかけていた扉を再び閉める。

「少し前、うちの、『客が変な男に稼がないか？』って誘われてたらしいわ。私も稼ぎたいねえ』って言ってたな。

多分、客は港湾労働者だ」

ソフィアは扉に手をかけたまま、後ろを振り返る。

「助かる」

「ああ。もう金輪際関わらないでくれ」

「保証できないが、善処しよう」

ソフィアは今度こそ扉を開いて、通りに出る。ますます雨は酷くなっていて、ザアツザアツと風によって叩きつけられる雨粒が音を激しく鳴らしていた。もはや、嵐と言って差し支えなかった。

(アランの暗殺に鉄砲玉を使ったのは確定か。そして、その選定に何人かに声をかけたといったところか。

実行犯が生きていれればいいが)

ソフィアはイーストエンドをさらに歩き、その中心となる港湾施設の方面へと足を延ばす。そして、その内、とあるパブを見つけてそこへと入った。

中には屈強な男どもが楽しく酒盛りをしていた。彼らの手には

カードが握られており、賭け事に夢中になっていたようだった。そんな男たちが今しがた入ってきた包帯の男に気が付くと彼らはいっせいに押し黙り、静かなパブに軽食を作るキッチンの音だけが響く。

「最近、急に羽振りが良くなった男を知らないか？」

「知らないねえ……」

ソフィアの今晚の定型文と化した質問に、男たちの中で一番の老け顔が答える。その表情はとぼけた物で、ソフィアは溜息をつきながら自身の肩を払って申し訳程度に雨を払う。

「知っている口ぶりだな」

「さあねえ……」

ソフィアはポケットからシリング硬貨を取り出すと、一番近くにあったテーブルにそれを一枚置きながら男の表情を観察する。彼は無精ひげの生えた顎を撫でながら天井を見上げていた。

そして、そんな男の表情を確認しながら、ソフィアはそのシリング硬貨に2枚目、3枚目と同じものを積み上げていく。そして、5枚目になった瞬間、男は唸るような声をあげた。

「うううん……。それくらいでいいか。アイツみたいに、持ちすぎも良くないからな」

男がそう言いながらテーブルのカードを集めてシャツフルしていく。

「ここから少し行ったところに、もう一軒パブがある。そこでとある男二人がトラブルを起こしてな。」

まあ喧嘩だよ。喧嘩。突然金回りが良くなった男を羨んだ奴が、そのお前の探してる男に殴りかかってな。最後は、殴られた側がナイフでぎくーっと」

「明らかにタガが外れてやがった。ナイフで腕を裂いた後笑ってやがったんだ」

無精ひげの男とは別の男が、吐き捨てるように言えば、その二人が持っている情報はもう無くなったようだった。ソフィアはその情報に頷けば、また口を開く。

「いつだ？その男の名前は？この話、どれくらい知られている？」

「喧嘩自体はちようど昨日。名前なんて知らないね。ここいらじゃその話で持ちきりさ」

「感謝する」

ソフィアはそう言えばパブを出る。そして、パブを出た後、左右を見渡した。誰もいないが、何となく誰かがいる気配は感じられた。その気配を放つのが、どんな人間かまでは分からなかったが。

彼女はため息をつく、雨が染み込みきつてがぼつと音を鳴らす革靴を一步前に出した。向かうのは先ほど聞いたばかりのパブ。

(昨日、今日で殺されていなければいいが)

アランを殺した犯人に繋がる糸口を胸に、通りを歩くソフィアはやがて違和感に気が付く。歩けども歩けども、先ほど示されたパブにたどり着けないのだ。それに、人ともすれ違わない。

「なるほど。実行犯を泳がせていたのは、私をつり出すためか。

同じようにここにきただろう警察官は殺したのか？」

ソフィアがそう言うと、馬車も何も通つてこない通りの真ん中へと立つ。そして、辺りを見回した。もはやここは現実世界ではない、異界だ。

「その通り！あの男と接触していた包帯の男、上手く誘い込めてラツキーだ」

突如、そんな楽しそうな声を通りに響く。反響して音の出所がつかめないことにソフィアは舌打ちをし、彼女はゆっくりと辺りを見回しながら懐に手を入れる。

「キミたちは知り過ぎたんだ。死んでくれ」

ソフィアは一気に濃密になった死の気配に、さつとその場でしゃがみながらサックコートボタンを外し、リボルバーを抜く。

その瞬間、元々頭があつた位置に何かが通り過ぎた。

そして、背後に振り返りながらソフィアは、頭から尻まで完全に寸胴な円筒形のリボルバーの銃口を向ける。振り返ったそこには、不思議と雨に濡れていない白シャツに身を包んだ人型が立っていた。

ソフィアはその人型の顔に霧がかかっているのを確認すると、その銃口をわずかに下に下げて、胸めがけて引き金を引いた。

響く銃声、飛んでいく鉛玉、然れども、何も起きない。

「そんなもの。効かないよ。人間じゃあるまいし」

「じゃあ、何だ？化け物め」

ソフィアが油断なく人型に向かって銃口を向けながら問いかける。リボルバーの機構を誤魔化すための覆いに雨が当たり、弾け、照準器の周りには水しぶきが飛び跳ねていた。

そしてその奥で、人型は両手を大きく広げ、楽しそうに宣言した。

「悪魔さー！」

「悪魔、ね」

ソフィアは右手で銃を持ちながら左手をゆっくりと動かし、開いたサックコートの内側、腰のあたりに手を伸ばす。そこには、リボルバーのためのホルスターがあり、もう一つ、ガラスの小物も提げられていた。

「悪魔、名前は？」

「ん？今から死ぬ人間に名乗る名前はないねえー！」

ソフィアはそのガラスの小物の底についたレバーを勢いよく傾ける。

ガリガリガリツ！と石が擦れるような音が鳴り、同時にガラスの内側で激しく火花が散る。その火花に照らされるのは一本の蠟燭。

悪魔は光るソフィアの腰の物を見ると、顔の靄を激しく渦巻かせる。

「蠟燭は古くから魔よけの意味があるらしいな」

ソフィアの腰に下げられたものはランタンだった。見事な装飾が施された金属フレームに4つのガラス面、その中にあるのは蜜ろうで作られた蠟燭。

その蠟燭はオレンジ色の穏やかな光を放ち始め、その光はソフィアを中心に不思議なほど暖かに広がっていった。

悪魔はソフィアを中心に放たれる光を遮るためか、腕を顔の前に掲げて一歩後ずさる。

「ぐっ！くそっ！」

「蠟燭程度でそこまで怖気づくか」

ソフィアは内心で目の前の悪魔は大した強さの物ではないと判断した。アスタロトのような大悪魔が使役する下つ端悪魔程度だろうと、自身の少ない知識から相手の力量を測る。

「舐めるな!!」

ソフィアの言葉に悪魔は顔の靄を渦巻かせながら大きく一步踏み込んでくる。ソフィアはそれに素早く反応し、後ろに飛ぶ。悪魔が手を振るえば、腕が鞭のように伸び、ソフィアが元居た地面を殴りつけた。

しかし、その攻撃を簡単に避けてしまったソフィアは、悪魔の体が硬直した瞬間を狙ってその肩に向けて引き金を引いた。

「パァン！」

「いざいっ！」

「聖別してない鉄弾でもそれなりには効くのか」

鉄弾が素通りしたはずの何も起きていない肩を押さえ、悪魔がのけぞり悲鳴を上げると、ソフィアは引き金を引き絞りながら悪魔の胸に照準を合わせた。

「次は聖別せず、ゲッケイジュの装飾をした鉛玉だぞ」

シリンダーが次の鉛玉をチャンバーに送り込むと、それはすぐに発射される。

「ひうっ！」

すると、やはり悪魔の胸を弾丸は通り抜けるが、彼のモノは胸を押さええてたたらを踏む。ひるませる程度の効果はあるらしかった。ソフィアは悪魔に照準を向け続け、実験動物を見る目と同じ目で睥睨していた。

「次は、聖別せず、装飾をした鉄弾」

「ぐあッ!!」

次の弾丸は悪魔の胸に大きな風穴を開け、悪魔は後ろに倒れ込んでしまう。ソフィアは腰のランプを掲げ、水たまりが目立つ道路に倒れ込んだ悪魔に歩いていく。

ソフィアの水を蹴る足音を聞いた悪魔は、震えながらなんとか彼女から逃れようと必死に手足を動かす。しかし、無情にも這いつくばる

悪魔の背中に鉛の弾丸が突き刺さった。

「やめっ！ひぎゆう!!」

「聖別した鉛でも怯むくらいか」

ソフィアは一度リボルバーのシリンダーを横にスライドさせて、装填された弾丸の薬莖の底面の刻印を読む。そして、確認が終われば、すぐにシリンダーを戻し、うつ伏せに倒れ込む悪魔に銃口を向けた。

「次、聖別した鉄弾」

「嫌だ！嫌だああああ!!」

悪魔の必死の悲鳴を聞いたソフィアは、照準を大きくずらし右ひぎのあたりに向ける。そして引き金を引いて、銃声が鳴った瞬間、その足が付け根から消し飛んだ。

「ぎやああああああああ!!」

けたたましい叫び声と共に悪魔の周りの水がはじけ飛び、今まで濡れていなかったシャツがどんどん濡れ始める。泥すら被った、右足と胸に風穴があいた悪魔はもはやただの弱者だった。

そんな悪魔にソフィアは無慈悲に、引き金をゆつくりと引き絞る。

「最後は、聖別し、ゲツケイジュの装飾をした鉄弾だ」

「やめて……やめて……」

戦意が喪失したらしい悪魔に、ソフィアは油断なく引き金をわずかに絞ったまま言葉を投げかける。

「探偵を殺したのはお前か？」

「違う……俺じゃない……」

悪魔は顔だろう部分を地面に擦りつけながら震える声で答える。ソフィアは悪魔のその回答に眉を顰めると、足を振り上げ、残った左足首に向かって蹴り下ろした。

「ぐううっ！」

「……そうか、悪魔には正しく質問をしないといけないのだな。

質問を変えよう。探偵を殺すように命じられ、殺す方法は港湾労働者を仕掛けた。合っているか？」

「そうだ！そうだから、見逃してくれえっ！」

ソフィアは呻く悪魔を見て、悪魔にも痛覚があるらしいことを認識

しながら、彼のモノの足首を踏みにじりながら続いて質問をする。

「誰に命じられた？」

「言えない！」

「特徴も言えないか？言えないというのは、そう縛られているのか？」
「言えない！言えないんだよ！」

ソフィアはその回答にこの悪魔からは大して情報を得られないことを察すると、ため息をついて足をどける。すると、その瞬間、悪魔はうつ伏せの状態から上半身を起こし、体をひねりながら腕を高速で振るった。

「むっ」

油断はしていなかったが片足をあげていたソフィアは、その鞭のようになりなる腕に向かって、退かしかけていたその足を伸ばすことでしか対処することが出来なかった。

人ならざる膂力で振りぬかれた腕を足場にソフィアは後ろに吹き飛ばされることになってしまう。

思わずランタンを手放すほどの衝撃、加えてわずかな浮遊感。

数メートル後方に吹き飛ばされたソフィアは地面に上手く着地し、水しぶきをあげながら僅かに後ろに滑ってしまう。

地面にしゃがみ、片手をつきながら顔をあげたソフィアは、必死に片足と両手を動かして逃げようとする悪魔の背中を見る。彼女と悪魔のちょうど中間に落ちるランタンの光の外に、彼のモノが逃げのびようとした瞬間――

「逃げるなよ」

――ソフィアは最後の鉄の弾丸を発射した。

その鉄弾は、銃口から飛び出た瞬間、美しい光の尾を描いた。

まるで、分厚い雲から降りる天の梯子のようなその光は、真つすぐ悪魔の後頭部へと刺さり、その靄を一瞬で晴れさせた。

そして、悪魔は前方に倒れ込むように体を傾けさせながら、白い塵へと化していった。

「今のは一体……？」

ソフィアは両手で保持したりボルバーを茫然とした表情で見つめ

る。現実世界での試射では今のような摩訶不思議な現象は発生しなかった。

試射と今の状況の違いから、異界だから今のような現象が発生したことは想像に難しくなく、彼女はそんな現象を発生させたりボルバーと鉄弾にわずかな畏れを抱いた。

(この畏れは大事にしないといけないだろう。

畏れ敬わなければ、超常からはそっぽを向かれることになるだろうから……)

ソフィアは地面についていた膝を持ち上げ、ようやく立ち上がる。悪魔の一撃を受け止めたことと、地面に着地した瞬間に感じた衝撃で足が痛み震えたが、今はそれどころではなかった。

(まだ、やらなければならぬことがある)

ソフィアはランタンを拾い上げると、その火を消しながら、異界が縮小して行くのを何となく感じていた。人出が無かったので、異界と現実もそう変わりはいしなかったが、ソフィアは現実に帰ってきたと感じると本来の目的地であるパブの方へと歩いていく。

そして、今度こそパブに到着し、扉をやや乱暴に開くと、中はアルコールと変に甘い匂いで満ちていた。

「なんだあ？」

二人の女に囲まれてそう声をあげたのは、赤ら顔の驚鼻の男。その男を見た瞬間、ソフィアは直感を得た、こいつだ、と。ソフィアは他の客にも目もくれずに驚鼻の男の前まで歩いていくと、ポケットに手をつまみながら問いかける。

「最近、男を殺したか？」

その突然の質問に、二人の女はぎよつとした表情で驚鼻の男を見、当の彼はまるで武勇伝を語るかのように誇らしげな表情で高らかに歌い上げた。

「そおくだぞお！いえ好かない、インバネスコートの奴お、殺ったぜえ！」

どうやら男は泥酔しているようだった。呂律が半分しか回っておらず、周りの女がそそくさと逃げていくのにも気付かず、周りで見

守っていた別の客も慌ててパブから出ていくのも気にしていないようだった。

「そうか」

ソフィアはテーブルの上のサイダーを見た。

「美味いか？そのサイダー」

「うめえ……」

鷺鼻の男はグラスに手を伸ばしながら、どこか感じ入る様にその酒を眺めた。きつと、安酒のジンしか飲めていなかったのだろう、それと比べるとサイダーはきつと美味しかろう。

「……まあ、美味いだろうな。」

私だって、人を殺した後の食事は何ら変わりなく美味しく感じる」

「へえ？」

鷺鼻の男が物騒なことを言い始めた目の前の珍客に、素つ頓狂な声を出しながら顔をあげる。見上げた、雨と泥濡れの包帯の男の、包帯の奥の目は無感動にこちらを見下ろすばかりだった。

「明日からも美味しいココアが飲めそうだよ」

ソフィアはそう言った瞬間ポケットからナイフを抜き、鷺鼻の男のグラスに伸ばしかけていた手の甲へ、思いつき突き刺した。

「ぎいやあああああ!!」

男は突如右手に感じた熱のような痛みに叫び声をあげる。その悲鳴にソフィアはうるさいなと舌打ちをすると、彼の頭を掴み、そのまま顎をテーブルに叩きつけることで無理やり黙らせる。

「うううう……つ」

「抵抗するな。分かったか？逃げようとしたら殺す。いいな？」

ソフィアの低い声に男はガクガクと震え、涙も零しながら不自由な首で何とか頷く。

「喋っても殺す」

ソフィアがそう言いながら掴んでいた頭を放し、そのままナイフでテーブルに縫いつけた血まみれの手首を掴んだ。そして、ナイフを抜きつつその腕を彼の背に回すと、軽く極めながら椅子を蹴る。

「立て」

「へ、へい……」

鷺鼻の男は完全に酔いが醒めたのか、震える足で立ち上がる。ソフィアはそんな男のスーツの背中に、小さくない穴があることを認めると、ため息をついた。

「金が入ったら真っ先に酒と女か。さあ、歩け！」

ソフィアが血濡れのナイフをちらつかせながら鷺鼻の男を歩かせ始める。するとパブの店主がカウンター奥から、真っ青な顔で声を投げかけてきた。

「お、お代を」

ソフィアは鷺鼻の男のスーツの中に手を突っ込むと、そこに乱雑に入っていた硬貨を全て抜き取り、そのまま床に落としていく。コトンコトンと床に落ちていくコインをソフィアは自然と数えてしまった。それなりの額はある。

女と酒に使った分も加味しても、それなりの額はある。

だが、それなり、だ。

ちよつと豪遊して、何度か物を新調すれば無くなってしまおうような額だった。

「はした金だが、足りるか？」

ソフィアがため息交じりにそう言えば、店主はこくこくと頷く。ソフィアはその店主に目礼をすれば、ドアを蹴り開けて、鷺鼻の男を外へと連れだした。

薄明るかったパブから出れば、そこは灯りが少ない嵐吹きすさぶ道。

鷺鼻の男は媚びるような目つきで後ろのソフィアに振り返ったが、その男に対する返事は後ろ手にした腕を締め上げることだった。

「少し歩くぞ」

そうして、ソフィアはアランを殺した男を伴って街を歩き始めた。向かう先は、シャーロットが待つ別邸だ。

納得

ロンディニウムに降りしきる雨をその身に受けながら、ソフィアとアランを殺した鷲鼻の男が歩いていった。

鷲鼻の男は酒で上がった体温が雨によつて急速に冷やされたからか、それとも後ろの男に殺されるかもしれないという恐怖からか体を小刻みに震わせていて、ソフィアはそんな男に声をかける。

「後悔しているか？」

鷲鼻の男は何度も頷き、それにソフィアは「そうか」とだけ小さく呟いて、やがて見えてきた自分が所有する別邸に視線を向ける。

ソフィアは別邸の門を開けると我が物顔で中に入っていく、屋敷の扉の前に鷲鼻の男を跪かせる。一方の男は豪邸に侵入させられたことで挙動不審となり、辺りを見回し始めた。

ソフィアは玄関扉横に付いたドアベルのボタンを押す。わずかに家の中からリンリンというベルの音が響き、ソフィアはそれに加えてドアノッカーも鳴らして、中の人間を急かす。

家人の呼び出しを行ったソフィアは、自分の包帯がしっかりと巻かれていることを確認すると、一歩下がって男の傍に立つ。

やがて僅かな足音と、鍵を開ける音が玄関先に響き、扉が開かれた。「お待ちせしました。……どちら様で？」

中から顔をのぞかせたのは、使用人の服を着たアリスだった。彼女は最初は余所行きの表情だったが、呼び鈴を鳴らしたのが包帯の男であることと、座り込んで青い顔をしている男を見たときに、表情を硬くさせた。

ソフィアは今アリスに用はないとばかりに挨拶も無しに要件を伝える。

「アラン・ホームズの娘に用がある。ここにいるはずだ」

それを聞いたアリスは目を見開きすぐさま扉を閉めようとするが、ソフィアは足を延ばして扉が閉まらないように靴を挟んでしまう。

「そんな方がいいません！お帰りください！」

（アリスは仕事着。という事は、今の今までシャーロットと話してい

たな？)

ソフィアはアリスの服装から、今の今までシャーロットのことを慰めていたことを察すると、扉に手をかけ、そのまま強引に開いてしまふ。アリスは体重をかけて扉を閉めようとしていたが、体を鍛えていたソフィアの腕力には勝てずに扉が完全に開け放たれてしまふ。

その衝撃でアリスが倒れてしまうが、ソフィアはすぐに彼女から目を放し、灯りのほとんどが落とされて薄暗くなっていた室内に顔を向け、息を大きく吸った。

「アラン・ホームズの娘！いるんだろう！出てくるんだ！話がある！」
低い声は屋敷の中に良く響き、そんなソフィアの声が反響してやがて消えれば、どこからか扉が開く音がした。

「ロティー！来なくていい！逃げなさい！」

アリスが悲痛な声をあげてシャーロットに逃げるよう促し、ソフィアは溜息をつきながら床に座り込むアリスに視線をちらと向けた。

「勘違いしているようだが、私はアランを害した人間ではない」

(アリスもアランが目的があつて害されたと察している？)

シャーロットから話を聞いて客観的にそう思ったのか、それともシャーロット自身がアランが殺されるに足る理由を抱えていたと察してそれを彼女に相談したか？

……いや、考え過ぎか。私の風貌を見れば理由がどうあれ手荒なことをすると勘違いもするか)

ソフィアがアリスがすぐさま逃げるように促した理由を考えていると、ロビーに足音がわずかに響き、暗がりから目を腫らしたシャーロットが現れた。

玄関にいる三人が彼女を認めた時真つ先に動いたのはアリスで、彼女は慌てて立ち上がるとシャーロットに駆け寄り、ソフィアから庇う様に間に立った。

「アリスさん。ボクは大丈夫ですから」

「いいえ。駄目です」

シャーロットはアリスの肩に手を置きながら穏やかにそう言うが、アリスは首を振って彼女の前に立ち続けることを選んだ。

いつの間にそんなに仲が良くなったのかと聞きたいソフィアだったが、さつきと本題に入るために足元の男の髪を掴んで顔を二人から見えるように上げさせる。

「こいつがアランを殺した男だ」

不審者から告げられる突然の暴露に、シャーロットは息をのみ、アリスは目を吊り上げながら非難の声をあげる。

「何を勝手なことを！悪い冗談はほどほどにしてください！」

アリスのその言葉にソフィアはそれもそうかと頷き、しゃがんで男と目を合わせる。そして、彼のことをしっかりと見据えながら、ドスの利いた声で尋問を始めた。

「頷くか、首を振るかだけで答えろ。」

お前が刺したのは、インバネスコートに身を包んだ亜麻色の髪の男だな？」

鷲鼻の男は頷く。続いて、ソフィアはシャーロットのことを指さした。

「背格好はあれくらいだったな？」

男はまたも頷いた。

「男を刺した場所は——」

「もういいです！」

ソフィアがなおも尋問しようとしたところをシャーロットの鋭い声が遮った。彼女は今にも泣きそうな顔で、涙をこらえるためかアリスの肩に置いた手を震わせていた。

「すまないな」

ソフィアが掴んでいた男の髪を弾く様に手荒に手放すと、男はふらつきながら蹲り額を地面に擦りつける。そして、ソフィアは立ち上がり、シャーロットと目を合わせる。アリスは警戒する様に一歩後ずさりしようとしたが、後ろにいたシャーロットは一歩も引く気はなかった。

「こいつが、多少の金欲しきにお前の父親を刺した」

「それで……私刑でもするんですか？」

今にも泣きそうな表情のシャーロットは、しかしそれでも、強靱な

意思を湛えた瞳でソフィアのことを睨みつける。彼女は男の手の甲にある刺し傷のことを目ざとく見つけていた。

そして、そのわずかに非難の色が混じった視線にソフィアは乾いた血の付いたナイフを取り出す。

「君がそれで納得するなら、今ここでこの男を殺してもいい」

「私に私刑の方法を選択させるために、この人をここまで引きずってきたんですか？」

ソフィアの言葉にシャーロットはすぐさま言葉を返し、そのまま矢継ぎ早に言葉をソフィアに投げつけていく。

「確かに、捜査は進んでいませんでした。父は確かにそこら中にいる、ただの男です。だから捜査は後回しにされたんでしょう。」

それで、先んじて男を捕まえてきたと？

その上、やるのが私刑ですか？」

ソフィアは畳みかけられた言葉に包帯の奥で僅かに口角をあげる。そして、ナイフを懐にしまうと、手をひらひらと振ってもう何も持っていないという事をアピールした。

（よく頭が回る。アランが死んですぐに連れてこれればいくらでも言いくるめられると思ったが、間違いだったか）

そして、その一瞬の間、ソフィアが口を開く。

「何、私刑は言葉の綾だ。君が不愉快に思うのであれば、私はもう何もしない。」

私の目的はこの男を君の目の前に連れてくることだからだ」

事実、ソフィアの第一目標は、彼女の父を殺した犯人を確保して彼女の前に連れ出すことだ。父を殺した犯人が見つからなかったのが、彼女が探偵になることのトリガーなのだから、それを発生させなければそれでいい。

シャーロットが何も選択しなかったという事も彼女の立派な決断だ。彼女は一定の納得を得ることになるはずだ。

アリスが包帯の男へと向かって「悪趣味な」とつぶやき、シャーロットは雨に打たれて更にうらぶれた男の姿を見る。

「何か言葉でもかけるか？何も無いようなら、私はもう行くが」

シャーロットにソフィアがそう声をかけると、彼女は男から目を放してソフィアへと目を向ける。

「いえ。もう十分です」

「そうか。恨み節の一つでも言っても罰は当たらないと思うが」
「恨み？」

ソフィアの何気ない一言に、シャーロットが小さく言葉をおうむ返しすれば、廊下のランプの灯がわずかに揺れた。

「私は彼のことは恨みません」

そして、彼女はそう短く言った。

アリスは驚いた表情で振り返り、ソフィアはわずかに目を細めた。
「恨みませんよ。ボクは……この人を恨みなんてしない」

アリスには、表情の薄いシャーロットが自分に言い聞かせているように聞こえただろう。だが、ソフィアは違った。やや間において、彼女は片手をシャーロットに向けてその先を促した。

促されたシャーロットは、鷲鼻の男の顔を見て口を引き結び、やがて、目をつぶって語り始めた。

「お金が欲しくて手を血に染めたのなら。それなのにこの人が普段はまじめに働いていたのなら」

シャーロットは目を開き、鷲鼻の男の汚く節くれだった手を、その碧眼の瞳を強く光らせながら見た。

「ボクは彼の背中を押してしまった、そのきっかけを恨みます」
「……そうか」

ソフィアはしばらく何かを考えるように視線を彷徨わせると、やがて頷くように視線を下げながら小さく呟く。

そして、彼女は「そうだよな」と零すと視線をあげて、シャーロットの顔を見た。

「Condemn the fault, and not the actor of it?」
「罪のみを非難し、男のことは許すのか？」

二人の視線が交錯し、シャーロットが何を思ったのかは分からないが彼女は頷き、ソフィアはしばらくシャーロットを見つめた後、彼女から視線を外して男へと目を向けた。

「だそうだ。私からも、もう何も無い。立て」

ソフィアは男を無理やり立たせると外に出ていくために踵を返した。だが、すぐには歩き出さず、暗く雨が降る外を見ながら暫く黙る。

そして、意を決したように一度息をのむと、静かな声で語り始めた。

「雨Happy is the corpse that the rain on.が降り注ぐ死体は幸せ。だったか。

最期がどうあれ、アランの人生は幸せに満ちていた。

……私はそう思うよ」

その言葉にシャーロットは目を見開き。アリスも驚いた表情をした。

ソフィアは、墓地に来ていたであろう、いくらかの人ならざるものを思い浮かべ、少し言葉を付け加える。

「善き人間だったと思う。慕われていたはずだ。

私にとつても数少ない友人だった。交流は少なかったが、確かに友だった」

「あの…父は！」

……父は私のことを何か言っていましたか？」

幼いころから寮生活で、父と過ごした時が少ないシャーロットは少しでも多く父の話を聞きたがった。だが、ソフィアもあまりアランのことは詮索はしなかったの、語れることは少なかった。

「君のことはあまり多くは聞かなかった。だが、彼が君のことを常に考えていたことは知っている」

「……ありがとうございます。」

貴方の名前は？」

「ダン」

それだけ言い残すと、ソフィアは男を蹴り出し、闇夜へと消えていった。

後に残されたアリスは足の力が抜けたのか、へなへなとその場に座り込んでいつてしまい、そんな彼女のことをシャーロットはしっかりと支えてあげる。

そして、未だ開いたままの扉を眺めながらアリスは茫然とした表情で呟く。

「今の人は一体何だったんでしょう？」

「わかりません。ただ、悪い人ではないように見えました」

シャーロットはアリスに肩を貸すと、玄関扉を閉めてから先ほどもで二人で使っていた客室へと戻る。そして、アリスを椅子に座らせると、すぐさま自分の荷物の元へ行き、そこから一つの封筒を抜きだした。

「ロテイ、それは？」

「父が遺していた遺言書に、『ある男が来たら渡せ』と書かれています」

シャーロットはそう言いながらペーパーナイフも使わずに手で乱暴にその封をあける。果たして、中から取り出されたのは数枚に渡る手紙。しかし、その内容は暗号化されているのか、意味不明な文字列で構成されていた。

『渡すべき男は見るか会話をすればわかる』と書かれています。

それがあのダンと言う男だというのは、彼自身の誤魔化すような『多少の金欲しさ』と言う言葉や、シエイクスピアを引用して何か隠された物があると匂わせてきたので確実です。

だから、きつとこの最初の方か最後の方の文字列に『ダン』と言う名前もあるはずだ」

「ちよつと待って！ いったいどういう事？ もしかして、全部カマかけだったの？ あの男も、ロテイも？」

理解が出来ないという表情でアリスが言えば、腫らした目をきつく光らせたシャーロットが手紙から顔をあげる。

そして、彼女は言うべきかどうかを逡巡した表情になり、やがて頷いた。

「もともと、父は通り魔に刺されてしまったのに、ボクに対する遺言書を遺していました。長期休暇の時に『帰ってくるな』とも電報があった。

そんなの……おかしいでしょう!？」

首を振りながら慟哭すれば、枯らしたはずの涙でまた瞳が潤んでいく。

「父は自分の死を予期していた。なのに、遺言にはその点について一

切触れていなかった」

声を小さくしながらシャーロットは父から自分に宛てられた遺言の内容を思い返す。遺産の事、いくつかの手続きや関係のあった人への挨拶のお願いに始まり、最後は自分に対する心配と愛とが綴られていた。

よくよく考えなくとも、おかしいことだった。

確かに、あらかじめ遺言書を書いておく人もいる。だが、それにしてはあまりにも最近書かれていたし、すぐにそれが必要になると分かっているような書き方だった。

「だから、ダンって言う人があの男を連れてきた時、彼はきつとボクを踏みとどまらせるためにあんなことをしたって、すぐに分かった。父の事を詮索するなつて。」

もしかしたら、父があらかじめそう頼んでいたのかもしれないとも、思った。

でも！」

父からダンに送られた手紙の内容に真実へのヒントがあるうとも、暗号化されたそれを今すぐに読む事は叶わない。それを理解したシャーロットは父からダンに送られた最期の手紙をテーブルに叩きつけながら、涙を目の端から零し、悲痛に叫ぶ。

「納得できない！」

その、枯れるほどに喉から絞り出された声にアリスは眉尻を下げる。そして、シャーロットはテーブルに両手をつき、その手の甲に水滴を落としながら声を震わせた。

「お父さんはなんで、死なないといけなかったの？」

なんで、あのダンって人はボクにわざわざ犯人を見せつけて、ボクに一線を引かせようとしたの？

人を憎まず、罪を憎む？そりやあそうだよ！

だって、お父さんは……お父さんは……」

「ロティ……」

どう声をかければいいのか分からないアリスは手を、テーブルに置かれ手紙を握りしめるシャーロットの手に伸ばし、そつと重ねる。

シャーロットが顔をあげる。涙の跡はあったが、視線はまっすぐ前を向いていた。

「お父さんは、あの男が殺したんじゃない。もっと、大きな何かに殺されたんだから。」

貴族かもしれない。他の国の人もかもしれない。それでも――」

もう声は震えてはいなかった。しかし、アリスは重ねた彼女の手が小刻みに震えていたのに気が付く。その震えの根源は、悲しみか、怒りか、それ以外なのか。それはアリスにはわからないことだったが、一つ分かったことがあった。

「ボクは、その黒幕を絶対に突き止めます。」

そして、必ず償わせる」

シャーロットのこの一言は決して覆らないであろうという事だ。

そしてアリスは、彼女がその行動を起こさないようにするために、先ほどの包帯男がやってきたのだとようやく理解した。あの男は、シャーロットが実行犯を見て、それですべて納得して、気持ちに区切りを付けるのを期待していたのであろう。

しかし、包帯男や彼女の父が思っていた以上に、シャーロットは賢く、実直で、父を愛していて、それと同じくらいに愚かだった。

「私には……何も、言えませんが」

アリスはシャーロットのことを引き寄せると、彼女のことを抱きしめた。彼女の痛みも決意も彼女自身だけのものであって、アリスがそれに干渉することはできないのだ。

あの男も、それが分かっていたから、何も止める言葉を言わなかったのだろう。

アリスにできるのは、このいたいけな友人の良き友であることだけだった。

エクソシスト

ソフィアは鷺鼻の男を連れてロンディニウムに行く。向かう先は、適当な詰所。目的は果たせたので、いい加減この男を手放したくなっていたのだ。

そして、頭の中で地図を広げながら一番近くの詰め所を探していると、向かいから傘を差した、黒いローブを纏った男がやってくるのが見えた。その男の服装は祭服だったが、カトリックでもプロテスタントのそれでもないように見えた。

初めて見る制服だったが、ソフィアには猛烈な既視感と心当たりがあった。彼はエクソシストだ。感じる既視感は、かつてデイスプレイの中でその制服を見たからだろう。

二人はまるで示し合わせたかのように、とある公園の前でばったりと出会い向かい合う。そして、ソフィアが鷺鼻の男を公園の方へと押し込むと、彼を含めた三人が、公園へと入っていく。

公園の入り口からは死角になりそうな場所に三人がやってくると、エクソシストの男が口を開いた。

「探しましたよ」

「ほう？」

エクソシストの男がそう言えば、ソフィアは面白そうな声をあげる。鷺鼻の男は力のない声で「いい加減にしてくれ」とつぶやいていた。

ソフィアは男のその声を聴くと眉を顰め、ため息交じりに彼をエクソシストへと突き出す。

「引き渡してもいいか？」

「もちろんです」

エクソシストは鷺鼻の男を引き取ると彼に傘を差して、自分は雨に濡れ始めた。そして、ソフィアは肩をすくめながらポケットに手を突っ込んで口を開く。

「で、どこからどこまで見ていた？」

エクソシストの男はにこやかな笑みを浮かべながら、「話の早い人

は好きです」と前置きをしてからイーストエンドの方角を見る。

「異界が消失した後、悪魔を処理したあなたを追いかけたかったのですが、懸念事項がありましたね。追いついたのはつい先ほどですよ」ソフィアはその懸念事項を考える。付けられる当たりはそう多くはない。近くで何者かが見えていた可能性を真つ先に指摘する。

「あの木端悪魔にも見張りがいたのか？」

「いえ、探したのですが居ませんでした。捨て石だったのでしょう」

エクソシストがあからさまに肩を落とすと、ソフィアはそんな彼を鼻で笑う。ソフィアのそんな態度に傷ついた、と表情を変えるエクソシストは右手を差し出した。

「オリヴァーです」

「ダンだ」

ソフィアはポケットに手をつ突っ込んだまま、握手には応じずに面倒くさそうに偽名を名乗る。そして、沈黙が場を支配し、鷲鼻の男の僅かに身じろぎをしたのか、湿った衣擦れの音が響いた。

やがてその沈黙を破ったのは、ソフィアの気だるげな声だった。

「エクソシストって所か？」

「ご明察」

「まあね」

元々知ってたから、とは言わず。なぜ自分のことがバレたのかの理由はオリヴァーが自身で勝手に考えるだろうと、ソフィアは説明を投げ捨てた。

（いかようにも勝手に解釈してくれるだろう。はてさて、彼のことはどこまで探れるかな。

できれば今エクソシストたちがどこまで事態を把握しているのかを知っておきたいが）

そんなことを考えていたソフィアが、雨に打たれながら問いかける。

「アラン・ホームズの死を捜査する警察官が次々失踪し、君が駆り出された」

ソフィアが視線をオリヴァーに向ければ彼は頷く。どうやらオリ

ヴァーは対話に応じてくれるようだった。それならばと、ソフィアは腕を組みながら彼と向かい合う。

「そして、容疑者の周りに悪魔の気配を感じ、様子をうかがっていたら私が来た」と

「そうですね。警察官の連続失踪がまさか悪魔と関係しているとは予想外でしたが……」

オリヴァーはわずかに目を細めながらソフィアのことを見る。彼の視線には疑念の色がありありと浮かんでいた。

「なぜ、あなたが悪魔を滅することが出来たのか、実に気になりますね。私のような専門家でもない限り、入念な下準備が必要だと思うのですが」

「ある程度予測できていたからな」

（私とアランが異界に飲み込まれた過去があるという事を把握していないのは明らかか。アランが魔法使いだったという事も把握していないのか？）

ソフィアはどこまで情報を開示するべきかを考える。メリットとしては協力と信用が得られる可能性が高い点、デメリットとしては情報が漏れる事とシャーロットに累が及ぶ可能性がある点。

ソフィアはその二つを天秤にかけ、やがて、決心する。

（エクソシストは基本的には味方だ。シャーロットに関しても、彼女のことがバレルるのは時間の問題だ。情報の価値が高いうちに売り込んでしまおう）

「聞きたい情報がある」

「……」

ソフィアのその言葉に、オリヴァーは拒絶の沈黙をする。しかし、ソフィアはその沈黙を破らせるほどの情報を大量に持っているのだ。「なに、一方的には聞かないさ。こちらからも情報を出す。交換という。」

私が欲しい情報は、エクソシストたちがどこまで事態を把握し、どれ程の戦力があるか？という事だ。

逆に言えば……」

わかるだろう？とソフィアが肩をあげて見せれば、オリヴァーは口元を手で隠して考え始める。目は細められたまま油断なく、ソフィアのことを睨みつけていた。

「あなたは事態のおおよその全貌を把握している。私たちのことを知れば、どう対処すればいいのかが分かる。

とでも言いたいのですか？」

「そんなところだ」

ソフィアが上げた肩をそのまますくめると、オリヴァーはちらつと驚鼻の男を見る。そして、すぐに男から目を放してソフィアのことを見た。

「信用できませんね。そもそも、あなたのその提案は、我々が事態を把握していないという前提のものです」

「把握しているのか？していないだろう。」

把握しているのなら、私が悪魔に対して準備をできた理由も、何故アランを殺したその男の周りに悪魔がいたのかも想像できるはずだ」

ソフィアのその追求にオリヴァーは目を瞬かせ、未だに降る雨を煩わしそうに濡れた顔を手で拭う。彼は雨水を拭った手で、そのまま額に付いた髪をかき上げながらため息をついた。

「お察しの通り、我々は後手後手に回り続けています。腹立たしいことですが」

「ふむ。では、ロンディニウムの地下のことは何も把握していないかな？」

オールバックになって額をさらけ出し鋭い視線をしたオリヴァーは、目の前のなぜか楽しそうな包帯の男のことを睨みつける。

「地下ですか。我々はつい最近までヨーロッパ各地を巡る羽目になっていましたから、それについては知りませんでした」

「ヨーロッパ各地……、ああ、コレラは大丈夫だったか？」

「大丈夫ではありませんでした。私も罹って生死を彷徨いましたからね。……ロンディニウムで流行しなかったのは不幸中の幸いだと思っていたのですが」

（コレラのパンデミックは悪魔の仕業。そして、ロンディニウムは意

凶的に流行らなかった、ね)

史実では19世紀初頭からベンガル地方で流行し始め、やがてアジア各地やヨーロッパ全土を巻き込んだ流行を見せたコレラ。この世界でも同じようにパンデミックが発生していたが、不思議とロンドンイニウムでは大規模なパンデミックは発生していなかった。

オリヴァーの口ぶりから察するに、このパンデミックをコントロールした黒幕がいるようだった。原作知識でソフィアはそれを知っていたとはいえ、現実では通常のパンデミックで偶々検疫が上手くいったのか、そうではないのかは区別がついていかなかった。

「次の流行は防げそうか？」

「なんとか、と言ったところですね」

「不安だな」

原作ではある程度は成功するが、完璧とはいかなかった。ソフィアは目の前の男の雰囲気からやはり難しいかと察し、自分でも手を回すことを決意した。

「5人がコレラで亡くなりました、我々は大打撃ですよ」

「なるほどね。人員補充を王様にでも希こいねがつてはいかがかね？」

「は？王に？」

「おっと失礼、流石に不敬かな。でもまあ、彼のお方に近い人に頼んでみるといいさ」

王について言及した瞬間、剣呑な雰囲気醸し出したオリヴァー。それに対してソフィアはおどけた様に首を傾げ、手を広げて見せる。それに対して、オリヴァーはなおもソフィアのことを睨みつけたが、仕草はおどけて見せているものの目は本気だという事に気が付くと、表情を強張らせた。

わずかに体を震わせるオリヴァーに、ソフィアは広げた手を下ろし、片手をポケットに突っ込む。そして、自然体で口を開いた。

「そういう事だ。整理する時間も必要だろう。今日はこれくらいにしておくか」

(エクソシスト達が何も把握していないことも知れたし、彼らに事態の深刻さを伝えることはできた。まあまあの収穫だろう)

「え、ええ……。わかりました」

「動揺しすぎるな。誰がどこで見ているかわからない」

ソフィアはもう終わりだと言わんばかりにそのまま立ち去ろうと踵を返し、動きを止める。そして、オリヴァーに背を向けながら静かに声を発した。雨音にかき消されるギリギリの音量だった。

「気を付けろ。」

相手の方が一枚も二枚も上手だ。君達がヨーロッパ中をたらい回しにされたのも計画の内だろう。

加えて事態はこれから一気に進むだろう。が、焦るな。

決して、焦るな。もう何年も私とアランは動いていた。いくつかの策はもうすでに用意されている」

ソフィアは言いたいことを言い終えると、歩き始める。オリヴァーの返事が聞こえたのに片手をあげるだけで応えた彼女は、身軽になった体で時間があれば寄ろうと思っていた場所へと足を向ける。

雨の中長い時間歩いただけではない体の重さと、精神的な疲労を感じつつたどり着いた場所は墓地。アランが眠っている場所だった。

ソフィアは昼間は葬式を遠目に見ているだけだった敷地へと入ると、真つすぐアランの墓標の前まで歩いていく。すると、どこからともなく雨に濡れた黒い犬が現れ、ソフィアの行く手を阻んだ。

(こいつは何だったか……最近読んだ本に書いてあったな)

ソフィアは赤い目をこちらに向け、アランの墓標の前に座る犬を見ながら少し考える。見るに悪いものではないが、だからと言ってソフィアを通す気はないその様子に、彼女は最近覚えた伝承の中からその犬の正体を引き出した。

「チャーチ・グリムだったか？大丈夫だ。私はここに眠るアランの友人だ」

ソフィアは膝に泥が付くのも気にせずにしやがんで、目の前の精霊の一種であるチャーチ・グリムへと語り掛ける。死者の行末を暗示し、墓守でもあるこの犬は目の前の包帯男に首をかしげるばかりで、ソフィアは目の前の犬の可愛らしい仕草にわずかに口角をあげながら顔の包帯を外していく。

「これでいいか？」

ソフィアがそうやって問いかけるも、チャーチ・グリムは退こうという気配は見せず、彼女はどうしたものかと立ち上がる。すると、チャーチ・グリムは何かを感じたのか立ち上がって、アランの墓標へと素早く振り返った。

そこにいたのは、緑色のドレスに身を包んで、尖ったナイトキャツプのような帽子をかぶった妖精。ピクシーだった。

「ほら、犬っ子、どきなさい」

ピクシーがしつしと手を振ると、チャーチ・グリムは渋々と言った様子でアランの墓の前から動いて、その墓標の横に伏せてしまう。

「信用されてはいないな」

「まあね。あんたは見るからに怪しいし、多少知識はつけたみたいだけど、魔法使いでもなんでもないもん」

ソフィアが肩を落としてそう言えば、ピクシーはアランの墓標を撫でながら応える。そして、ソフィアがピクシーを前にどうしようかと考えていると、彼女が首を傾げて口を開く。

【お参りしないの？】

「ああ、そうだな」

自分のことは気にしないでいいというピクシーに、ソフィアはやりにくさを感じながらも、墓石に向かって言葉を投げかけた。

「あれほど気を付けろと言ったのに、死んでしまうとはな。」

……私は悲しいよ。

君はどこまで知った？ 私に言いそびれたことはないか？ 遺したものは？」

ソフィアはそう言った後、ふとシャーロットのことを思い浮かべた。彼女は結局納得はしなかった。納得しなかったという事は、彼女は自分達の後を追いかけてくるだろう。それがどれほど危険な行為であつても、それを理解しながら歩みを進めてしまうはずだ。

「これは……根拠のない直観だが、もし君が私に遺したものがあつたのなら、それは恐らく君の娘が持ったままだろうね。」

君は娘を巻き込みたくはなかっただろうが……駄目だろうか」

ソフィアはちらつとピクシーのを見る。彼女は墓石に座ったまま、ふてくされた様にひざに肘をついていた。

「彼女は君が思う以上に、君のことを愛していた」

「私だって、アランのことを愛していたわ」

「嫉妬は見苦しいぞ、ピクシー」

ソフィアが不機嫌なピクシーにそう言えば、彼女は墓石の上に立ち上がり拳を振り上げた。しかし、墓石の元に伏せるチャーチ・グリムがわずかに鼻を鳴らすと、ここが静かにしないといけない場所だという事を思い出したらしく、彼女はその振り上げた手を下ろす。

「君を殺した男は捕まえておいた。処理はエクソシストたちがしつかりやるだろうさ。」

彼らも彼らのプライドがあるだろうから、きつとうまくやるはずさ」

【なあんで、そのクズを殺さなかったのよさ】

「別に殺しても良かったんだが、アランの娘がね。彼女は優しい子だしシャーロットのことを思い浮かべながら、困ったようにソフィアが笑えば、ピクシーは感情のやり場に困ったように渋顔をしてそっぽを向いてしまう。」

そして、ソフィアはピクシーの美しい羽根を見ながら、ふと気になったことを問いかける。

「アランの娘は、魔法使いとしてどうだ？」

【……】

「どうした？」

問いかけに何も言わないピクシーに、ソフィアが訝し気な表情をする。ピクシーは腕を組んで、墓石をつま先をトントンと叩けば、組んでいた手を解き、と落ち着きをなくしてしまう。

そして、腰に手を当てて俯きながら何かを考え始めると、やがて振り返ってソフィアのことを見上げた。その表情は悲しそうで、苦しそうで、不思議と雨に濡れていなかった妖精の頬にはわずかな水滴があった。

【アランにはシャーロットのことはそっとしておいてくれって、頼ま

れてたの。

それも、あたしだけじゃなくて皆だよ。わざわざ色んなところに出向いて、娘のことはそつとしておいてくれて。

でもさ、あの子、危ないことに首突っ込むんでしょ？」

「突っ込むだろうな」

ソフィアが確信を込めてそう言えば、ピクシーは下のチャーチ・グリムに目を向けた。

「なら、あたし達のこととはよく知っておかないといけないと思う。この、街中にある懐かしくて危ない気配は、多分あたし達と同じモノだから。

アランはある程度は教えたって言ってたけど、たぶんそれじゃ足りない」

「もしかして、彼女は才能があるのか？」

ピクシーは再び顔をあげ、愛しのアランとの約束を破ることになるだろう呵責に苛まれて苦し気な表情をしながらも、ソフィアの問いかけに答える。

「ある。アランよりもずっと。」

「ここ100年……ううん、もっと古い時代から数えても、見たことないほど」

「そうか。ありがとう」

(ゲーム内の描写を察するに、才能はあるのは分かっていたが、それほどだったのか。

どうしたものか……。今すぐには結論は出せないな)

ソフィアはこれからのことを考えながら、懐に手を入れ、リボルバーを取り出す。それに素早く反応したチャーチ・グリムが立ち上がり、ソフィアのことを威嚇し始める。

「大丈夫だ、チャーチ・グリム。少しうるさくなるが、私なりの弔いだと思っただけだ」

ソフィアはそう言いながらリボルバーのシリンダーをスライドさせて取り出し、その中にポケットから抜き取った一発の弾丸を込めていく。

その弾丸に強く反応したのはピクシーで、彼女は目を丸くさせながらソフィアの手元を見た。

【随分と力を感じるけど】

「これがあれば、悪しきものは近寄ってこないか？」

「うん。よっぽど力が強いんじゃないと、手出しできないと思う」

「それなら良かった」

ソフィアはシリンダーを戻した後、ハンマーを持ち上げながら天に向けて銃口を向ける。そして、しっかりと腕を伸ばしてから、ゆっくりとアランの墓標の根元へと照準を合わせた。

「わざわざ聖別して色々彫りこんだんだ、花は手向けてやれないが、これの方がいいだろう？」

昔渡したお守りの銀弾が無意味に終わったのは謝ろう。その代わりと言っては何だが、アラン」

一拍。

「後のことは私が全て引き受ける。事件のことも娘のことも」

ソフィアは、ゆっくりと引き金を引いた。

「だから安心して眠っていい」

少ない火薬で発射された弾丸は一瞬白銀の軌跡を描き、その寂し気な銃声は雨が地を叩く音に直ぐにかき消されていくのだった。

卒業

ヨーロッパの大学の卒業式はおおよそ6月から7月に行われることが多い。

ソールズベリー女学校もそれは例外ではなく、卒業式は7月の夏真っ盛りに行われていた。システムの上では学位取得さえすれば卒業を申請できるようなにはなっていたが、式典は全員纏めて行うようになっていた。

シャーロットが天涯孤独となつて一年と少し、夏真っ盛りと言つても過ごしやすい気温のソールズベリーに、多くの女生徒とその親族が集まり、大学敷地内に存在する大ホールで卒業式が行われる。

設立者であり学長でもあるジョージが壇上でラテン語で式を進行していき、やがて彼の言葉が終わると、取得した学位によって異なるアカデミックガウンに身を包んだ女生徒たちが世話になつた教師陣と学長への元へと歩いていき一言二言挨拶を交わしていく。

無論、ソフィアも自身が指導した生徒それぞれと握手を交わしていく。

その中には当然、黒い礼服に身を包んだシャーロットがいて、彼女はわずかに寂しそうな表情をさせながら、ソフィアの前まで歩いてきた。

「卒業おめでとうございます。まだ教師生活は短いですが、君ほど優秀な子は早々現れないでしょう」

「ありがとうございます。私も貴女ほど素晴らしい先生に会えて、その上指導も行っていただけただけことは望外の喜びです」

二人が固く握手をすると、シャーロットは目を伏せて目礼をしながらソフィアの前を去っていく。入れ替わりにやってきたのはオーガスタで、彼女は晴れやかな笑顔でソフィアに手を差し出した。

しかし、ソフィアは悪戯っぽい笑みを浮かべながら彼女の手を取る前に口を開く。

「卒業おめでとうございます。君ほど手がかかって、頭を悩ませた子はいませんでした。その分、私も多くを学ばせていただきましたが」

「嫌ですわ、先生。今日くらい素直にほめてください」

少し拗ねた表情でオーガスタがそう言えば、ソフィアは優しく微笑みながら彼女の手を取る。

「そうですね。君は素晴らしい洞察力を持ち、特別なコミュニケーション能力がありました。君を生徒に持てたことは私の誇りです」

「私こそ、至らぬことは多くありましたが、実に多くのことを学ばせていただきました。本当にありがとうございます」

彼女は握手の後、アカデミックガウンの裾を片手で小さく摘まんで僅かなカテーシーをする。深く膝を折るような本来の仕草ではなく、いつの間にかこの女学校の伝統になっていたやり方で敬意を表した彼女に、ソフィアはわずかに視線を上に向けてることで呆れたことを表現する。

わざわざソールズベリーに家を借りて大学に通っている内に、完全に校風に染め上げられてしまったらしい彼女だが、本来は王位継承権すらもつ王族なのだ。あまり変なことを覚えるようなら、その責を問われるのはソフィアである。

一瞬、勘弁してくれ、と思ったが、そこを含めて自分の良き生徒だったのだからと、去っていくオーガスタの背にソフィアは微笑みを向けるのだった。

その後も卒業式はつつがなく進行し、やがて式典が終了すると、会場を移して豪華な晩餐会となる。

ソフィアが講堂から出ると、同じく出てきたジョージと鉢合わせになった。彼はもう豪華な衣装に身を包むことに慣れ切っており、成功者の顔つきをしていた。

そんな彼にソフィアはガウンの袖をはためかせながら腕を組み声をかける。その表情は、先ほどまで持っていた教師としてのものとは正反対な威圧感さえ感じるものだった。

「美しい羽で着飾っているようだな」

「これはこれは……ソフィア。立派な鳥に見えるかね？」

ソフィアに話しかけられたジョージは恭しい敬語を使いかけたが、すぐに首を振って礼儀正しい親の表情になる。そして、質の良いアカ

デミックガウンを手のひらで撫でながらそう問いかけると、ソフィアは鼻を鳴らして答える。

「まあまあだ。もとより侯爵としていっばしの雰囲気はあったんだ。それに多少投資家としての貫禄が加わったところで、そう変わらな
い」

「ははは、面白い冗談だ。最近になってようやくだよ、大貴族となれたのは」

二人は並んで歩き始める。ソフィアは女性としては背が高かったので、ジョージとそう目線は変わらず、傍から見るとやはり親子なので顔つきなどによく似た雰囲気があった。

新鋭の学者と投資家として空前の成功を収めている学長、二人の関係を知らぬ者はこの女学校にはおらず、二人が歩いていく先を人々は自然と道を譲る。

「これは気分がいい」

ジョージがぽつりとそう言えば、ソフィアはかつて彼に言った言葉を思い出す。

「名誉も金も、手に入ったか」

「ええ。まさか、殆ど合法的な方法でこうなるとは思わなかったが」

ジョージは実に晴れやかな表情で頭を下げてくる生徒や、その親族に手を上げて応える。

「とはいつても、随分こき使われて金を使う暇がないのが残念だ」

「大量に馬を買っているだろうに」

「貴族の嗜みですから」

ソフィアが笑顔のジョージのその言葉に肩を落とし、それからしばらく歩いているとやがて晩餐会が行われる大ホールに二人はやってくる。そして、開け放たれた扉から入ると、そこには立食形式ですでに軽食が振舞われ始めており、人々が食事を楽しんでいた。

スーツに身を包んだ男性と、アカデミックガウンに身を包んだ女性と、それからドレスに身を包んだ女性とが入り混じり、中には欧州以外の文化圏の民族衣装を着た人間すらいた。

世界中を見渡してもここで見られないだろうその光景に、ソ

ファイアは満足げに頷く。

そして、ソフィアが挨拶回りに行こうかとジョージと別れて歩いていると、前から老年期に差し掛かっているように見えるがガタイの良い男がやってきた。

彼女はすぐに自分への客だろうと察すると、手近なテーブルからアルコールの入っていないグラスを手に取る。

「こんにちは。初めまして、私はエドワード・パジェットと言う者です」

「こちらこそ初めまして。ソフィア・ロングフェローです」

二人が相對すると、まずは挨拶から入る。しかし、慣例的にお辞儀やカテゴリーはせずに、二人は対等な立場として握手を交わすことで挨拶を終える。

少なくとも、このホールの中では握手による挨拶を奨励していた。様々な身分、様々な文化圏から人間が集まっていたので、作法の行き違いをなくすためにそうしていた。だが、保守的な観点から見るとあまり良い決まり事ではないだろう。

(とはいっても、女学校だからそれ以前の問題なのだが)

握手を終えたソフィアが内心笑っていると、パジェットは全く内容が減っていないグラスを手に口を開いた。

「博士がオーガスタ様を指導してくださったのですよね？」

「ええ」

「彼女の大学での振る舞いについて教えていただきたい」

「もちろんです」

ソフィアは目の前の男が王室からの使者であろうことに当たりを付けると、オーガスタについて簡単に伝えていく。基本的には真面目だが、フラストレーションがたまるとお転婆になると教えると、パジェットが大きくため息をつく光景は面白くはあつた。

その後もいくつかのことを告げ口すると、パジェットはその度に呆れたような表情をし、やがて一通り話を聞き終えると顔を引き締め、これが本題だと言わんばかりにソフィアへと言葉を投げかけた。

「オーガスタ様の専攻は経済学でしたか。彼女の論文はいかに？」

「素晴らしいの一言です。視野が広く、多くの課題を見つける才に恵まれています。ただ、数学が苦手ですね」

「そうですか」

そう返してからパジエツトが目をつぶって何かを考え始めると、遠くから件の女生徒の「せんせーい」というのんきな声が聞こえてきた。

ソフィアがそちらに目を向けると、手をぶんぶんと振る楽しそうなオーガスタと困ったような表情をするシャーロット。そして、オーガスタがふと視線をソフィアから横にずらすと、一瞬で喜色が驚愕の色へと変貌する。

「なっ！パジエツト！なんでここに！？インドに行っていたんじゃ！」

「任期は終了したので」

ソフィアはオーガスタのその発言に、先ほど握手の時に感じた手の感触を思い出す。パジエツトは軍人かなと、一人思いながらグラスに口を付けていると、事態はパジエツトとオーガスタを中心に回り始める。

「殿……お嬢様。お嬢様が正しく成長できているのかを確認しにきたのです。見るに、実に自由に生活してらしたようで」

「むむむ……」

一瞬殿下と言いかけたパジエツトは首を振ってすぐに言い換え、オーガスタにチクチクと小言を言い始める。ソフィアは一人事態に置いていかれたシャーロットに目配せをして黙っているように伝えながら、横から口を挟んだ。

「我が校では礼儀作法の授業もありますよ」

「ほう？本当ですか？」

「必修です。様々な国から留学生が来るため、統一された礼儀作法は必要ですから」

この場では無礼講ですが、とソフィアが付け加えながら火に油を注げば、オーガスタは目を見開き、すぐに和やかなものにして口元に手をやって形だけは貞淑に見せる。

「シャーロット様と飲み物でも取りに行つてまいりますわ」

そして、実質的な逃亡宣言をしながら、自分も何か飲み物をと視線

を彷徨わせていたシャーロットを巻き込もうとする。それに彼女は驚いた表情をしていたが、流石に王族のごたごたには巻き込まれなくなかったのか固辞するかのように首を振った。

「お待ちください」

それに待ったをかけるのはもちろんパジェットなのだが、彼の雰囲気は先ほどオーガスタに小言を言っていた時とは変わって僅かに剣呑な雰囲気をもとわけていた。

その雰囲気の変貌にオーガスタは目を細め、シャーロットに視線を向ける。

「シャーロット様、私の分の飲み物を含め、グラスを二杯とって来てくださる？」

「はい。かしこまりました」

シャーロットも愚かではない。自身に聞かせられない話があるのだろうと判断して遠くのテーブルまで足を向ける。

それを確認し、周りに耳を傍立てているものがないことを確認したパジェットは、オーガスタとソフィア両名に視線を向けながら静かに告げるのだった。

「伯父上からの伝言です。『しばらく勉学に励め』と」

オーガスタはその言葉に直ぐに頷くようなことはしなかった。ソフィアは何でもないかのようにグラスを口に運び、周りからの視線にあくまでただの世間話だと演出してみせる。

「どれほどの期間ですか？」

「分かりません。ただ、伯父上曰く『博士号でも取っておきなさい』とのことですよ」

パジェットはそう言いながらソフィアへと目を向ければ、彼女はすぐに頷く。

「微力を尽くしましょう」

そうやって、ソフィアが言外に面倒を見ることを確約すれば、パジェットは頷いて視線を遠くの方のシャーロットへと移す。彼のその目の動きの意味を悟ったソフィアは、手元のグラスの中の飲み物を一気に飲み干し、口を開く。

「軽食でも取ってきます」

そう言いながらソフィアは二人に背を向けると歩き去っていく。後に残されたオーガスタとパジエットは、ソフィアが完全に立ち去ったのを確認した後真剣な表情で言葉を交わし始める。

「さて、パジエット、話せる範囲で話しなさい」

「伯父上は『あまり知りたがるな』と」

その一言の伝言で不愉快そうな表情をしたオーガスタに、パジエットは少し何かを考えるようなそぶりをした後、続いて口を開く。

「伯父上は勉強において優秀な成績を修めているのであれば大学に留め置き、そうでなければグランドツアーに連れ出せと仰っていました」

「つまり、とにかく『家』から離れろと」

オーガスタの言葉にパジエットは否定も肯定もしない。しかし、自身の意見を言う事にはしたらしく、遠くを歩いているソフィアの後姿を見つめながら呟き始める。

「彼の御仁は、かつてのナポレオンのようです。私のような俗人からは及びもつかないような高い視点を持っていらっしやる」

「高い視点？」

「二つの戦場だけではなく、戦域全体を見通すようなものです。私は先の戦争でナポレオン軍と戦いました。その時と同じような、底知れなさをロングフェロー家からは感じます」

オーガスタはパジエットの言葉にいくつか心当たりがあった。西はアメリカ、東はインド、南はケープ植民地、ロングフェローの手は世界中へともうすでに伸びている。オーガスタ自身、ネイティブアメリカンやインド人の知り合いはこの大学でできたし、着飾る時に身に着けているネックレスのダイヤはケープ植民地にあるロングフェロー家が持っている鉱山から産出した物だった。

まだ学生の時分で経済学を極めたとは口が裂けても言えないほどだが、ロングフェロー家は長大な航路と膨大な販路をもうすでに構築し始めている。それを支えるのは、数多の新技术。

そして、それらが生まれた場所は、この大学だ。

「殿下。ああいった手合いの人間とは表立って敵対せぬことです」
「ええ。心得ていますとも、先生とは仲が良いのですよ」

オーガスタは伯父から受け取った言葉の真意を理解しようと努める。なぜ多くを語らなかつたのか？なぜパジエツトを遣わせたのか？なぜは多く、回答は少ない。

「ああ、それから、しばらく私が護衛につきましますので、そのおつもりで」
「え？？」

パジエツトの最後の一言に、オーガスタはカエルが潰れたかのような悲鳴を上げるのだった。

一方のオーガスタと別れてシャーロットと合流したソフィア、彼女は空いたグラスを途中で給仕に手渡していたので手ぶらだった。そんな彼女はシャーロットに微笑みながら口を開く。

「改めて、卒業おめでとう」

「ありがとうございます」

シャーロットも嬉しそうに笑えば、ソフィアが一瞬遠い目をする。

「無事に卒業できてよかった」

父が亡くなつた事を暗喩するその言葉に、シャーロットはわずかに影が差す笑顔を作つて頷く。そして、何かを誤魔化すようにグラスの中のサイダーを舐めるように飲んだ。

「サイダーが好きなんですか？」

「はい。好きです」

「そうなんですね。覚えておきます」

ソフィアは自分もサイダーの入ったグラスを手に取り、それを一口飲む。わずかな炭酸と甘さ、それからアルコールの苦い味。ソフィアはその味にわずかに眉をひそめて、グラスを置いてしまう。

「ところで、君は卒業後の進路はどうするのですか？今まではぐらかされてきましたが、今日はきちんと喋ってもらいます」

「ええつと……」

シャーロットはソフィアの追及に気まずそうな表情をして、彼女の視線から逃れるように視線を彷徨わせる。ソフィアはそんな彼女の様子に心の中のため息をつく、ある種の許しの言葉を投げかけた。

「君はもう私の手から離れました。好きにしなさい」

ソフィアのその言葉に、シャーロットはばつが悪そうな表情で頬をかきながら、自分が計画していたことを話し始める。

「少し旅に出てみようかと」

「旅？」

「はい。子供のころはウェールズに住んでいて、父はスコットランド生まれと言っていました。故郷を巡ってみようかと」

「ふむ……。最近では鉄道の敷設で交通の便が良くなりましたし、良い選択でしょう。普段とは違う環境に身を置いてみるのは新たな発見を得るチャンスです」

ソフィアはシャーロットの計画に口を挟む気もなく、頷いて彼女の選択を尊重した。シャーロットは尊敬する人物からの同意が得られたことに嬉しそうに笑う。

（旅を終えた後は聞かない方がいいか。分かり切っていることだし、ソフィアとして聞くことも無かろう）

「海外への興味は？」

「ううん……。グラントツアーには当然興味はありますし、新大陸も心惹かれますが、いかんせん——」

「グラントツアー！いいですわね！行きましょう！」

シャーロットの言葉の途中で後ろからオーガスタの期待を含んだ声が飛んでくる。

グラントツアーとは、貴族の子供がローマを目指してフランスやオーストリアなどを巡る海外旅行であり、当時の最先端の文化やかつてのローマ帝国を実地で学ぶという、今でいう修学旅行のような物であった。19世紀中ごろから下火になるが、この世界では鉄道の普及によりまだその習慣は残っていた。

当然金にかかる上、期間も最大年単位となるので、金銭的にも時間的にも余裕が無ければ実行は不可能なのだが、オーガスタは当然決行することが可能だった。

「もし行くのなら、先生が付いてきて来てくれるのですか？」

「ヨーロッパを巡る程度ではついて行きませんよ。アジア、新大陸に

も行かなければ、真にグラントツアーとは言えませぬね」

「い、行けません！そんなお金ありません！」

シャーロットは目の前に立つ女性二人がとんでもないお金持ちであることを今更ながら思い出し、僅かに青い顔をしながら首を振る。

そして、そんな彼女のことをソフィアとオーガスタが笑っている後ろで、パジエットは微笑みを湛えながらも油断なくソフィアのことを見つめ続けていたのだった。